

嫌はれてゐる。ただ何も御存じのないヨーロッパの御百姓さん達は、その猫つ被りの姿を思ひ違へて祈禱蟲の尊稱を捧げ、又支那の人は彼を勇敢の象徴として敬意を拂つてゐる。勇敢、さういへば或ひはさうかも知れない。尤もその實力にかけては、親類筋の缺蟲に敵ふかどうか怪しいものだが——此の蟲界の母性愛代表者は實驗の結果に依ると、自分の目方の五百三十倍の重さのものを曳く事が出来て、蟲界のゴリアースと謂はれてゐる。——意地つ張りだけは素晴らしきものがある。第一あのひよろひよろした體つきで居乍ら、まかり間違へば一と息に捻り潰されるかも知れない巨大漢、人間様に對してさへも、まるで勝算でもあるものゝやうに敢然として立ち向ふ。「おゝ勇敢なる者よ、汝の名は……」とつい言ひたくなるといふものだ。實際此の蟲は蟲の世界でも確に威張つてゐると云つて宜からう。それといふのも元はと云へば、二本の鎌、實は前肢の御蔭である。そして此の二本は、今では歩く事は残りの四本に殆ど譲り渡し、大半は手の役を務めてゐる。獲物をひつ捉まへる時、敵と戦ふ折、果ては嫉妬喧嘩の時に戀の相手と掴み合ふ道具にまで、惜氣もなく使つてゐる。それは又何と調法千萬な事であらう。

實際此の恵まれた武器の御蔭で、彼等蟻螂の一族は、蟲仲間でも柄不相應な優越な地位を占めてゐる事を否む譯にはゆかない。私は彼がギアギア喚いてゐる油蟬を、後肢を舉げてピシピシと蹴り飛ばしてゐる殿様ばつたを、辻強盜の蟲曳蛇を、全身をキチン質の鎧で固めた金龜子蟲の類を平氣で喰つてゐるのを何遍も實見してゐる。そればかりではない、嘗て「おほかまきり」の雌が、とかげの一種を引つ捉まへて、その首筋をモリモリやつてゐるのをさへ見た事がある。前肢の自由、それは何と恵まれた神の賜物であるか、吾々人間が今日在るのもその元は四足の生活から脱して、二本足の歩行に移つたのに因るのではないか。二本足の歩行それは寔に簡単な詰らぬ事のやうであるが、それが生物の生活に齎らす利益といふものは、到底も素晴らしい事は、吾々自身が確實に證明してゐる。その利益、その幸福を彼は正に與へられてゐるのである。彼が群雄割據の蟲界に在り、柄不相應な地位を占めてゐるのも亦宜なる哉と云はねばならぬ、ただ惜しむらくは彼には共同一致、相互扶助の精神が缺けてゐる。蟻や蜂を見給へ、彼等は手こそ持たないが、共同一致相互扶助にかけては天下その右に出づるもの無き動物である。

それでこそ、あの見すばらしい姿を持ち乍らも、吾々に亞ぐ文明生活をやつてゐるのである。さうした點で、蠶螂の特點と蟻、蜂の美點とを併せ具へてゐるのが吾々人間様なのである。

さて斯んなにも幸福な蠶螂、若し何かの機會に蟻の爪の垢でも煎じて飲み、共同一致相互扶助の精神の一片でも、あの貧弱な頭の隅つこに宿るならば、一躍人間様の次に座る事が出来る見込があるかも知れない彼等は、全く放縱不羈な生活を送つてゐるといつて宜い。

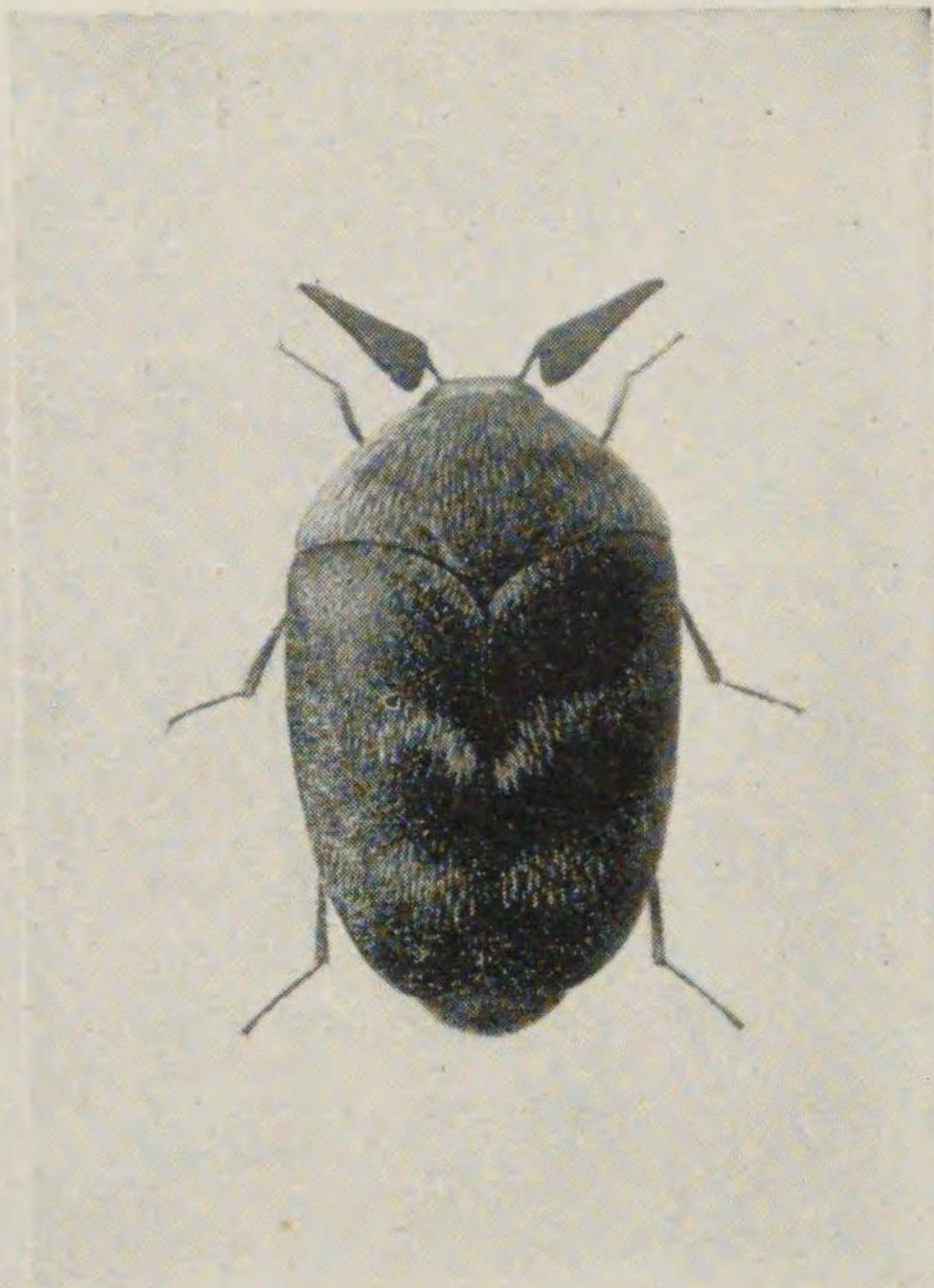
もつと高等な鳥獸は別として、蟲仲間には恐い者となない蠶螂一族は、喰べ放だい、遊び放だい、喧嘩の仕放だい、殊にその雌共と來ては人間世界の夏姫や高橋お傳にも負けない愛慾放縱の限りを盡してゐる。と云つたら「幸福なるものよ……お前の名は……」と蠶螂の雌を羨む方があるかも知れない、然し世の中に絶對の幸福といふものは決してないものである。この蟲界の我儘者にもやはり人知れぬ悩みと云はふか、天の制裁と云はふか、皮肉な運命の惡戯があるのである。

秋も更けて稻が黄色く稔り、見渡す限り黄金の波がゆらぐ頃となると、柿の木の頂邊に泊つ

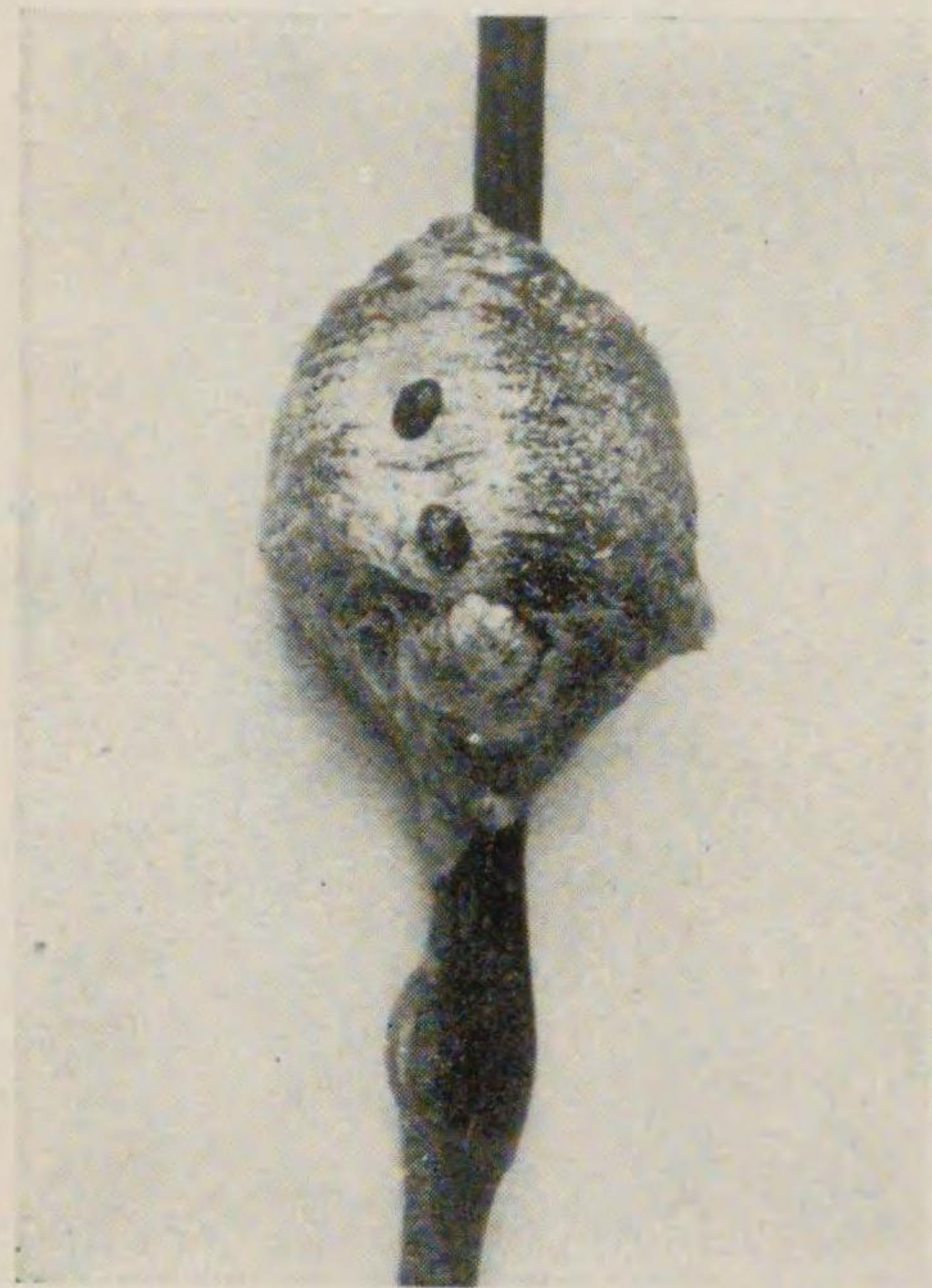
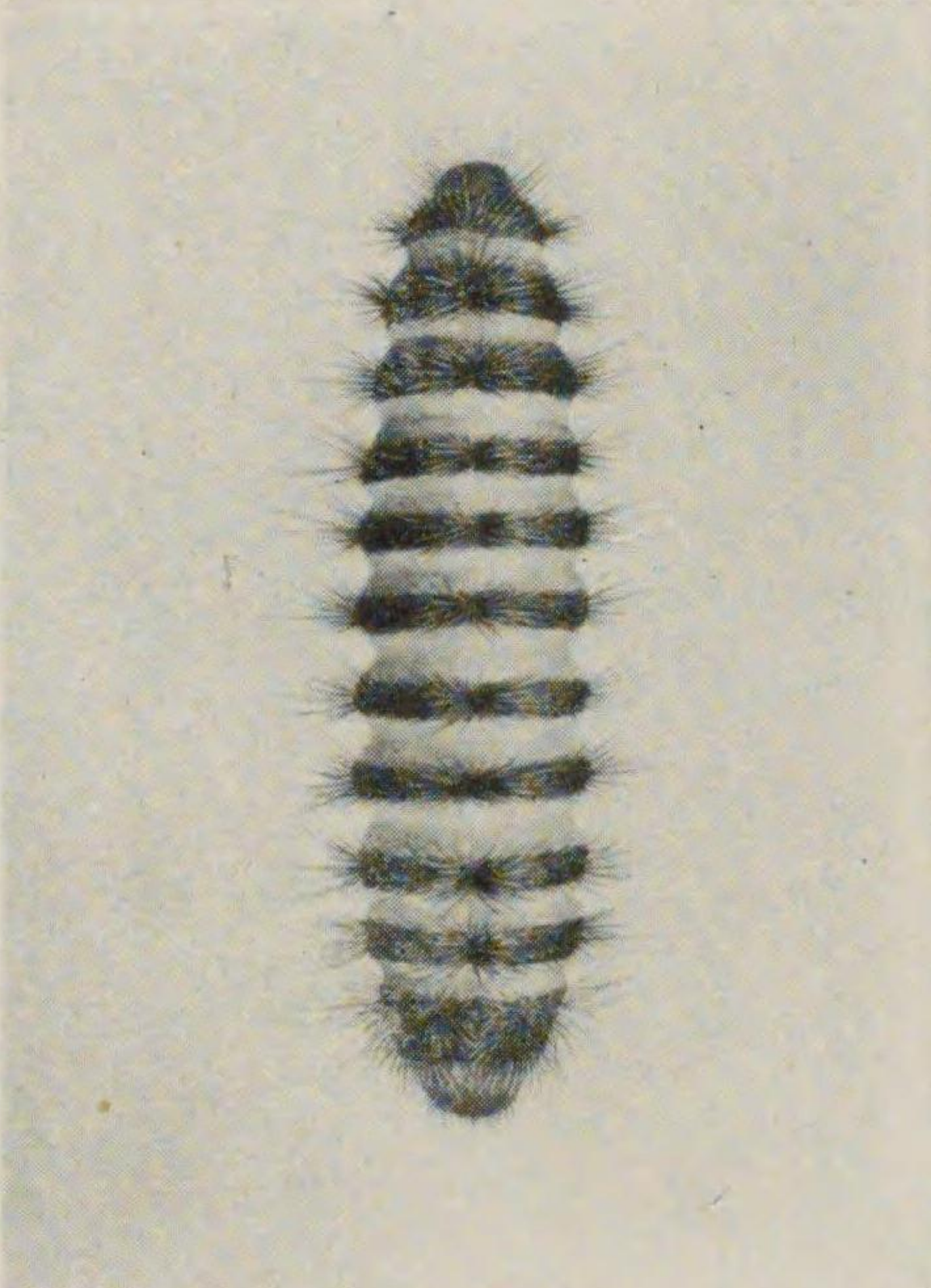
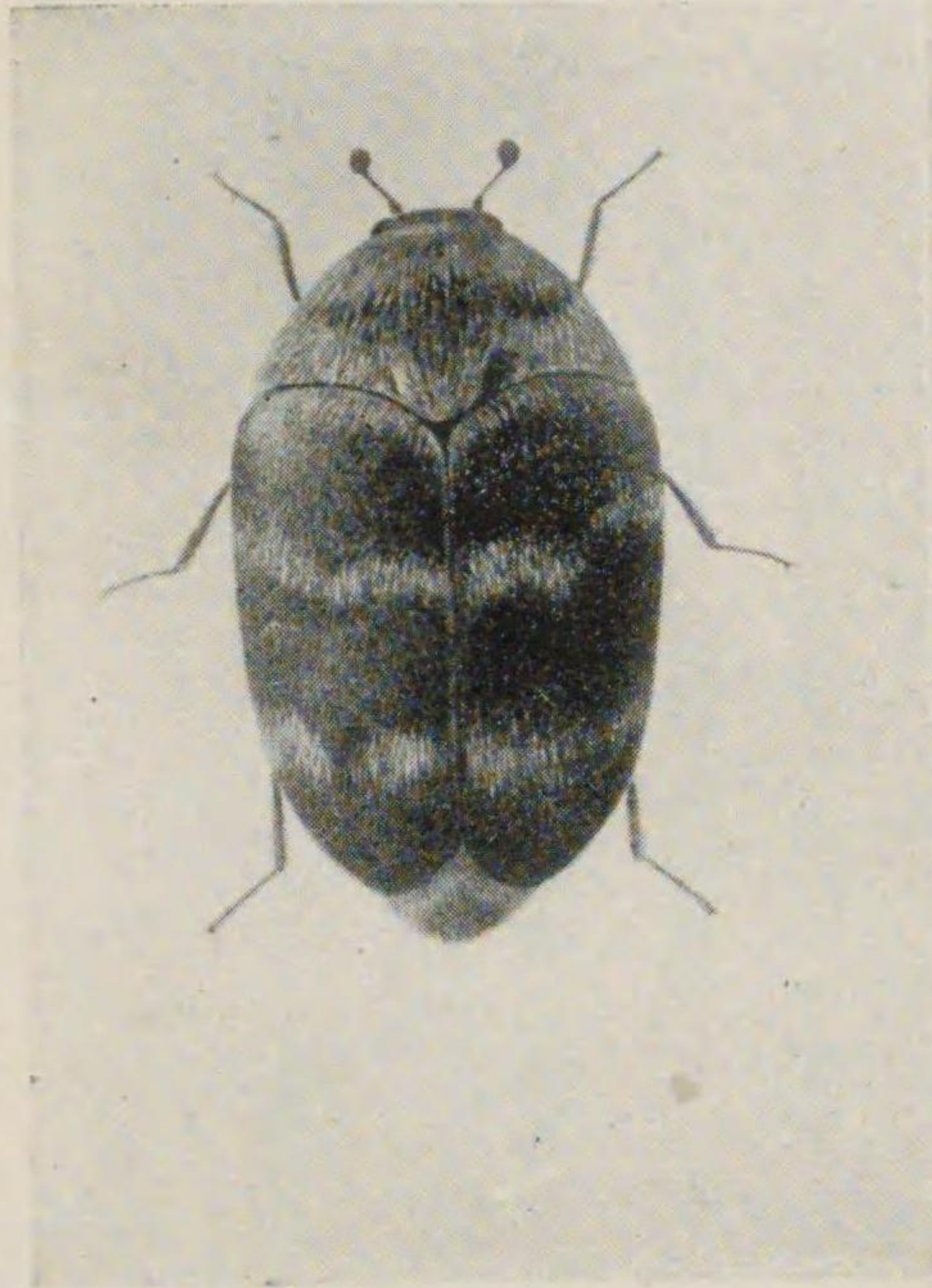
蠶螂の惱

全上幼蟲

雄のしむをつかむ盜を卵の蠶螂



雌 上 全



て來に卵産へ卵の蠶螂
←雌のしむをつかるる

て天下に呼號するあの百舌鳥は、此の蟲界のネロを見附けると忽ち引つ捉まへ、からたちの枝に磔の極刑に處し、曝しものゝ刑罰を與へる、だがそんな受難はまだまだ我慢する事が出来る。若し豫め相手の來襲に氣附いて、機會さへ與へられれば逃げ去る事も出来る危険である。だが、此處に如何に躡いても注意しても、所詮免れる事の出来ない、宿命的な危難、不倶戴天の仇がある。

秋も十月になると、唯物主義の生物達は皆夫々現世の生活に見切りを附けて、來る可き受難雌伏の生活の仕度に取りかゝる時、吾が蠅螂の未亡人も、そろそろ愛慾享樂の生活の總決算、子孫の存續、早く言へば御産の大役に取り掛る。蠅螂の女房にお産？ あれでもそんな神妙な眞似をやるのかネ、何處かで斯んな質問を發する人があるかも知れない。

あるとも、どんな鬼婆だつて、元々女性であるからには、まして男なら誰でもお出でとばかり、愛慾の限りを盡した此の淫婦に妊娠とお産のお灸は當然の事さ、だが私は今此處で、彼女のお産の詳しいプロセスを説く必要はない。

たゞ彼女は樹の枝、垣根の竹といふやうな所に、恰度金魚麩をちぎつて喰つ附けたやうな、

一と塊か二た塊の卵を容れたものをヒリ附ける、といふ事だけを言つて置けばそれで澤山だ。尤も蠚螂の種類に依つては、此の卵の容れものゝ形や大いさも違ふ。だがそれも今は敢て説明する必要を認めない。

さてお産が済んで了ふと、遺さいの彼女等も、もう此の世に何の希望もないかの如く、まるで氣拔け者のやうにぶらぶらしてゐるが、それでも長命なものになると、二十日間位も生きて、末は消えるやうに此の世を去つてゆく。それは誰が見ても安らかにも穩かな臨終である。

處でこれだけで事が済めば、それこそ蠚螂萬々歳なのだけれど、兎角世の中といふものはさう簡單には參らぬもので、彼女の女の此の世への唯一の置土産を目茶苦茶にして了ふ奴がひよつこりと現はれて来る。

九月の下旬から十月の上旬といふ頃、蠚螂の卵鞘らんせう——あの金魚麩みたいなのを、學問の上では斯う呼んでゐる。そして此の中にバナナ形をした、ほんたうの卵が百から三百位もぎつしりと詰つてゐるのである——の表面を、身の丈四耗ばかり、楕圓形と云ひたいが、一寸怒り肩の、

眞黒な翅には微かな白毛が、恰度胡麻鹽を振つたやうに生へてゐる小甲蟲——此の蟲の事を私はカマキリカツヲムシと呼んでゐる——が一匹か二匹、何か探しものでもしてゐるやうな風つきで、まごまごしてゐるのを見るであらう。若し不注意に見てゐるなら、それはほんの休息にでも來てゐる小蟲としか思へないだらう。だが諸君よ、此の黒い小さい生命こそ、蠚螂とは俱に天を戴かない、宿命によつて相容れない敵同志なのである。

蠚螂の卵へ來てその仕事をやつてゐるのは、何れも此の甲蟲の雌である。彼女はそれまで何處にどうした生活をしてゐたのか、それは私には未だ全く未知である。兎に角蠚螂の卵が産れると、まるで地の底から湧いてでも來たかのやうに、忽然として現はれ、卵鞘の上にフワリと降りる。どうして彼女は目的の卵の存在を知なのか、眼で探し出すのか、それとも臭かひで嗅ぎ當てるのか、何れにしても實に間違ひなく、彼女の子孫を托す可き當の目的場へと到着する。そして暫くはその表面をチョコチョコと歩き廻はり、球桿きうかんを眞二つに折り、それを頭の先に立てたやうな觸角ふきを細かく動かし乍ら、頻りと思案に耽つてゐる。一體何をやつてゐるのか、いふ

までもなく、彼女は自分の卵の産み所を探してゐるのだ。

蠶螂の卵鞘を採つて調べて見ると、その背面の中央の所に、薄い瓣が縦に直立して並んでゐるのが目に留るであらう。これは中の卵への通風口であり、又孵化した幼蟲が浮世へ出る唯一の通路でもある。此の通風口兼新生命の出口を彼女は求めてゐるのである。何故彼女が此の重要な箇所を知つてゐるのだらうか。

私は知らない、然し幾百世紀に亙つて培はれた本能の刺戟、それが彼女を驅つて其處へと押しやるのである。兎に角にも、やがての事に彼女は目的の門戸を見附ける、すると細い短い肢を心もち立て、前體を僅かに上げ、同時に尻を落して、瓣と瓣との間に産卵管を押し込んで、淡黄色、長楕圓の長さ〇・七耗足らず、幅〇・二耗ばかりの卵を、一襲の間に一粒から五六粒も産み込み、一匹で總計一五、六から二十粒を産む。斯うして彼女は自分の仕事を果し終ると何處へともなく姿を消し去つてゆく。恐らく蠶螂の女房がしたやうに、又産卵を済ました凡ての蟲の雌がするやうに、安心と氣拔けの裡に、夢の如く此の世を辭してゆくのであらう。

扱て斯んな事があつてから、六日か八日もすると、卵の中からは體長〇・八耗といふ白つばい、それでも蟲眼鏡で見ると、體一面に褐色の粗毛を生やした、塵芥のやうな生命——幼蟲——が生れて来る。此の微かな生命、吹けば飛ぶやうな幼蟲は、生れると直ぐ瓣と瓣との隙間をすり抜けて中の卵へと進んでゆき、ぎつしり詰つてゐる卵を片つ端から喰ひ嚙つて次第に身を肥やしてゆく。そして冬の間、總ての生物はその寒さと窮乏との大きな壓迫の手の下に苦痛と忍従との生活を餘儀なくされてゐる時、彼は厚い他人の卵鞘に護られ、食物の中に埋まり乍ら、寒さも餓も他處に、平和安穩な生活を送つてゆくのである。斯うして冬を越し翌年の四月も末になると、彼等はデツプリ肥え、體も五耗程になり、五月に入ると早々最後の着物を脱いで蛹になる。そして蟄伏する事一週間前後茲に愈々一匹前の親蟲となると、卵鞘の横つ腹を喰ひ破つてぞろりぞろりと這ひ出しておいでになる。まるで自分の住居から散歩へでも出かけるやうな顔つきで、去年の秋蠶螂の女房が、浮世への唯一の遺産として置いて行つた大事な大事な後裔の芽を、根こそぎ食ひ盡して置き乍ら、そんな事は夢にも知らないよと、云はんばかりの顔つ

きで……。

多くの諸君の中には、何かの必要から或ひは好奇心から、蠐螬の卵鞘の中から此の蟲が出て來るのを、でなければ中味がすっかり喰ひ盡されて藻^{もね}抜けの殻となつてゐるのを御覽になつてゐるかも知れない。『蠐螬が甲蟲に化けた』何も知らない人なら或ひはそんな事を思ふかも知れない。でないまでも蠐螬の卵の容れものを以て、この居候蟲の巢とでも思ひ込んで居る方が有るかも知れない。だが賢明なる讀者諸君よ、如何に世が進み、馬鹿が天才を産み、鳶が鷹を産む事はあつても、蠐螬が甲蟲に化ける事は決してない事を、私は太鼓判を捺して保證するであらう。

凡そ世の中に悩みのない生物はない。大海を泳ぐ巨鯨には鯨といふ強敵があり、揚々と大空を翔ける猛鷲もその羽の下に潜むだにの悩みがある。貧乏人には生活の苦しみがあれば、金持には社會主義者の脅威が付き纏ふ。蟲界を吾がもの顔に振舞ふ蠐螬にもやはり斯うした受難、それは何うしても免れる事の出來ない、宿命的な悩みがあるのである。それは何と又皮肉なそして慘酷な、自然の仕業であらう。私は秋になつて蠐螬の威張つてゐる姿を見る度に、此の吹け

ば飛ぶやうな微かな小甲蟲との無言の闘争、隠れた生存競争の事を思ひ浮べて自然に於ける運命の皮肉さを感じないでは居られない。

死を禮讚する者

私は四季の中で秋ほど好きな季節はない、それは心を搔きむしるやうな、春のあの惱ましさに比べると、何とまた人の心をそのどん底から洗ひ清めるすがすがしさを持つてゐることか。私、殊に夏の暑さに弱い私は、まだ蟬の合唱隊の全盛のところから、もうこほろぎやくつわむしの管絃樂團の黄金時代を、心から待つてゐる。

秋の女神、それは春の女神が華美好みで淫蕩享樂の權化であるのに反して、これはまた質素清廉、飽まで清い愛に生きようとする乙女のやうな倂がある。前者が興に乗り、多くの厚化粧をした従者に護られて、ゆらりゆらりと道中を上つて來る、女大名にも例へられるとすれば、

後者は執拗につき纏ふ殘暑といふ未練男を振り切つて、貞操を立て通さうとする貞女といった感じがする。それに二神は、總てのやり方がまるで異つてゐる。先づ春の女神は鳥を歌はせ、蝶を舞はせ、花を笑はせ、萬物を濃艶に仕立て、世を擧げて歡樂の園と化し、ひいてはわれわれまでも陶酔の域につれて行かうとする。だが秋の女神となると、先づ彼女は久しい淫蕩悅樂の風に濁つた空に磨きをかけて、鏡のやうに澄みわたらせてその心意氣を示し、それから空に白金の帯を渡し、黄金の星をちりばめる、野には薄化粧の清楚な秋草を配し、山には緋の帷を張りめぐらしたりして、自然の改造に意をつくす。そして身の周圍がすっかり彼女の好み通りに仕上ると、可愛い使者——百舌鳥——を梢に立たせ、世の中が愈々自分の統治になつたことを告げさせると共に、やがて來る受難時代に處すべき準備の必要と警告とを、凡ゆる生物に向つて叫ばせる。さてこの小さな使者の鋭い一聲が清澄な空氣を通して響きわたると、心ある生物は今までの歡樂の生活を棄て、皆それぞれ近くやつて來る嚴冬時代切り抜けの支度に取りかかる。先づ吾々の軒下に巢をかけて、毎日愛情と勤勉との生活の模範を示してくれた燕は、家

族をまとめて常夏の國へと移つてゆく、働き者の蜜蜂の働蜂達は、もう用のない雄蜂を殺して社會の大整理を斷行し、胡蜂のある種は、まだ巢に残つてゐる幼蟲までも棄て、生活の緊縮を計る。蝶の仔蟲や甲蟲類の多くは、石や向南の土堤の枯草の根際に潜り冬籠りに入る。春から秋へかけて、何時もにらみ合つてゐた蛇と蛙までが、過去のいさかひを棄て、吳越同舟の眠りにつく。そればかりではない、何時もぶつきら棒で通して來た黙りやの樹木までが、何時の間にか大事な芽を厚い鱗片の衣で包み、「冬なんか何時でも來い」といつて濟し返つて居るではないか。

かうしてあらゆる生物が、ひたすらに冬越の準備に忙しがつてゐる時、相變らず享樂生活のうち、戀と死とを讚美してゐる暢氣者がある。それは秋の鳴く蟲の一族である。彼等は日夜毎に、身をふるはし翅をすり合せてその短い生涯の最後の瞬間までも戀の曲を奏で、愛の歌を高唱し續けながら未練氣もなく死んでゆく、それは唯物主義を奉ずる我利々々の生物の多い中に、何とまた理想に生きる耽溺主義の一派であらうか。多くの世人は彼等の生活をみて、浮

華輕薄の者よと非難する。だが今日の楽しみを知つて明日の死を思はぬこの小さな生物の一群をみるにつけて、「おゝ、お前達こそいつはらぬ戀愛至上主義者、まこと死の禮讚者よ」と呼ばずにはゐられない。

秋の儉約家

いつも秋になるとひよつこり現はれて、寒さの近づくを報せる自然の使者に二つある。その一つは蟋蟀こはらぎで、もう一つは鴟ちだ。然し同じ使者でも御兩者の間には、そのやり口がまるで變つてゐる。蟋蟀が石の下や落葉の蔭や石垣の間などから、クリクリ、クリクリと、まるで湧き清水のやうな低い聲で、慎ましやかに秋の歌を唄つてゐるのに、鴟は高い樹の頂邊てうべんに陣取り、腹一杯の金切聲を張り上げて喚わめき立てる。前者が自分の周囲の者に、冬の仕度を懇ろに勧めてゐるのに比べて、後者は凡ゆる生物に向ひ、警告と命令とを發してゐると言つた風である。又實際此の鳥が現はれて、樹の上から、澄み切つた青空を眺め乍ら喚き立てると、その聲は透き徹

つた秋の空氣に乗つて、野の果て林の隅々までも行き渡り、その邊にまごまごしてゐた生き者達は、皆それぞれの仕度に取りかゝる。燕は家族を纏めて温かい南國への旅立ちの用意をする。蛇は穴へ、蛙は石の下へといふやうに、皆こそごと隠れ家へと避ける。それから又人間は人間で、夏服を合服に單衣を袷にかへる。そればかりではない。詩人や歌人は彼の聲を聞いてそれを歌ひ、文人は文に書いて彼を讃へる。さうした點で、秋のシムボルとして彼は實に優れた地位を與へられてゐる。だが此の秋の使者も裏に廻つて其私的生活を覗いて見ると、驚く可き儉約家であり、感ず可き貯蓄家である事を、諸君は恐らく御存じあるまい。彼は初秋になると里へ出て来て、あゝして遊び廻つてゐるが、晩秋から初冬の頃になると、いろいろな生き物を捉まへ、それを樹の枝に串刺しにして冬の食物の用意をする。この奇習は古くから「もすの草もすくさ」とか「もすの早はや贄にえ」といふ名で知られてゐる。

春されば鴟の草莖見えずとも

吾れは見やらん君があたりは (萬葉集)

秋の儉約家

昔ある男が野道で一人の女に會つた。いろいろと話の末に、男は女の家を聞いたところ、女はもずのくさぐさを指して、私の家はこのくさぐさの方向に當る里にありますと答へた。男は何れ後日きつと御尋ねすると堅く約して別れたが、その後心に思ひ乍ら公用にかまけて、たづねる暇がないで年も暮れて了つた。翌年の春ふと去年の野に出たので、女の教へて呉れた樹を見ようとしたが、折悪しく霞が深く立ちこめて見る事が出来ず、たうとう終日探したが判らずに、空しく歸つた。(奥義抄)

又早贄といふ事については、

「いにしへの人のいひ傳へけるは、もずと云ふ鳥、郭公の杵手をとりてありけるが、えいださむる時に、郭公のくるほどに、もずのはやにへと云ふ事をして、よろづの蟲蛙などを草のくさにさして、郭公のためにとてかくるゝを、もずの草莖といふとぞ」(萬葉抄)とある。

これに依ると、元來もずといふ鳥は郭公から杵の註文を受けてその代價を受け取り乍ら、それを拵らへないうちに郭公がやつて來るといふので、杵の代りに早贄をこしらへ自分は姿を隠

して了つた、といふのである。此の傳説は他のいろいろな古書にも出てゐるが、兎に角此の秋の使者にとつては、甚だ香ばしくない噂だと言はねばならない。然し郭公に對する約束の不履行問題は別として、此の鳥が早贄をつくるのは確な事である。小さな者では虻や蝗蟲の類から、むかで、みいず、泥鰌や鱧のやうな川魚、蛙、蜥蜴、蛇、さては同類の雀や鶯のやうな小鳥までも、その血祭りに上げられる。さうした點で彼は多くの生きものにとつては、大きな脅威でもあり暴君でもある。實際鴟といふ鳥を捉へて見ると判るが、小柄ながらガツチリとした體のつくり、暈取でも施したやうな眼元、鈎のやうに曲つた嘴、すべてが小英雄と云つた倂を備へてゐる。それに彼を捉へ籠に封じて威して見ると、普通の小鳥だとばたばたと暴れて逃げ廻はるけれども、鴟と來ると一隅に占據して、ぐつと相手を見詰め、攻撃の隙を覘つてゐるなど、大膽さと共に何處か食へない奴といふ感じを與へる。

彼が秋から初冬へかけていろいろな生き者を樹の枝にさして磔の刑に處し、所謂早贄をつくる理由については多くの説があつて、ある人は食残りの餌をさうして保存して置くのだとい

ひ、又或る人は單なる殺戮慾さつりくの現はれだともいふ、だが最も正しいのは、餌の少ない嚴冬中の貯へとして早贄をつくるといふ説である。此の説は一寸聞くと餘りに人間的で、一介の鳥の彼には不似合ひな行ひの如くに思はれぬ事もないではないが、いろいろな點で正しいとされてゐる。冬の間此の鳥の夫婦は此處の林から向ふの藪、此の森から彼處の川岸までといふやうに、一定の繩張りを決めて生活する習性を持つてゐる。若し他の鴟が此の繩張りを犯してもすると、夫婦は氣魂けたましい聲を擧げて此の不心得者を逐ひ出す。そして夫婦は秋に拵らへて置いた干物を食べ合つて仲よく暮すのである。さうした點で此の鳥は見かけに依らぬ却々の勤儉家でもある。

「グー」を棄てる話

もう彼是五年ばかりも前の事ですが、小官吏として某官廳のB部に勤めてゐた順吉の家に、ある日の事一匹の仔犬が迷ひ込んで來ました。その犬といふのは犬に關する知識のない順吉には、それが何種といふのか、値打のある犬か無い犬か一向判らないのですが、その體つきといひ顔つきといひ、何處となく魅力を持つてゐたので、元來犬好きな夫婦は言はず語らずの裡にその仔犬を家へ置いてやつてもいゝと決めてゐました。

「此奴却々可愛い犬だね、どうだい家で飼つてやる事にしようか」

「さうね、いゝでせう」

「グー」を棄てる話

斯んな風に頗る簡単な調子で順吉夫婦は、此の仔犬を彼の家族の一員に加へる事としました。仔犬の方でも自分の生れた家の事なんかまるで考へてゐないらしく、一向出て行かうともしないのでした。

その翌朝順吉は此の仔犬に「グー」といふ名を付けてやりました。そして彼は妻に向つて

「おい、俺は此の犬にグーといふ名を付けるぞ」

と宣言しました。

「グーですつて？ 一體そりやどういふ譯？」

「偶然紛れ込んで来た奴だからグーさ、どうだい面白いだらう」

「まあ……傑作ね」

斯んな調子で名命式も頗る簡単にすんで、仔犬はいよいよ彼の家の一員となりました。そして彼が役所へ出かけようとする時、「グー」はもう一と角の忠犬振りを見せ順吉を門先まで送つて呉れるのでした。そして其日勤めを終つて歸ると「グー」は尾を振つて順吉を門口に迎へ

るのでした。

所が此處に一つ困つた事が出来ました、といふのは「グー」はどうした譯か、牛肉とか豚肉類なら大變喜んで食べるのですが、その他のもの、例へば野菜は勿論魚肉さへも口にしないといふ變り者で、大抵な犬が喜んで食べる味噌汁や鰹節をかけた御飯、そんなものは鼻の先で一吋臭ひを嗅いだだけで、そつぽを向いて了ふといふ贅澤振りなのです。何故彼は獣肉でなければ口を附けないのか、生來獸肉以外のものは嫌ひなのか、それとも順吉の家へ来る前に飼はれてゐた家がブル階級の家で、毎日牛肉や豚肉の御馳走に馴れてゐた爲なのか、そんな詮議立ては兎に角として、此の犬の頑固な偏食主義に順吉は全く閉口して了ひました。

「此奴風來坊の犬の癖に生意氣だね、いやなら勝手にしろ……」斯う云つて順吉は忌々しさうに缺茶碗の飯をグーの顔へぶち撒けたりしました。

「そんな事して可哀想よ、そんなにしないでつて、今に御腹が空けば自然に食べるわよ……」さういつて妻は仔犬のために辯護し順吉の仕打ちを非難しました。然し事實仔犬はいくら御腹

を空かして置いて、肉以外のものは決して食べようとせず、いつも頑として順吉達のやる食事を拒絶し続けました。

「まあお前みたいな生意氣な犬つてほんたうに有りやしないよ、肉でなきや食べないなんて贅澤やは、家では飼つてやれないから何處へでも去つてお了ひ」

最初は同情者だつた妻もそろそろ非難の聲を發するやうになりました。實際初めの二、三日こそいろいろ手をかへ品をかへて、食べさせようと心配もしてやりましたが、終ひには順吉達の方でも根負けがして、相手にしない事にしました。そして少々持て餘し氣味となつて來たばかりでなく、内々捨てなければならぬとさへ思ふやうになりました。ところが此處に又一つ困つた事が出來ました。といふのは「グー」の奴が病氣になつたのです。而もその病氣といふのが腸をこわしたらしいので、尾籠な話ですが、水のやうな大便を所かまはず垂れ流して歩くので寔に始末に負へないので、おまけに元氣がまるで無くなつてへとへとになつた體を、順吉が椽の下に造つてやつた蜜柑の空箱の寢床に横たへて苦しさに呻いてゐるのでした。

「此奴汚なくつてしやうがないナ、いつその事棄てちまはふかしら」斯う思ひ乍らも

「おい、グーどうした、ビリ糞なんか垂れて困るぢやないか」と言ふと、彼は優しい言葉をかけられたとでも思つて、だるさうな體を無理に起して順吉の傍まで這ひ寄り、さも御愛想らしく順吉の手を舐めると、又こそそと寢床へ歸つてぼんやりした眼つきで順吉の顔をじつと見詰めるのでした。その瞳の中には哀願、苦痛、寂寥、そんな感情が一つになつて渦を卷いてゐるやうに順吉には見えました。それに考へてみるとグーが腸をこはした原因は、順吉達が食物をやらなかつたので、空腹の餘り掃溜あたりを漁り歩いて何か悪いものを食べたのに在るらしいのです。して見れば直接の責任は仔犬自身に在るとしても、假りにも彼を飼つてやる事に決めて飼主然たる顔をしてゐる以上、順吉達にも一部の責任が在るやうに感じないでは居られませんでした。そんな譯で順吉達は仔犬に對して病氣中牛乳を振舞つてやる事にしました。そして牛乳の中にそつと少量のヂアスターゼを混ぜてやるだけの厚意まで附け加へてやりました、ところが此の振舞の効果は靦面に現はれまして、グーは忽ち元氣を回復し、三日目にもうびんび

んしてぢやれるやうになりました。順吉達は大きな善事を爲した心地がして喜び合ひました。然しその喜びもほんの束の間で、グーの病氣が治ると又しても彼は依然として肉食主義を固執して一步も譲らないのでした。

たうとう順吉は仔犬を手放す事、もつと露骨に言へば棄てる事を決心しました。然しそこまですで決心するには可なりいろいろ考へたのは言ふまでもありません。然し如何に博愛主義、動物愛護主義の心を呼び起して考へても、元々紛れ込んで来た犬の仔一匹に對して、自分の生活を犠牲にしても、——といふと大變大袈裟ですが、事實當時の順吉の經濟としては、犬のために毎日特に肉を買つてやるといふやうな贅澤さは許されないのでしたし、又さうしてまで養つてやる義務もないと思はれました。

遂に棄てる日が來ました。その日はいよいよお別れだといふので、グーのために順吉はポケットトマネーの一部を割いて牛肉を振舞つてやりました。此の御馳走の裏には重大な意味が潜んでゐるとは露知らぬグーは「珍らしくも大變な優待ですナ」と云つた顔附きで大喜びでそれを平ら

げて了ひました、その様子を眺めながら順吉はいろんな事を考へさせられました。

「やつぱり犬だねえ、何にも知らないで喜んで食べてゐるぜ」彼は斯う云つて犬の顔を眺めました。然し假令犬でなくても此の場合順吉達の心の中をどうして知る事が出来るでせうか、さう思ふと順吉は寂しい氣がしました。

さて順吉も夕飯をすますと、愈々グーを棄てて行く事となりました。處で順吉にはグーを何處へ棄てるべきかといふ事が一つの可なり大きな問題でした。今までに犬を棄てた人の經驗や學者の動物心理に就いて記した書物で讀んだ處に依ると、犬や猫は随分遠方へ棄てても直きに又もどつて來る事を知つてゐました。それ故若し棄てるとしたら、相當遠い所か又出來れば風呂敷へ包むとか眼隠しをするとかして連れ出さねばならないと考へました、然し愈々となると順吉は又しても詰らぬ感情の攻撃を受けました。それといふのは、いくら相手が畜生だからと云つて、眼隠しをして連れ出す等といふ事は餘りに卑怯なやり方ではないか、いやしくも人間ともある者が、そんな卑怯な眞似をする必要が何處にあらうか、それよりも堂々と連れて行つ

て自由に放してやつた方が、棄てられる方にしても、いくら氣持がいゝか知れない。そんな事を考へるのでした。それといふのも結果は棄てる事になるのですが、心持としては解放してやる、廣い天地に放して自由に主人を選ばしてやるといふやうな解釋を残して置きたいからなのでした。そんな譯で順吉は仔犬の頸輪くびわに紐を結び附けますと、恰度散歩にでも連れて行くやうにして門を出ました。勿論順吉の心の中を知らぬグーは大喜びで彼の手に引かれて駆け出しました。順吉は家を出ますと一丁半ばかりの處で右へ折れてY驛の方へ行かうとしました、處が其處まで來るとグーの奴は、何を思つたか急に足を停めて動かなくなりました。順吉は行く途に大きな犬でも居てグーを睨み付けてでも居るのだらうと思つて四邊を見廻しましたが、何處にもそれらしいものは見當りませんでした。又彼は仔犬が小便でもしたくなつたのではないかとも思つて紐をゆるめて見ましたが一向それらしい様子もなく、仔犬は道の傍に蹲まつてゐるばかりなのです。そして前足を伸ばし頭を垂れてじりじりと元來の方へ戻らうとするのです、その時順吉は覺えずはつと思ひました。

「先生何か不安を豫感してるナ」

さうです、仔犬は確かに何か不安を感じたらしいのです、その證據には其眼付きといひ、態度といひ、普通の様子ではありません、そして順吉が紐を強く曳けば曳く程、益々地面へ平つく這つて動かうとしないばかりか、如何にも情なさうな眼附で順吉の顔を眺め鼻を鳴らして頻りと哀願の表情を示しました。

こゝで順吉の心は可なり打たれました。そして棄てるのを中止しようかとさへ思つた程でしたが、そんな事でどうなるものかと思ひ返して、彼は大地に獅嚙み附くやうにしてゐる仔犬を抱き上げると足早に歩き出しました、これには遠がの仔犬もどうする事も出來ず、眼をきよろきよろさせながらも、さも御世辭らしく順吉の頬を二三度舌で舐めたりしました。順吉は犬を抱いてY驛の前を通り過ぎS驛の方へと向ひました、その時はもう陽もすっかり落ちて、道路の兩側の家々からは燈火がもれて四邊はすっかり夜の景色となつてゐました。

S驛の近くへ來た時、順吉はもう宜からうと四邊を見廻しながら仔犬を道路へ下ろしまし

た。斯うして若し仔犬が横道へでも入つたら、その隙に逃げて歸らうといふ算段でした。といふのもさうすれば、犬の方では棄てられたといふより寧ろ主人とはぐれたと思つて、こつちの計畫を少しは善意に解釋して呉れるかも知れない、といふ寔に虫のいゝ心から出た事なのです。然し元々氣の弱い順吉としてそれは當然な事でした。

ところが事實はまるで彼の豫想を裏切りました。腕から下ろされた仔犬は喜んで走り廻るかと思ひの外、驚怖と不安との爲に地面にピタリと蹲つて了ひました、そして順吉が一足二足歩くを見ると、周章てゝその後から追ひ縋り、順吉を見失ふまいと血眼になつて追つて來るのです。その様子の餘りにも眞劍なのといぢらしいのとで順吉はすつかり氣を挫かれて了ひ、又しても自分の行爲の卑劣さを恥ぢるのでした。やがて順吉はS驛に通ふ大通りに出ました、それまで仔犬は一生懸命になつて彼の後について來ましたが、ひよつと仔犬の油斷の際に、順吉はT公爵邸の横道に身を隠しました、そして二、三分の後そつと石垣から通りを覗いてみました、するとどうでせう、主人の姿を見失つたグーは、もうまるで夢中です、彼は狂氣のやう

に廣い道路を駆け廻り、來る人毎にその足許に駆け寄つてじつとその人の顔を見上げるのです。然しそれが順吉でない事が判ると、又しても狂氣のやうに走つて、更に第二の通行人の前に立つて同じ事を繰り返しては、又第三の人に走つて行くのでした。その様子は迷子になつた人の子が親を見付けるのと少しも變りはありませんでした。

「おゝグーよ、俺が悪かつた……」思はず斯う叫んで順吉は石垣の蔭から飛び出さうとしました。然し次の瞬間「此處だ、辛抱のしどころは……」と云つて彼の身内に潜んでゐる理性は、襟首を掴んでぐつと順吉を後へ引きもどしました。

「此の偏食犬のために、どれだけ手古摺つたかを、お前はもう忘れたのか」「あれ程棄てると決めた心がもうゆるんだのか」「若し伴れて歸つて見る、又明日から困るに決つてゐるぢやないか」「元々風來坊の宿無しに、そんな親切をかけてやる理由が何處にあるのだ」「棄てちまへく」

斯う立て續けに理性と利己心とは力を併せて順吉の弱い感情をコヅキ廻しました。

順吉は更に五分ばかりじつと息を殺して我慢してゐました。

もう何うしたかしら、と二度目に危ぶみ危ぶみ道路をすかして視た時には、其處にはグーの姿は見えませんでした。

「おや、もう居ないぞ」と呟きながら更に體を乗り出して見ましたが、やはり其邊には居ませんし、折柄通り過ぎた二三人の通行人を注意しても、別に犬が走り寄る氣配もありませんでした。

「さては誰かについて行つて了つたかな」さう思つて少し安心して順吉は本通りへ出ましたがその邊にはもう仔犬は居ない様でした。順吉は愈々安心して、思ひがけなく容易に棄てる事が出来たのを喜びながら、それでも尙幾分は氣遣ひつゝS驛の方へ向つて五六間も歩いて行つた時です。唐突に暗の中から飛鳥のやうに飛び出して来て、順吉の胸を目掛けて飛びついたものがありました、はつとして見ると、それは紛れもない「グー」の奴ではありませんか、彼は主人を見附け出した嬉しさに鼻を鳴らして順吉の胸へ獅噛み附かんばかりに狂喜しました。

「やつぱり棄てる事は出来ない」

又しても順吉の決心は轉覆しかけました、そして彼は「グー」を抱き上げると、其鼻先へ頬擦りして黙つて悠つくりとS驛の方へ歩き出しましたが、「グー」も亦順吉の後からついて來ました。然し順吉の歩みが悠つくりしてゐるのに幾分安心したものか「グー」も前とは變つて大變落着いて歩いて來ました。順吉は歩きながらも色々考へました。心の中では仔犬に對する同情心と理性とが、盛んに争ひ續けました。然しどうとも決心がつかない中に、彼等はS驛へと來て了ひました。順吉は驛のベンチへ腰を下ろしますと只ぼんやりと考へ始めました。さて彼が斯うして考へ込んでゐるのを見ると、一方仔犬は大變安心したらしく、驛の中を鼻先で嗅ぎながら彼方此方彷徨ひ始めましたが、段々彷徨の範圍を擴げて、たうとう驛の外の賣店の方へまで足を伸ばしました。その時です、順吉の頭腦には「今だ！」といふ考へがフラッシュのやうに閃めきました。彼は矢庭にベンチから立ち上ると、素早くU驛までの切符を買ひ、駈けるやうに開札口を抜けて階段を上つてプラットホームへ出ました。そして若しやと思つて四邊を見廻しましたが、鹽梅に仔犬はついて來ませんでした。「今度こそ大丈夫だ」さう云つて彼は

電車の來るのを待つてゐました。處が何か故障でもあつたかその時に限つて電車は却々やつて來ないので。五分十分彼は待つてゐる中に又しても仔犬の事が氣になりました。そしてそつと階段を降り開札口の方を覗いて見ました。すると何うでせう「グー」の奴は開札口の所に頑張つて居て、切符を切つて貰つて中へ入る人毎に駈け寄り、一々その人の顔を見上げてゐるではありませんか。然もそれが自分の主人でないとなると後を振り向いて後から來る人の顔を同じやうに眺めるのです。それを見た順吉は「ほんとに濟まない事だ」と心の中で呟きました。其時電車は轟然とフォームへ入つて來ましたので、彼は「では無事にお暮し」と心の中で言つて階段を駈け上つて電車に駈け込みました。

それから順吉はK坂を散歩して二時間ばかりの後再び電車でS驛を通過しました。そこで彼はもう一度降りて開札口を覗いて見ました。それはもう十時近くでしたが「グー」は開札口の傍に丸まつてすやすやと睡つてゐました。恐らく彼は主人を探し疲れて睡つて了つたのでせう。それにしても彼は今どんな夢を見てゐる事だらう、順吉に抱かれて頭でも撫でて貰つてゐる樂

しい夢でも見てゐるかも知れない。あゝして睡つてゐる間は極樂だ、然し一旦眼が覺めれば、又しても現實の寂しさに立ち戻つて血眼になつて順吉を探すに違ひない。さう思ふと順吉は泣かないでは居られませんでした。彼はそつと涙を拭いて仔犬の姿を後にして、再び電車に乗つて歸宅しました。

翌日になると順吉は萬一にも仔犬が歸つて來やしないかと、半ば期待するやうな心持で一日を暮らしました、然し仔犬はたうとう歸つて來ませんでした、そして再び「グー」とは會ふ機會はありませんでした。

順吉は斯うして「グー」と永遠に別れて了ひました。それは只一匹の仔犬、而も偶然迷ひ込んで來て、十日ばかり親しんだ動物との別離に過ぎません。然しその別れの意想外に辛かつた事、殊に主人から棄てられまいとして探つた仔犬の態度は、順吉の心に對して實に大きな感動を與へました。そしてそれ以來未だ子供を持つた經驗のない彼にも、ある種の人情が判つたやうな氣がしました。彼が今迄まるで氣にとめなかつた、世間によくある棄子の新聞記事に對し

て關心を持つやうになつたのも此の事件があつてからの事です。

それから餘程たつた或る日の夕方、順吉が夕刊を取り上げて見ますと、其處に大きな見出しで「T驛の棄子」といふ活字が眼に入りました。彼は例によつて熱心に其記事を読んで行きました。そして記事に依りますと、其日の晝頃或る一人の貴婦人がT驛の待合室に居ますと二歳ばかりと見える赤兒を抱いた、これも身装の餘り悪くない一婦人が来て、一寸用便に行つて来るあひだ此の赤兒を暫く抱いて居てくれ、といとも丁寧に頼まれるまゝに心安く其赤兒を受け取つてやりました。すると其婦人は大變喜んで、二三度見返つて待合室を出て行きましたが、それつきり待てども待てども歸つて来ないので貴婦人は少し不安になり、若しやと思つて驛の當局者を呼んで調べて貰ふ事にしました。然し何處を探しても先の婦人の姿は見附からないので愈々棄子といふ事に決り、警官が来るやら、新聞記者が来るやらして大騒ぎとなりました。順吉は熱心に讀んでゐましたが、もう最後に近い邊へ来て次の一句にぶつかりました。それは赤兒を抱かされて待ちぼけを喰はされた例の貴婦人の言葉として、

「可愛い子を他人に預けて棄てゝ行くなんて、顔は優しく見えても、心は鬼か蛇のやうな女ぢやありませんか」といふ談話の一片でした。順吉は此の一句を讀むと思はずカッとなりました。「ふん、犬の子一匹棄てた事もない奴に子を棄てる親心が判つて堪るもんか……」斯う吐き出すやうに云ふと、いきなり夕刊を放り出して起ち上りました。そして當時小犬の探つた態度を頭に思ひ浮べながら、それつきり全く消息を絶つたグーの顔をもう一度探つて見ました。

支那と蟋蟀

それは毎年の事ながら八月の末から十月の末までの二ヶ月間の自然界は、いはゆる秋の鳴く蟲の黄金期である。そして昔から我々は是等の可憐な自然樂師を愛玩し、それは今益々盛んになりつゝある。ところで我々と風俗習慣の似通つた、又東洋文化の父といはれてゐる御隣の支那、現在の中華民國ではこれ等の自然樂師を一體何う取扱つてゐるであらうか。この事は私の豫てから知り度いと望んでゐた所であるが、一昨年米國シカゴの自然博物館から出た、ラウフア氏の「支那の蟲樂師と蟋蟀選手」といふ小著及び昨年三月北京博物學會々報に載つた、Yin-chi Tsu といふ中華人の「支那の蟋蟀」なる一文は彼の國に於ける鳴く蟲、殊に蟋蟀に對する

消息をよく語つてゐる。今この二つの記述を參考としてその大要を記して見る。

そもそも支那の人は古くから昆蟲といふものに對して特別な興味を持つてゐたので、蟋蟀を飼つて楽しむといふ事についても非常に古い歴史をもつてゐる。そしてそれは大要次の三期に分ける事が出来る。即ち第一は太古から唐の時代まで、この時代には人々は單に野外で蟋蟀の鳴く音を聞いて楽しんでゐた。第二は唐時代そのもので、この時期になつて人々は始めて蟋蟀を瓶や壺に養つて、家の中でその音を聞く事を始めた。そして最後は宋の時代から現在まで、この時期になつては單に鳴く音を聞くだけでなく、彼等を闘はせてその勝負を楽しむといふ娛樂的競技が發達したのである。

所で現今支那で鳴く蟲愛好家や闘蟲ファンによつて取扱はれてゐる鳴く蟲の種類は、一體どんなものかといふと、先づ鳴く音の鑑賞用としては日本でいふ閻魔蟋蟀、金鐘即ち我が鈴蟲、螂蛉子（我が大和鈴の一種）金寶塔即ち松蟲、天蛤即ち邯鄲等である。然し南方支那では蟋蟀類の音に對しては全く無關心で、その代り一種の響蟲を飼つてその音を喜ぶといふ。

さてこれ等數種の鳴く蟲が飼はれるが、中でも一番彼等が興味を持つてゐるのは、蟋蟀類の闘技にあるらしい。そして支那の蟋蟀愛好家連中は、いろいろな方法でもつて彼等を捕へる。

先づ北方支那では蟋蟀の棲んでゐる穴を見つけて、穴の口には豫め象牙で造つた陥し籠を設けて置き、更に口元に蠟燭ろうそくを燈して相手を誘ひだして捕へ、又東部支那では穴に水を注ぎ込み中から逃げだしてくる奴を針金製の手網で捕へる。又南方の人達は針金で造つたバスケットに炭火を盛つて穴の口元に置き、熱で逐ひだして捕へるといふ。

かうして捕へたものは、夏の間はひらたい蓋のついた圓形の陶器壺の中で養はれる。この壺は愛好家の好みによつて、特別な工夫の元に造られるので、壺の表面にはいろいろな模様が描かれ、又製作者の銘までいれてある。然し冬になると瓢箪で造つた容器に移される、といふのであるが、大體蟋蟀類はある特別な種類を除いては、秋の末には皆死んで了ふのが常則なのだから、この冬といふのは、せいぜいのところ初冬の事であらうと思ふ。さてこの所謂冬の容器なるものは、前にも云つた通り瓢箪で作つた實に凝つたものである。然し瓢箪で作るといつ

ても、それは單に自然のまゝのものを用ひるのではなくて、豫め粘土で長いもの、圓いもの、筒形、壺形など思ひ思ひの型を造つて置き、この型の中に瓢箪の花を押し込んで咲かせ、實を結ばせかつ育たせるのである。そんな譯で成熟した瓢箪は、いづれも粘土の型通りの形をとりすこぶる面白いものが出來上る。尙粘土の型の内面には、前以ていろいろな模様を彫つてあるので、出來上つた瓢箪には自然に見事な浮彫りが刻まれる。だが斯うした凝つた製作品を産んだのは古の事で、今では單に後から表面に模様を彫りつけたものばかりで、古のやうに型を用ゐた自然の浮彫りは全くないさうである。

この瓢箪の容器には、硬玉、象牙、又は海象の牙或ひは椰子やしの實若くは白檀びやくたん等で造つた、極めてしやれた蓋が付いてゐて、それには花鳥龍唐獅子其他鳥獸の浮彫又は眼細工が入念に施してある見るから藝術味豊かなものである。猶容器の底には石灰と砂とを混ぜて造つた心地よい寢床までも愛する蟲のために設けてある。かういふ風雅な器に好みの蟋蟀を入れて、持主はそれを懐に納めどこへでも抱へてゆく。それ故町を歩いてゐると、すれ違つた人の懐から、時な

らぬ妙音がもれて來るのを聞く事があるといふが、誠に支那人らしい風流な風習だと思ふ。

かやうに支那の人達は風流でもあるが、一方又特異な國民性として、蟋蟀同志を喧嘩さして勝負を樂しむ事が盛んに行はれてゐるといふ。尤これは單なる娛樂として行はれるばかりでなく一つの賭け事として行はれるのである。

元來蟋蟀といふ蟲は鬪争本能の極めて強いもので、もし二匹を一器に入れて鼻突き合はせると、きつと喧嘩を始めるものである。この性癖は雌よりも雄同志の場合の方が激しい。支那の蟋蟀鬪技はこの本能を利用したもので、好事家はあらゆる苦心をして強い蟋蟀を手に入れ、又は養成する事に努める。そして普通鳴き音を聞く爲の者と違つて、白米と新鮮な胡瓜とを混ぜたものとか、胡瓜のゆでたもの、蓮根の實、さては蚊のやうな蟲で養ひ、殊に競技が迫ると人間の血をたらふく吸はせた蚊やある草の根を煎じて造つたスープを、強壯劑として與へるのである。

鬪技は普通廣場とか中庭のやうな場所か、でなければ特別な建物の中で行はれるので、まづ

絹の小布を敷いたテーブルの上に鬪技用の器——それは既にのべた夏の間蟋蟀を入れて置く器と同型で少し大きいもの——を載せ、鬪技開始に先立つて兩鬪士は小さな天びんに乗せられて目方を量られ、又體格の大いさ、着色等を細かに調べられ、さうした肉體的の點で、互に似たもの、さしたる優劣のないもの同士が組み合はされる。そしてこの検査に當つては、身體が太く、頭が大きく、黒すんだ白色の體色のものが優れ、やせ形でひらたく、羽の疊み工合のゆるいものは劣者としてある。

さて詳細な體格検査がすみ合せが決まると、鬪士同志は鬪技場ともいふべき前記の器に移され、最初は仕切り板でもつて隔て、置き、鬪士の持主は互に自分の選手の尾や脚やあごを、特別なくすぐり道具で刺戟して、鬪争心をあふる事に努める。かくて兩鬪士の鬪争心がいやが上にも募つた時、審判官はやをら兩鬪士の名を呼び擧げ、又過去における成績を述べ、隔ての仕切りを引き揚げて兩者を合せる。すると既に興奮し切つてゐる兩者は、忽ち觸角を立てあごを開いて互に相手の頭を目がけてとびかゝり噛み合ひをおつ始める。

私も蟋蟀の争闘は何度も實見してゐるが、それは實に激烈なもので、互に情容赦なく闘ひ、結局一方が噛み伏せられるか又は一方の退却で勝負が決まるが、時には一方が殺されて終ふ事もある。南支那地方では何度も勝つた歴史付の蟋蟀は、常勝將軍の尊稱を奉られ、この將軍が死ぬと遺骸を銀の小柩に納めてうやうやしく葬りその靈を弔ふといふ。

元來この闘技は前にも一寸述べた通り一つの賭け事として行はれるので、そのもつとも盛んな廣東地方では、一勝負に十萬ドルからの賭け金がかけられるさうである。そして其人氣のある事は素晴らしいもので、我々の野球や競馬熱にも比べる事が出来るのである。

支那に於ける蟋蟀の闘ひに關する歴史は古いもので、従つてそれに纏はる多くのローマンスや逸話的物語も傳はつてゐる、今其中の一つを紹介すると、

昔、北京に一人の役人があつた、その男は米倉の監督をしてゐたが、或る時非常に優れた蟋蟀を見つけたので、是非手に入れむものと、彼の一番大事にしてゐた馬一匹と取替へた上、それを時の皇帝に献上する事にした。彼は其蟋蟀を小箱に入れて大事に家へ持ち歸つた。處が彼

支那の蟋蟀



支那人が使ふ蟋蟀の器いろいろ

の留守中に妻は、夫が馬一匹といふやうな高價を支拂つた蟋蟀が見たくて堪らず、そつと箱の蓋を開いて覗いた拍子に、中の蟋蟀が飛び出した、處が折も折其處へ來會はした鶏がパクリとそれを食べて了つた。妻女は自分の輕卒な行ひが意外な結果を招いたのに驚駭の餘り、首を縊つて自殺して過ちを詫びた。

さて外から歸つて事の仔細を知つた夫は、大切な蟋蟀に加へて最愛の妻までも失つた二重の損失の悲しみと失望とのため、彼も亦自殺して彼等の後を追ふたのであつた。

それにしても人々は、優しい野の歌ひ手が、こんな悲劇を惹き起す事にならうとは、全く思ひも及ばなかつた事だと語り合つたといふ。

鉦の主

N縣のA山の麓のKといふ小さな村の啓太郎は、村での評判の美少年だつた。村の若い娘達は彼のために、凡ゆる好意と愛嬌とを捧げる事を惜しまなかつた、然し生れつき眞面目な啓太郎は多くの娘達の媚を受け乍らも、少しの噂も立てられる事もなく、ひたすらに自分の仕事にいそしんで暮してゐた。

「啓太郎の奴はあんなに娘つ子にチャホヤされてゐ乍ら、好きな女つ子の一人も出来ねえなんて一體どうした譯づら、何か體に故障でもあるづらか……」

村の人達は寄ると觸ると斯んな事を言ひ合つてゐた。

然し斯うして堅い堅いと思はれてゐる啓太郎も、彼が二十才になつた時、戀を知る事となつ



鉦の主かねたき

た。彼の戀の相手といふのは、村でも指折りの地主の娘の、十八になるお絹といふ優しい子だつた。若い血に燃えた二人の戀は、素晴らしいスピードでもつて進んで行つた事はいふまでもない。そして總ての戀人同志がするやうに、二人も亦永久に離れまいと互に堅い誓ひを取り交はしてゐた。だが此の二人の戀は初めから恵まれて居なかつた、といふのは、如何に働き者として村の賞めものとなつてはゐるものゝ、啓太郎の家は明日にも困る水呑百姓であり、お絹の家は村で一と云つて二と下らない地主階級であつ

た。殊に長い間格式と傳統との生活に浸つてゐるお絹の両親が、此の釣り合はない二人の戀を許す筈がなかつた。お絹の両親は娘が、村での水呑百姓の息子に思ひを寄せてゐるのを知ると、まるで悪魔にでも規はれたかのやうに恐れをなして、祕かに縁口を探がして、隣村の之もその附近での指折のYといふ素封家の息に、否應なしに嫁がして了つた。

斯うして二人の戀は眞向まっこうから裂かれて了つた、そして急に孤獨となつた啓太郎は、毎日失心したやうな日を送つてゐたが、遂々心を決めて村を捨て、ある山寺に遁のがれ、名も常念と改めて一生を信仰に捧げて暮す事となつた。

彼が信仰生活に入つてから一年の月日が、夢のやうに過ぎた。或る初秋の夕暮れ、彼は思ひがけない訪問者を受けて、喜び且困じ果てた。それは別れて以來忘れやうとして忘れ得ないお絹の訪問だつた。彼女は両親の命令で素封家の息に嫁いだものゝ、啓太郎の事を一日も忘れる暇とはなく、たうとう家を脱け出し、かねて薄々ながら聞いてゐた噂を頼りに、漸くの思ひで啓太郎の許まで辿り着いたのであつた。

彼女はどんなに辛い生活でも忍ぶから、彼のそばに置いて呉れと嘆願した。その優しい心根と切なる願ひとを聞き終つた啓太郎の常念は、靜かに女の背を撫で乍ら、彼女の愛を感謝した後、一旦世を捨て、佛に仕へる身となつた今の自分としては、俗界の人情や愛着に従ふ事は許されない事を言ひ聞かせて、家へ歸へる事を勧めた。然し既に家出までもして彼を追つて來た彼女の決心は、そんな事位で翻へるものではなかつた。彼女は門の土の上に泣き折れて彼女の心を訴へ、男の薄情を恨んだ、然し男の決心も亦堅かつた、彼は泉のやうに湧きかへる愛情と執着心とを抑へ附けて、ひたすらにお絹に歸るやうに諭しつづけた。折柄夕方の讀經に取りかからうとしてゐる住寺の、彼を呼ぶ聲が聞えた、彼は思ひ切つて女を突き放すと、そのまゝ立つて奥へと入つて行つた。

彼はその夜師の前に總てを打ち明けて許しを乞はふかと考へた。然し元々女戒といふ事に對して、人一倍厳しい今の師が彼等の戀を許すとは思はれなかつた、彼はたうとう打ち明け兼ねて悶々の裡に一夜を明かした。

翌朝お絹は寺内の古井戸から死體となつて發見された。

常念は朝夕二度の讀經を三度にして、その一度を特に亡きお絹のために讀む事とした。月日は又しても流れて、お絹が死んでから一周年の日が近づいて來た。毎日彼女のために讀經に餘念のない常念は、何處からともなく彼に合せて鉦を叩く者のあるのに氣付いた。最初彼は氣の迷ひではないかと思ひ、自分の耳を疑つてみた、然し決して心の迷ひではなかつた。丁度銀の延板を金の小槌で叩くやうな細かい音の連續、それは常念が讀經を始めると又しても鳴り出すが、革まつて聽かうとするたびたりと鳴りやんで了ふ。斯うした不思議が毎日續いた、その間毎日常念は音の源を尋ねたけれども、見つける事は出來なかつた。そんな事が數日續いた。お絹が死んでから滿一周年の當日が來た。その朝いつもの通り讀經に耽つてゐた常念は、お絹の位牌の上に一匹の小さな生き者を見附けた。彼が取り除けようとした時、その小さな生きものはチンチンチンと寂しい音を立て、鳴いた。それは紛れもなく去年の秋以來彼の讀經に合せて鳴つた、あの不思議な鉦の音であつた。常念は吃驚すると共に、それが亡きお絹の靈に違ひない

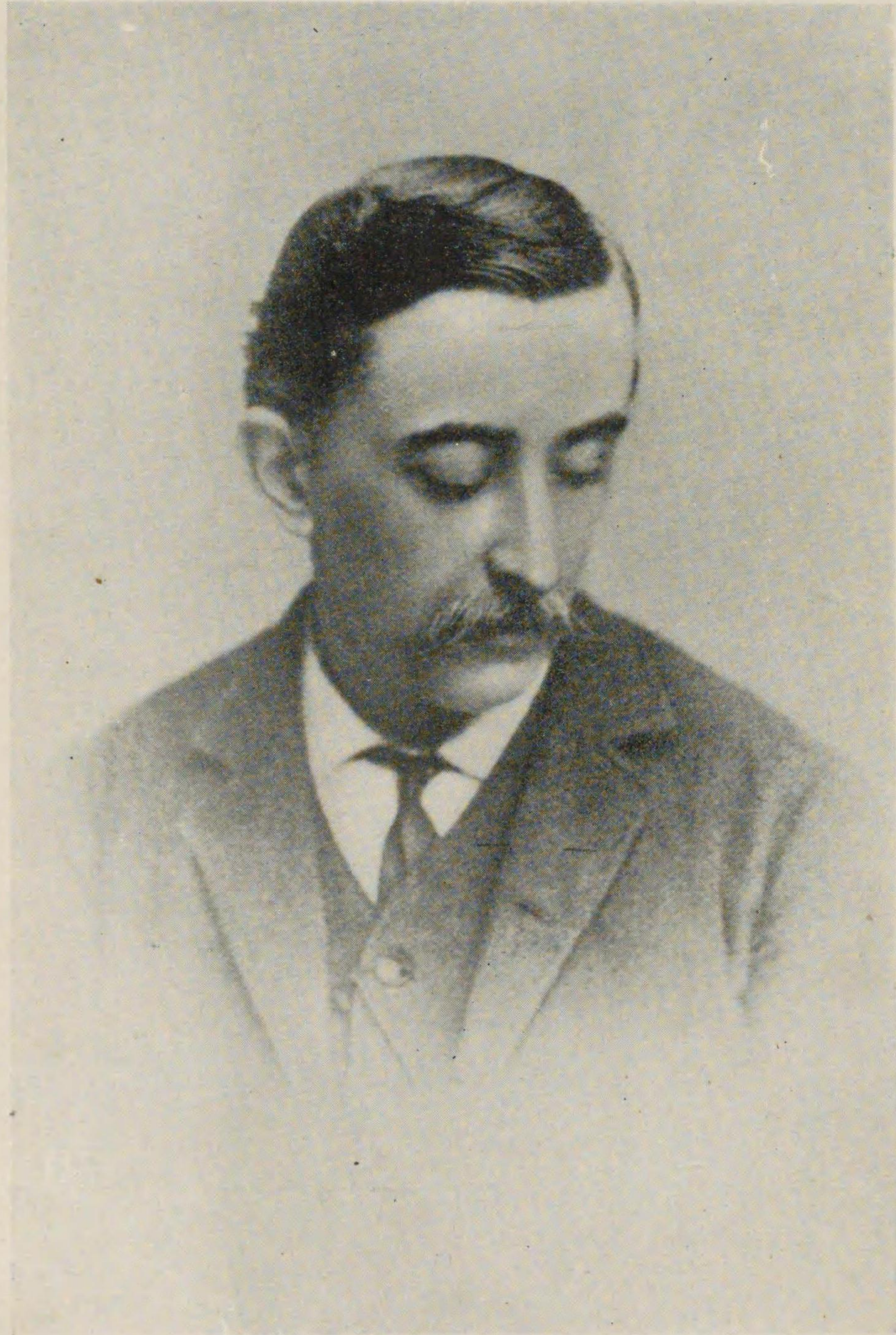
と思ひ、そつと庭の草の中に放してやつた。

その後毎年秋となり、お絹の冥日が近づくと、此の不思議な鉦の主は何處からともなく現はれ、常念の讀經に和して寂しい音を立てるのであつた。さうして常念の讀經の聲には、常にも増して力と熱とがこもつてゐるのが感じられた。

蟲の文學者小泉八雲

蒼落の秋が來て庭の植込の繁みから、黄金の豆ベルを振るやうな、草雲雀の聲が洩れる頃になると、私はいつも想ひ出す文人がある。それは英文學者といふよりも、蟲の文學者として、吾が邦では小泉八雲の名で汎く知られてゐる、ラフカディオ・ハーンである。

彼は西曆一八五〇年愛蘭に生れ、父は愛蘭人であつたが、母は舊い歐洲の藝術と文明とを生んだ神祕の國人ギリシヤ人であつた。そして氏は後佛國で教育を受け、米國で人となり、又西印度に滞在して居た事もあり、殆ど一定の國を持たないコスモポリタンであつた。日本へ來たのは一八九〇年（明治二十三年）彼の四十一歳の時で、最初の目的はハーバー書肆の一通信員



雲八泉小・者學文の蟲

として、日本の文化風俗の筆を執る事に在つたのだが、それは或る事情のため同書肆と契約を絶つたので、先づ生活の資を得るために、その年の九月に中國の松江中學の語學の先生として教壇に立つ事となつた、是れが氏の日本に於ける生活の始りだつたのである、その後（一八九一年）熊本の第五高等學校に轉じ、一八九六年には更に東京帝大文科の講師として英文學を講じ、傍日本の風俗習慣傳説等を研究し、これを或ひは論文として或ひは隨筆物語として發表し吾が邦の文化を歐米に向つて紹介した功は何人も認める所である。だが、さうした功は功として、私の心を最も惹くものは、何と云つてもその蟲に關する隨筆や物語である。

氏は元々蟲といふものに對して、異常な好奇心と興味とを持つて居たので、蟲に關してはよく筆を執つた、而もその天與の觀察眼と繊細な描寫とは、實に他の追従を許さぬものがある、殊に蝶に關する傳説、蠅の妖説的物語、螢の隨筆等は私の好きなものだが、就中氏の傑作的名作として、文人間にも雅客間にも有名なものは、「草雲雀」の一篇である。それは蠅にも例へられるあの小さな自然樂師に對する氏の愛好と心遣ひとを述べたものであるが、寔にも美しい一

篇の創作である。私は茲にその内容の所々を紹介して諸君と共に氏の倂を忍びたいと思ふ。彼は冒頭に次のやうに書き出してゐる。

「彼の籠は正に高さ二寸、巾一寸五分、軸で廻轉する木の扉口は、やつと私の指が入る位に過ぎないが、見付けるには非常に氣をつけて、其紗張りの側面を透して見なければならぬ位小さな彼には、歩いたり跳ねたり、飛んだりするには何の不足もない。私は明るい所で何度も何度も籠を廻はして、やつと彼の姿を見付ける、すると彼はいつも紗張りの天井の隅つこに倒さにじつと止まつてゐる。」同じ小さいといふ事を述べるにしても、彼の叙述は斯様である。然し猶一層美しいのは次の句である。

「毎朝差入れてやらねばならない新しい茄子か胡瓜の一片を食べて居る時だけ身動きする以外、晝の間彼は睡まどろんでゐるか、でなければ冥想に耽つてゐる……中略……日が暮れると彼の小さな／＼靈は眼を覺ます、すると室内は微かな／＼銀の漣と、小さな電鈴にも似た震へ聲とで一杯になる。そして暗が深くなるに伴れて、その音は益々美しくなり、時には家中が

妖精の共鳴に震動するかと思はれる位高くなるかと思ふと、時には想ひも及ばぬ聲の糸のやうに細くなる……中略……斯様に夜もすがら此の原子は歌ひつゞけ、寺の鐘が曉を告げる時やつと鳴き止む」

更に氏は此の蟲の歌ひつゞけるのを評していふ、

「處で此の小さな歌は、見た事もなければ知り合つた事もない者を慕ふ、漠とした戀の歌である。曾て彼の生存中に見たり知り合つたりした事は全く有り得ないばかりか、彼の幾代も／＼前の祖先すらも、その野原の夜の生活や歌の戀愛價値に就いても少しでも知り得た筈はないのである。彼等は蟲屋の土壺の中で孵かつた卵から生れ、其後は籠の中ばかりに棲んで居ただ。だが彼は幾百萬年の昔に歌はれたと同じやうに、又其一節々の意味を確かに了解してでもゐるかのやうに、彼の種族の歌を唱ふ。勿論彼は其歌を教はりはしなかつた、夫れは彼の魂が、夜の丘の露けき草蔭から啼き叫んだ、當時の幾千萬年の生涯の深い臍おぼろひ氣な記憶の歌である。その頃其歌は彼に戀と死とを併せ齎らした。そしは彼は死に就いては全て忘れて了

つて、たゞ戀のみを覚えてゐる。だから彼はかうして今や來る當もない花嫁を求めて歌つてゐるのである」

その叙述の何と美しく且つ詩的である事か、此の一匹の草雲雀は、夜毎々々にハーンの心を慰めたのであつたが、夜毎に目的のない妻を呼び求めて止まない彼の歌は、次第に一つの非難の聲としてハーンの胸を打つやうになつた。そして遂ひに蟲屋を訪ねて雌を一匹買つてやらうとしたけれども、時期すでに遅れて、彼の孤愁を滿たしてやる事が出來なかつた。そうした心の動き、一匹の蟲に對する温い心は、ハーンにして初めて求め得るところである。斯うして慈しみ育てられたこの幸運な蟲も、お花といふ下女の不注意から餌を絶やされて餓死して了つた。その時のハーンの嘆きは實に非常なものであつた。

「昨夜十一月二十九日一机に向つて居ると、室の中が何となく空しく妙な感じがした。氣がついて見ると私の草雲雀が、いつになく黙つてゐる。私は沈黙して居る籠に行つて見ると、彼は干からびた茄子の片けらの横に、小石のやうに灰色に硬くなつて死んでゐた。彼は確かに

此の三、四日といふもの食物を貰つてゐなかつたのだ、それにしても死の前の晩まで、彼は不思議な程歌ひ續けて居たので、愚かにも私は平常よりも機嫌がよいのだとばかり思つてゐた……中略 奇しき音は止んだ、靜寂が心を責める、そしてストーヴはあつても室の中は冷えきつてゐる……」

夏目漱石氏はハーンを評して「小泉氏程文章に整澤な人はない」と云つたといふが、彼は一度書いたものは、必らず少なくとも一ヶ月は机の引出に納ひ込み、再び取り出して缺點を改め補削して、練りに練つて始めて發表したといふ、さうした點は、確にファールにも似てゐる。元來非常な日本、それも舊い日本趣味の人で、最初就職の際にも日本の舊習が出來るだけ濃い所といふ希望で、松江中學を選んだのである。又氏は煙草が好物で、それも日本の長煙管でスパスパやるのが何よりの楽しみであつたといふ。更に氏の得意の餘技は水泳で、此の方面では毎年夏になると出かけるのを常とした静岡縣の焼津町には、いろいろな面白いエピソードが遺つてゐる。

彼は昆蟲學者ではない、又科學者でもない、從て自分で蟲の習性や形態を精しく觀察したり研究したりはしなかつたけれど、蟲に對する關心と、その生命に對する同情の念を持つてゐた事、そして其感想を詩のやうな文章を以て描き歌つた點では、フアーブルと共に確に蟲の詩人と云つていゝと私は思ふ。此の蟲の詩人は吾國に在る事十五年、一九四〇年(明治三十七年)東京西大久保の邸で、狭心症のため突然に斃れ、五十四歳にして再び歸らぬ人となつて了つた。そして昭和四年の九月二十六日は、彼が逝いてから滿二十五周年に當つたので、松江に於て、文人雅客に依つて盛大な追弔會が營まれた。

今年もはや草雲雀の時となつた、そして九月の二十六日が來るにつけても、私はハーンを想ひ、彼の名篇を読み返へしては、蟲の詩人を忍ぶ。

小泉八雲から

一、蠅物語

それは二百年ばかり前の事だが、京都に飾屋九兵衛といふ一人の商人が住んでゐた。彼は寺町通りに店を持つてゐて、若狭生れのお玉といふ下女を使つてゐた。

お玉は九兵衛夫婦から好遇され、眞實彼等に親しみ懷いてゐるやうに見えてゐた。ところで彼女は他の女の子のやうに、一向服裝を飾らうとせず、休暇を貰ふ事でもあると、綺麗な着物を數々貰つてゐたにも不拘、いつも仕事着のまゝで出て行くのだつた。九兵衛の所に奉公して

から五年許りもしてからの或る日の事、九兵衛はなぜ身装を綺麗にしようとしなひのかと彼女に聞いて見た。

お玉は此の詰問に顔を紅らめ乍ら恭しく次の様に答へた。

「私の両親が死にました時、私は未だ小さな子供でした、そして他に子供がなかつたので、両親のために法要を営むのが私の務めとなりました。當時私にはそれをする程のお金を得る事が出来ませんでした、その位牌を常樂寺といふ寺へ置いて貰ひ、必要なお金を儲けられたならば、早速法事を営んで貰はふと決心しました。それで其決心を果すために、私はお金と衣物とを儉約しようと努めました、——私が餘り儉約し過ぎたので、私の身装に構はぬのが御眼に觸つたのでせう。然し今御話申し上げた目的のために、銀百文ほどの貯へがもう出来ましたから今後は身を綺麗にして出るように致しませう。それ故今までの怠りと失禮とを何うか御赦し下さるやう御願ひ申し上げます」

九兵衛は此の眞卒な告白に感心して、やさしく少女に言ひ、今後どんな着物を着やうと自由

にするがいと安心させ、更らに彼女の親孝行を賞めてやつた。

此の事があつてから間もなく、下女のお玉は両親の位牌を常樂寺に置いて貰ひ、又相當な法要をして貰ふ事が出来た。斯くて貯金の中から七十匁を使ひ、餘りの三十匁を主人の妻に預つて呉れと頼んだ。

所が翌年の冬になつて間もなくお玉は突然病氣になり、暫く患つた後、元祿十五年正月十一日に死んで了つた。九兵衛夫婦は彼女の死を非常に悲しんだ。

さて、それから十日程経つた時の事、一匹の大きな蠅が家の中に入つて来て、九兵衛の頭の周圍を飛び始めた。何しろどんな蠅でも、大寒中には先づ出ないものだし、大形の蠅に至つては暖かい時候の折でなければ、滅多に見られないものであるから、此の事は九兵衛を驚かした。其蠅は餘りに執拗に九兵衛を悩ますので、彼は態々それを捉へて、それにしても九兵衛は信心深い佛教者であつたから、少しも其蠅を傷けないやうに注意して、戸外へ放り出した。ところが蠅は直ぐ様もどつて來た。そして又捉へられて放り出されたが、又しても入つて來た。九兵

衛の妻は之を不思議に思ひ、「玉ぢやないか知らん」と言つた。(死者―殊に餓鬼になる者は、―時に蟲の姿となつて戻つて來るものだから) 九兵衛は笑つて答へた。

「印をつけて見たら判るだらう」

彼は蠅を捉まへて、鋏で兩翅の先をちよつぴりと切つた、そして家からずつと離れた處へ持つて行つて放した。

翌日になるとそれは歸つて來た。九兵衛はそれでも猶歸つて來た事に何か靈魂的意義があるかどうかを疑つてゐた。彼はもう一度捉まへて、その翅と體とに紅を塗り、前よりもつとずつと遠い所へ連れて行つて放した。だが、二日の後眞紅のまゝ戻つて來た、そこで九兵衛は疑ふ事をやめた。

「それは玉だ」と彼は言つた「何か望があるのだらうが、何が欲しいんだらう」

妻が答へていふには、

「私はお玉の貯金の三十匁を未だ預つてゐます、彼女の靈を供養するために、そのお金をお寺

へ納めて貰ひたいのでせう、玉はいつも後生を非常に心配して居ましたから」

彼女が斯う語つた時に、その蠅は泊つてゐた障子から落ちた。九兵衛が拾ひ上げて見ると、それは死んでゐた。

そこで夫婦は早速寺へ行つて、小娘の金を坊さんに納める事に決めた。彼等は蠅の死骸を小箱に納めて、一處に持つて行つた。

住持の自空上人はその蠅の物語を聞くと、九兵衛夫婦の計ひを正しいと斷定した。それから自空上人はお玉の靈のために、施餓鬼をした。そして蠅の死骸に向つて妙典八卷を誦よまれた。そして蠅の死骸の入つた箱は、寺の境内に埋められ、その上に相當な銘を書いた卒塔婆そとばが建てられた。

二、螢の怪

ある寒い冬の夜の事、松江の若い一人の士族が、ある婚禮の宴會からの歸途、彼の住居の前の堀割の上を、螢火がフラフラ飛んでゐるのを見て吃驚した。雪の期節だのに斯んな蟲が外を飛んでゐるのを怪しみ乍ら、立停つてそれを眺めた、すると其光はいきなり彼を目がけて飛んで來た。彼は杖でそれを打つたところが、ふいと外れて彼の隣の家の庭へ飛び込んで了つた。

翌朝、隣人や友達に前夜の不思議な事件を物語らんものと、その隣家を訪れた、處が未だ其事を言ひ出す機を見ない中に、此の青年が訪ねて來てゐるとは知らずに、客間へ來合はした其家の長女は、吃驚して叫んで言つた。

「まあ、吃驚したこと、だつて、誰も貴男が來てゐらつしやる事を私に言ひませんでしたし、それに入つて來る時、恰度貴男の事を考へてゐたんですもの、昨夜私は實に不思議な夢を見ましたの、私は夢で飛んでゐました——私達の家の前の堀割の上を飛んでゐるのです。水の上を飛ぶのはとても氣持がいゝやうでした、私がそこを飛んで居ますと、貴男が土手沿ひに御いでになるのが見えました。そこで私は貴男の方へ飛んで行つて、私は飛ぶ事を覺えましたと申し上げようと致しましたら、貴男は私を御打ちになりました、そして餘りに恐しかつたので、今でも其事を考へますと慄然といたします……」

此の話を聞いて、客はこの暗合を話すと、自分と婚約になつてゐる娘の心を驚かしてはいけないと思ひ、當分彼の遇つた事件に就いて語らぬが上策だと考へた。

三、蝶の靈

東京の郊外の草山寺といふ寺の墓地の後に、高濱といふ老人が住んでゐた一軒家が久しく立つてゐた。彼は人づきがいゝので近所の人達から好かれてゐたが、誰も彼も彼を少し氣が狂つてゐると思つてゐた。人は僧侶の誓をしない限り、誰でも結婚して家を持つものである。所が高濱は宗教生活に入つてゐる者ではなかつたが、いくら勸めても妻を持たうとしなかつた。又何んな女とも戀愛關係に陥つた噂を聞いた者もなかつた。さうして五十年以上も全く獨身で暮してゐたのだつた。

或る年の夏彼は病氣になつた、そしてもう長い事はないと自覺した。そこで彼は寡婦やもめになつ

てゐた義理の妹とその一人息子——高濱が可愛がつてゐた二十ばかりの青年——とを呼びにやつた。二人は直ぐに來て、此の老人の最後を慰めるために、出来るだけの事をした。

ある蒸し暑い午後のこと、その未亡人と息子とが彼の病床で看護してゐると、高濱は眠つたと同時に一匹の大きな白い蝶が室へ入つて來て、病人の枕に泊つた。甥は扇子で逐ひ除けたが、又直ぐと枕へ歸つて來た、又逐ひ拂つても、又しても歸つて來るばかりだつた。そこで甥は庭へ追つて出て、庭を通り門を潜つて、近所の寺の墓地へと入つて行つた。ところがそれは、遠くへ逐はれるのをいやがるかのやうに、いつも彼の前を飛んで、如何にも不思議に振舞ふので、彼はそれがほんとに蝶なのか、それとも魔ではないか知らんと、審まかり出した。

彼は更に追つて墓地の奥まで隨いて行つて、それがとある一つの墓——婦人の墓——へ向つて飛んでゐるのが見えたが、ふと不思議に見えなくなつて了ひ、いくら探しても見つからなかつた。そこで彼は其石碑を調べて見た。それには聞いた事もない姓について「あき子」といふ名と、あき子は十八の年に死す、と彫つてあつた。墓は確かに五十年ばかりも以前に建てられ

たもので、苔が生へ出してゐた。然しよく手入れがしてあり、墓前には新しい花が供へてあり、水槽には新しい水が一ぱい満たされてゐた。

病室へもどつて來ると、青年は叔父が呼吸を引き取つたと聞かされて吃驚した。彼は眠つたまゝ苦しみなく死んで行つた。そして死顔は微笑んでゐた。

青年は墓地で見た事を母に語つた。

「あゝ」と寡婦は叫んだ。「ぢやあ、それはあき子だつたに違ひない」……

「あき子つて一體誰ですか、御母さん」と甥は尋ねた。

寡婦の答へによると、

「お前の叔父さんが若い時に、叔父さんは近所の娘のあき子といふ、可愛い娘と許嫁になつてゐた。あき子は結婚の約束の日のほんの少し前に肺病で死んで了つた、それで良人になる筈だつた叔父さんは大變悲しんだ。あき子の葬式がすんでから、一生結婚はしないと誓つた、そしていつも墓の近くにゐられるやうにこの小家を建てたのだ。それは皆な五十年以上も昔の事だ。

そして五十年の毎日——冬でも夏でも——お前の叔父さんは墓地へ行つて墓を拜み、石碑を清め供物を供へられた。だがその事を人に言はれるのが嫌ひで、一言もそれを口にされなかつた……それぢやあ、あき子が迎ひに來たのだ、あの白い蝶は彼女の魂だつたのだ——

四、蟻の言葉

昔支那の臺州に信心深い一人の男がゐた。その男は長い年の間毎日ある女神を熱心に信心してゐた。或る朝の事、彼がお祈りをしてゐると、黄色い衣物を着た美しい一婦人が彼の室へ入つて来て、彼の前に立つた。彼は非常に驚いて、何の用で、又何ぜ案内もなく入つて来たのかと尋ねた。彼女が答へるには、「私はただの女ではありません、私は貴下が長い間熱心に信心して下さる女神です、そして私は今貴下の信心が決して無駄でなかつて事を證據立てるためにやつて来たのです……貴下は蟻の言葉が判りますか」

信者は答へた、

「私は卑しい生れの無學者で、學者ではありませんから、上流の人達の言葉さへ全く知りません」

それを聞いて女神は微笑した、そして懐から香箱のやうな小箱を取り出してそれを開け指を突つ込み、膏わらみたいなものを取り出して、それを男の兩耳に塗つた。

「さあ」と彼女は男に言つた、「蟻を見つけないさい、そして見つかつたらば、蹲しゃがんで彼等の話を注意して聞いて見なさい。貴下はそれが判ります、そして貴下の爲になるやうな事を聞くでせう……たゞ一つ蟻を嚇おそしたり困らせてはいけないといふ事を忘れてはなりません」

斯う言つて女神は消えて了つた。

その男は直ぐ様蟻を見つげに出かけた。彼は門口の闕しきを跨またぐが早いか、その家の柱の一本を支へてゐる石の上に二匹の蟻を見つけた。彼は體を屈かめて立ち停つて耳を立てた。すると驚いた事には、彼等の話し合つてゐるのが聞えて、その言つてゐる事が判るのだつた。

「もつと暖かい場所を見つげに行かふぢやないか」と一方の蟻が提議した。

「なぜもつと暖かい所だなんていふのだ」と相手の蟻は尋ねた。「此處が何うかしたとでもといふのかね」

「餘り下が濕つぽくて冷たい、こゝには大きな寶物が埋めてあるので、お陽様も此の邊の地面を暖め切れないのだ」と最初の蟻が言つた。そして二匹の蟻は連れ立つて往つて了つた。これを聞いた男は鍬を取りに走つて行つた。

柱の近所を掘つて見ると、やがて彼は金貨の一杯詰つてゐる大きな壺が幾つも見つかつた。此の寶の發見で彼は大金持になる事が出來た。

その後彼は幾度も蟻の會話を聞かうとしたが、二度と彼等の話を聞く事は出來なかつた。女神の膏藥は、蟻の不思議な言葉に對して、たつた一日だけ耳をあけて呉れたのみだつた。

森の人ソロー

自然の色々な事物の有様や生き物の動きを見詰める度に、フアーブルや小泉八雲と共に私の胸に浮ぶ一人の文人がある、それは「森の人」Henry David Thoreauヘンリー・ダヴィッド・ソローその人である。彼は一八一七年七月十二日、米國マサチウセツツ州のコンコードで、佛人の父と、ニウイングランドの僧侶の娘である母との間に生れた。その少年時代には、牛を逐ふて牧場や林の間を彷徨さまよふのを常としてゐたが、さうした生活は彼をして大自然に親しましめ、その懷に秘められた美や不斷の變化に對して、極度の愛着を持たしめた。廣々と横はる牧地、さらさらと流れる小川の岸、さうした所は彼にとつては、貴い寶の庫であつた、僅か十二才の時、當時の瑞西の大博物

學者アガッシーのために、ソローは澤山の標本を蒐めて研究を助けた。又當時有名な哲學者のエマーソンは、彼について斯んな事を言つてゐる。

風に教はるのか

雀に教はるのか

それとも秘密の印にでもよるのか

遠くに生へてゐる蘭を

ちやんと彼は知つてゐる。

ソローはハーバート大學に學び、一八三七年其處を出ると、兄と共に暫くある私立學校の先生を務めてゐたが、間もなくやめて、一生を自然研究に捧げる事に決めた。彼は元々決して怠け者ではなかつた。然し一定の職業人として月給を貰ふよりも、垣根や小船を造つて必要な金を儲けようと思つた。だが、いつも變つた土地へ行つて、新しい觀察が出来るといふ便利の爲るために、結局は土地の測量師となつた。

自分獨り切りの力と大自然とに頼つての生活——それはロビンソン・クルソーがしたやうなあの孤獨生活が、此の自然兒には適してゐた。一八四五年に、彼は人間でも諸々の鳥だの栗鼠だのゝやうに、その仲間から全く孤立して生活する事が出来るといふ事の實驗を始めた。そしてワルデン・ポンドの海岸に近い松山の上に、さゝやかな小屋を建て、その中で二年間たつた一人住んで、讀んだり書いたり或ひは林の鳥や池の魚を見て暮した。

鳥でも魚でも蜥蜴でも、一度は彼を見て驚いて逃げたものが、好奇心から、さもなくばその持つた習性から、再び戻つて来るまで、彼はじつと動かないで待つてゐた。さうした結果終ひには、小鳥は彼の呼聲を聞くと彼の傍に集り、魚さへもが少しも恐れなく、彼の手の間を抜けて泳ぐ程になつたといふ。

ソローは實に自然を愛した、従つて其の著書は、美しい景色や絶えず變る野の花の事や、いろいろな動物の風習の記録で満たされてゐる。

斯うした自然と孤獨との熱愛者の彼が最も憎んだのは、自然を破壊する文化の斧であつた。

少年時代に逍遙した懐しい林が切り拂はれ、草地が刈られて、工場や住宅が頭を並べるのを見て、彼は悲しんだ。さうした彼にとつて只一つの慰めは雲の動きだつた。

「如何に斧でも、あの雲だけは切り倒す事は出来ない」

斯う云つて空を眺めて神に感謝した。

此の「森の人」は一八六二年五月六日四十九才で此の世を去つた、そして彼は今、當時の有名な小説家のハーソーンや哲學者のエマーソン等と一處に、Concord Sleepy Hollowの美しい墓地に、靜かに睡つてゐる。

快よい社會

今この地球上に棲息してゐる幾十萬種の動物の中で、人間を除けては蜂の一部のものと蟻ぐらゐ、優れた團結と互助との精神の持主は他に無い。そして蟻や蜂では團結互助の精神と行爲とは、發達の極現在では全く本能的の域にまで達し、既に吾々さへも及ばぬ程度にまでなつてゐる、そして彼等の社會には、それこそ羨ましい位に、平和の空氣が充ち満ちてゐる。だが彼等の社會が吾々人間から觀て、平和と平等との極限であり、團結と互助との模範的世界である原因としては、彼等の本能的勞働行爲の他に、もう一つ見のがしてならない大原因がある、それは社會を造つてゐる人民ならぬ蟻民若くは蜂民全部が、眞に骨肉關係で連がつてゐる點だ。

蟻や蜂の所謂社會なるものを調べて見ると、それは小數の雌雄兩性から成る生殖階級とでも呼ぶ可き一組と、卵巢の發育不十分なため生殖力の無い、小形の雌から成る多數の勞働階級（所謂働蟻又は働蜂）若くはやはり生殖力のない、稍大形の雌から成る護國階級（是れは蜂にはないが蟻には兵蟻として存在してゐる）の二つ或ひは三つの階級の對立又は鼎立から成つてゐる。而かも是等の各階級に屬してゐる者達は、何れも自己の職分と言ふか、社會的仕事を分擔して、互に争ふ事も邪魔し合ふ事もなく、それぞれ忠實に働いてゐる、然しそれは前にも言つた通り、學術的には本能の命する所に従つて行動してゐるので、決して不思議でない事になつてゐる、だが彼等がその社會的仕事に對する満足と、團結互助との原因として、私は勞働本能説以外更らに一つの原因を擧げなければならぬと思ふ、それは彼等の所謂社會を構成してゐる分子が、悉く骨肉同志であるといふ事だ。

先づ彼等の社會のアクティヴメンバーである勞働階級の者は、假令幾千幾萬居やうとも、それは生殖階級の中心である一母性（所謂蜂の女王又は蟻の女王と稱へられてゐるもの）から

生み出された子供なのである、といふと諸君は蟻や蜂の雌の産卵能力に就いて知りたく思はれるであらうが、蜜蜂の雌は一生の間に百萬の卵を産む事が出来るし、蟻も亦同じ位産む、更に白蟻の雌になると、一秒に一個の割で日に八萬、此の割で五、六年も産み續けるのだから、その總數は實に大したものである。

斯様な譯だから彼等の所謂社會なるものは、實は大規模な家族に他ならないので、強いて名づければ、社會學で謂ふ自然社會中の人種社會、又は母長社會、國に例へれば族制的國家ともいふ可きものに當つてゐる。

以上の様な譯故勞働者同志や兵隊同志は、何れも血を分け合つた姉妹であると共に（是れは前にも一寸言つた通りに、卵巢の發育不十分な雌同志だから姉妹といふ譯で、逆に卵丸の發育しない雄といふものは、彼等の間には全く生れない）勞働階級や護國階級と生殖階級とは眞の親子の關係といふ事となつてゐる。

彼等の社會なるものが、團結と互助との模範であり、平和と平等との極致に在るのは、蓋し

決して偶然ではないのである。

所で一つの社會内では、吾々人間ですら眞似の出来ない程の平和な心の持主である彼等でも他の社會の者、言ひ換へれば他人ならぬ他蟻他蜂に對しては、極端な敵意と憎惡とを示すものである。即ち異社會の者同志はいつも囁み合つてゐて、領土の占據や食糧の奪ひ合ひから、喧嘩若しくは時に大規模な戦をさへやる事は珍しくない、そして平常は慎ましやかな彼等も、驚く程慘忍とも冷酷ともなり、死を睹しての格闘や激戦をやる、世に蜂合戦とか蟻合戦とか謂はれてゐるのは、何れも彼等の社會と社會、或ひは異種族と異種族との間に於ける、敵愾心の爆發の結果である。

さて、想ふに團結互助の點では、殆ど神に近い域にまで達してゐる蟻や蜂でさへも、その協力相助は血を分けた者同志の間に限られたもので、見ず知らずの者に對しては全く通用しないのみか、逆に之を敵視するのである、是れを以て見ても、動物が持つ鬭争心なるものが、如何に根強いものであるか諸君は御諒解になるであらう。而も此の心持は、現在生物界の最高を以

て自任してゐる吾々人間に於ても、減つてゐる所か却つて旺んな程である。個人同志の喧嘩から家族と家族との不和、團體と團體との争ひ、大きくしては國と國との戦ひなど、一つとして鬭争心の表はれでないものがあらうか。

此の鬭争心は生物學的には本能の一つであり、總てが生れ乍らにして持つてゐるので、生物が自然界の激しい競争裡に生活して行くには、無くてならぬ必携物なのである。斯くて吾々人間も此の本能の支配を受けて行動する點では、一介の蟲ケラと殆んど差がないのである。然し人間と動物との間にはたつた一つの違ひがある、それは人間には本能以外に理性がある事だ。是れは他の如何なる動物にもない特點であつて、是れに依つて人間は凡ゆる感情を抑へ本能を制御し、以て人間の間たる所以を發揮する事が出来るのである。

或る一派の人達は、全人類のための平和な快よい世界の建設策として、先づ現在社會の組織の改革、經濟制度の合理化、富の分配の公平などを説く、だが夫れ等の人は、凡ゆる動物を通じて（無論人間も含む）根強く植ゑ附けられてゐる、鬭争本能のある事を全く忘れて居はしな

いだらうか。假令社會組織が改まり、經濟制度が合理化し、富が公平に分配されても、人間から醜い鬭争本能が失くなり心の平等が實現されぬ限り、眞の平和な快よい世界は、決して生れないであらう、と言つたところで、鬭争心を今直ぐ人間から取り去る事は到底も出來る事でない。然しそれは理性を培ひ道徳心を昂める事に依つて、或程度まで抑へる事は出來る見込がある。さう思ふ時、萬人平等で快よい平和な世界の建設には、組織や制度の改革や富の分配などよりも、先づ人間の心の向上の方が先決問題ではあるまいか。

大戦以後世界の人心は非常に變化した、そして階級觀念の退歩に伴れて、全人類を打つて一丸とした平和平等な世界の建設を夢見る人が、非常に殖へて來た。然し夫れ等の人達は表面の事だけを考へてゐるだけで、人間の本性、生物の一種としての人間といふものを全く考へてゐない。

眞の平和平等の快よい世界、それは組織や制度の改革、或ひは富の分配などに依つて造られるものではなくて、人間の心の進歩、道徳的向上に依つて築かれるのだと私は思ふ。それは

蟻や蜂の社會を見ても判るが、猶社會主義者の大立物たるロバート・オーエンが、北米インディアナ州に建設した共產主義の村「平和平等の村」が失敗に終り、その解散に際して天下に宣言した左の言は、此の間の消息を雄辯に裏書してゐる。曰く、

「想ふに個人主義の組織そのものは、一つの迷想を根據とするに過ぎないけれども、而かもその組織下に訓練された家族は、相互のために節欲慈愛の徳性に欠けてゐる。所が此の徳性なるものは、全同志間に、完全な信任と調和とを保つためには必要欠く可からざるもので、これが欠けてゐては共產村の存立は到底も不可能である……」

私は重ねて言ふ、人類間の眞の平和な快よい世界の建設には、人間の道徳的向上進歩が先決問題であると。

詩の昆蟲學者フアーブル

科學の詩人といはれ、生きた昆蟲學の恩人と讃へられてゐる吾がアンリ・フアーブルは、西歐は勿論のこと、極東の島國日本に於ても、今や誰知らぬ者のない程有名である。何故にかくも彼は有名なのであらうか、それは進化論の開祖チャールス大ダーウインの言葉を借りていへば、「比ひのない」自然の「觀察者」であり、又エドモンド・ロスタンの言葉に依れば「哲學者のやうに考へ、美術家のやうに見、そして詩人のやうに感じ且つ書く」稀といふよりも、未だ曾て吾々人類が持つた事のない、又恐らく再び持ち得る機會はあるまい、と云つて差支へなからう程の、優れた詩人的昆蟲研究者であり且つ自然の觀察家であつた故である。

此の優れた昆蟲研究者は（私はフアーブルの事を昆蟲學者と呼ぶのは、彼のために惜しい氣がする。彼は昆蟲といふものを一定の人爲的系統に當て嵌めたり、昆蟲の生活を無理に一定の法則や規範の中に押し込めようと努める、所謂昆蟲學者でもなければ、他人の研究や學說の比較研究に、日も是れ足らぬ昆蟲學者でもない、彼は昆蟲の生活そのものを生物としての觀點から實驗觀察し、その結果を人生と比較し、之に科學的解釋と批評とを與へた、眞の昆蟲研究者なのである）今から九十六年前、西曆一千八百二十三年に、南フランスはアヴェロン縣のサン・レオンといふ小さな村の小百姓の子として生れたのである。そして彼の父はフアーブル自身の言葉を借りていふと、「土地を耕したり、裸麥を蒔いたり、牛を飼つたりする」貧しい百姓であつた。斯様に瘠地を引つ搔いて僅かに暮しを立てゝゐた所謂水呑百姓の子として生れたフアーブルは、もう僅か五つ六つの時分から、步行蟲をさびしの美しい翅や胡蝶の美に對して強い眩惑を感じ、恍惚として吾を忘れる事が屢々であつたといふ程、豊かな詩感と自然物に對する感興心とを備へて居たのである。そして其七歳の時サン・レオンの小學校へ入り、十二歳の時に一家と共にロデ

市に移つて、其處の中學校へ入つた。處が此處ではファートルの父は百姓をやめて、カツフェを開いて一家を糊してゐたが、何分片田舎の安カツフェの事とて、収入も少なく暮しも苦しかったので、ファートルは自分の授業料を拂ふために、日曜日になると、町の禮拜堂でピラ撒きの手傳ひをしなければならなかつた。

在學四年にして一家は又しても居を轉じて、トゥルウズ市へ移り、ファートルは其處の神學校へ無月謝で入學したけれど、五年級を了へると、又しても家族の轉居のため、退學の止むなきに至つたのである。而も一家の生活は益々苦しくなつて來たので、彼は學校へゆくどころか自ら働いて食料の一部を稼ぎ出さねばならなかつた。そんな事情で未來の大研究家は町の市場でシトロン賣となつたり、鐵道工夫として働いたり、それこそ慘めな痛ましい生活を送つたのである。

だが諸君よ、言葉は古いが、「泥中の蓮」といはふか「梅檀は双葉より香ばし」といはふか、吾が自然科学の偉人は斯かる逆境に在つても、尙自然を愛する事と詩を読む事とは忘れなかつたのである。

たのである。即ち彼は乏しい財布の底をはたいて、ルブウルの詩集を買つて讀み耽り乍らいろいろな蟲を集めたり、その生活を見る事を怠らなかつた。

斯様にして苦しい慘めな生活を乍らも、彼はいつも理想に充ち満ち、アヴィニオン師範學校の給費生にならうと思つて、試験に應じたところ、見事にも首席でもつて入學する事が出來た。だが一旦入學してからのファートルは餘り出來のよい生徒ではなかつた、といふのは當時の師範學校の教育なるものは、今と違つて文法や數學などが學科の大部分を占めてゐて、生物學なんてものは、まるでそつち除けにされてゐたので、ファートルにとつては學科は、全くゴムか砂を嚙むやうなものだつた。そして彼は文法や書取などを、反對にこつちからそつち除けにして、胡蝶を捕まへて來て調べたり、岩の上に寝轉んで、自然の景色に見惚れ乍ら詩を作つたりしてゐるといふ有様だつた。そんな譯だから彼の成績は頗る香ばしくないのみか、二年の頃は怠者と言はれ、低能者とまで罵られるに至つた。だが彼は果して怠者であり、低能兒だつたであらうか。

道がのフアーブルでも此の低能者といふ罵りは餘程骨身にこたへたと見えて、奮發一番素晴らしい努力を以て名譽回復を計つたが、その効果あつて三年の學年末には優等證まで貰つて、十九歳の春彼は師範學校を卒業した。

師範學校を出た彼は、カルパントラス公立中學校の附屬小學校に年俸僅か七百フランで教鞭を執る事となつた。之が彼の社會生活への初陣である。そして足かけ九年間小學校教員として暮した。そして低い待遇に甘んじつゝ、彼獨特の教育法でもつて腕白小僧達を教育し、大いに成績を擧げた。と同時に彼は自らも勉強して數學と物理との免狀を得る事に成功した。又彼が結婚をしたのも此の時代であつたので、二十二歳の時やはり小學校教員をしてゐたリー・ヴィラールといふ女教員を娶つて妻とした。斯うして彼は若い妻を得た喜びや數學と物理との免狀を贏ち得た得意も束の間で、生活の苦しみや位置の不遇は容赦なく彼に襲ひかゝつて來た、殊に俸給の不拂ひといふやうな事があつたので、これには辛抱強いフアーブルも餘程へこ垂れたと見え、「ちつとばかりの金を貰ふのに、會計係の戸口へ御百度を踏まなければならぬなん

て、全く嫌になつちまふ、何處かで金の工面が出来るなら、こんな位置なんぞ棄てつちまふ」と嘆息してゐる。それから又位置の不遇、これも亦道がのつゝましましやかなフアーブルをして極度に憤慨せしめた、といふのは前にも書いた通り、フアーブルは將來の進展を計るために、物理と數學との免狀を取つて、ひたすら官立中學校の物理の先生たらん事を望み、しきりに轉任の報を待つてゐた。ところが此の望みは却々遂げられぬのみか、碌でもない腕なしの他の連中の方が、替つて轉任してゆくといふ次第であつた。そして道がの彼もたうとう勘忍袋の緒を切らして、ニイムのアカデミー院長へあてゝ不平のありつたけを投げ附けると共に、一日も早く自分の位置をどうかしてくれと頼んでやつた。その當時の彼の憤激は彼から弟へ出した手紙を見るとよく判る「その不公平たるや、實に前代未聞である、こんな事は未だ嘗て無かつたし、又今後何時になつても有るまい、學士號を二つも呉れて置き乍ら、腕白小僧達に、動詞の活用を教へさせるなんて、全く言語道斷だ……」と云つた調子である。

然しいよいよ彼の望みが達しられる時が來た。一八四九年一月二十二日、彼が二十七歳の春

省令によつて彼はコルシカ島のアジャツシオ中學の物理の先生として赴任する事となつた。

フアーブルはアジャツシオ中學の先生としてコルシカ島に渡るや、其繪に見るやうな麗はしい自然に對して、心からの喜びと満足とを感じると共に、先づ此の島の陸と水とに棲んでゐる、凡ゆる貝類の研究を思ひ立つて、片つ端から採集を始めた。それから又當時コルシカに居た植物學者ルキヤンと親しくして、その門人となり、彼から多くの植物の名を教はつて、大いに得る所あつたのみでなく、猶いろいろな事の相談相手として頼りになる友としても交つてゐた。それ故後にルキヤンが死んだ時には、フアーブルは泣きくづれ悲しんだといふ。だが其後ルキヤンに代つてコルシカへやつ來たモツカン・タンドンと相識るに及んで、フアーブルは更に一層の知識を得るに至つた。それにタンドンといふ人は、音に優れた博物學者であるばかりでなく、雄辯家及び傑れた作家としても知られてゐた人で、フアーブルに向つて、假令植物學のやうな純記述的科學の記載の場合でも、文體や用語や記載の形式等に、大いに意を用ひねばならぬ事を訓へたのも彼であつた。それから又或る日彼は蝸牛かたつむりを解剖かいほうして見せてフアーブルの研究

心に對して、異常な暗示と啓示とを與へた。即ちフアーブルはそれ以來、單に好奇心を満足させるに過ぎない、死んで干からびた標本の蒐集のみに熱中する事を止めて、從來まるでやつて見なかつた解剖を盛んにやり始めたのである。

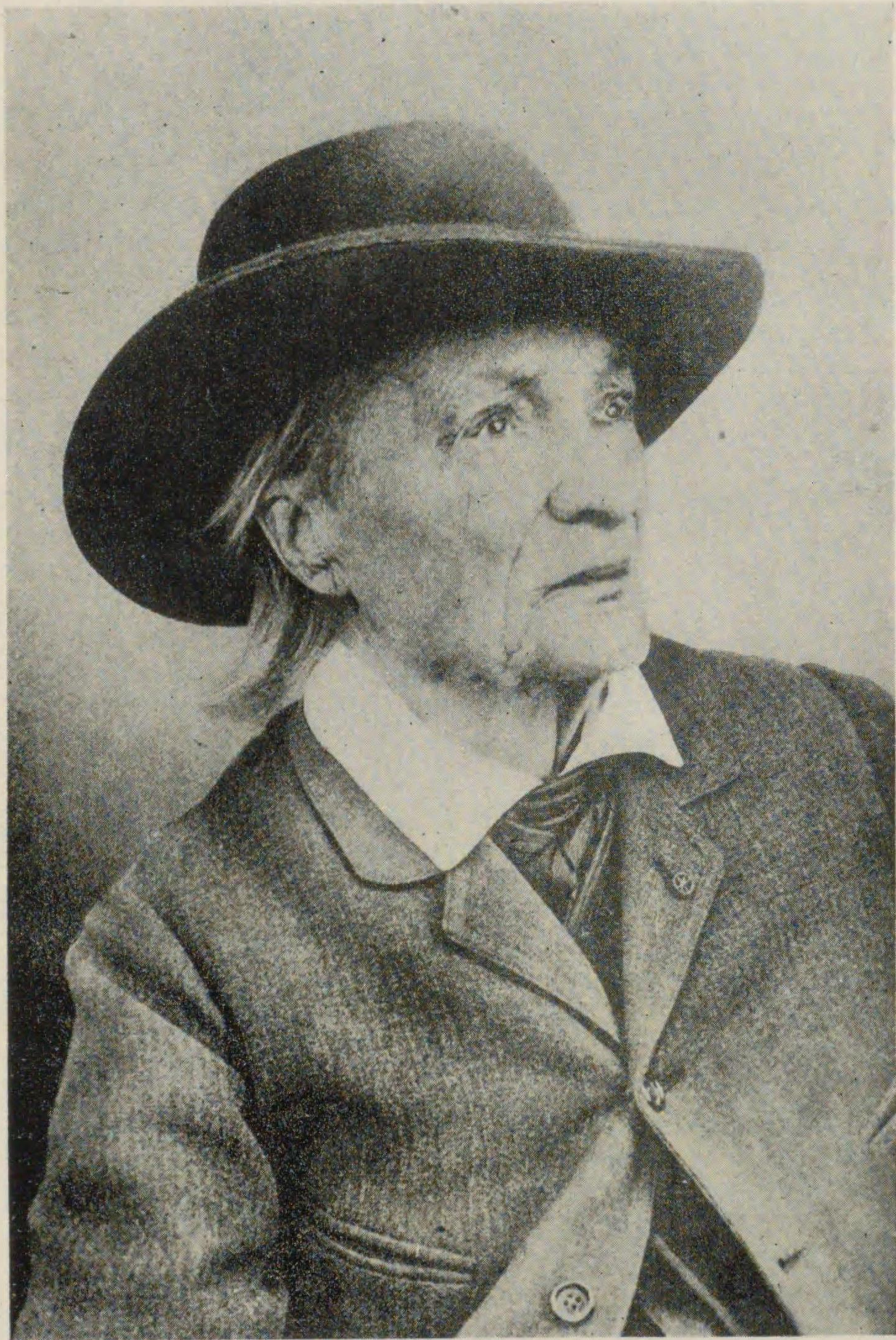
斯くしてフアーブルは、此の孤島生活の間に於て、非常に得るところがあつたが、不幸にして彼は熱病に罹つたために、此の島を去る事になつた。その熱病といふのは、恐らく今のマラリヤ熱であらう。その特徴たる惡寒と激しい發作的震ひとの爲に、彼はひどく疲勞と衰弱とを來たし、遂に自らコルシカ島を去る事に決めて、本國へ歸へる事が出来るやう、轉任を請願したのであつた。その結果コルシカに滞在する事僅かに四年にして彼は大陸へ歸り、アヴィニヨンの中學へ移る事となつた。

アヴィニヨンに於ける彼の生活は實に二十餘年に亙り、彼の生涯中最も波瀾に富んだものであつた。勤勉と努力とによつて、動植物の兩學位を得たのも此の時代であつたが、又世間から逐はれ貧困の裡に沈淪したのも亦此時代だつた。

彼はアヴィニヨンに移ると共に、猛烈な勢をもつて動植物の研究に没頭し、先づ或る蘭科の植物の塊根の研究論文で植物学の學位を、又「多足類の生殖器の解剖とその發生」といふ論文で動物学の學位をも併せ得たのであつた。

斯様にして彼は着々として、生物學者たるの資格と地位とを占めて行つたので、若し次のやうな一事がなかつたならば、フアーブルは或ひは生物學者として有名になつたかも知れないが、蟲の研究者、蟲の觀察者としては世に出なかつたかも知れない、それ程當時のフアーブルは一般動物に對した興味をもつてゐたのであつた。

そして彼をして蟲の研究に興味を持たせ、その隠れた觀察眼と、實際の天才的能力とを現はさしたのは、實にレオン・デュフウルの著書であつた。當時デュフウルは佛國の昆蟲學の長老として重きをなして居たが、その著書の中で、つちすがりといふ蜂の或るものが、その幼蟲の食物として與へる吉丁蟲^{たまびし}が、蜂のために蝨し殺されて居乍らも、長い間敗腐もせず色も變らないのは、蜂の毒の中に、防腐劑が含まれてゐるためである、と説いてゐた。此の研究を讀んだフ



詩の昆蟲學者アフール

アーブルは、その蜂の奇妙な習性に對して異常な興味を覺えると共に、デュフウルの説を事實に就いて、自らやつて見る氣になつた。その擧句彼はデュフウルの説なるものが間違ひで、蜂の犠牲者は決して死んでるのではなくして、永久の深い魔醉に陥つてゐる事を確かめたのであつた。そして一八五五年、フアーブルは自らの研究を纏めて、「つちすがりの習性と此の蜂が幼蟲にやる甲蟲が長い間腐敗しない理由とに關する觀察」といふ題の下に、自然科學雜誌へ發表して、大いに學界の注意を惹いた。此の研究業績は實にフアーブルが出した昆蟲の處女論文であつて、此の時以來彼は自ら自己の前途を視、昆蟲の研究に全力と全生涯とを献げる事を決心するに至つたといはれてゐる。時に彼は三十二歳(滿)の壯年であつた。(猶このつちすがりに就いては昆蟲記第一卷に詳しく出てゐる。)

彼は休日になると、アヴィニオンから二哩ばかりのポンテへ行つて、當時その農場の作男みたになつて働らいてゐた父を訪れ、或ひは又採集道具を身につけて、カルパントラスへ出かけて、昆蟲の研究をやつた。このカルパントラスといふ所は、非常に昆蟲に恵まれてゐた所

で、彼は此の地で、蟋蟀を魔酔さして幼蟲に與へるあな蜂の研究、まめはんめうの一種シタリスやつちはんめうとはなばちとのあの謎のやうな生活史の觀察をやつたのである。

斯うした研究觀察は、實に傑作的のものである事は誰も知る通りで、此の研究以來、彼は漸然その頭角を現はし、當時の學士院團は一八五六年フアーブルに對して、實驗生理學賞を與へてその功を推賞したのであつた。

この他に尙はなむぐりの幼蟲を狩るあかすぢ蜂、蠅を狩るはなだか蜂の觀察を始め、糞玉を轉がす、あの有名な玉押しこがねスカラベ・サクレの研究にも着手した。だが是等の優れた研究は、決して一朝一夕で出来上つたものではなく、あかすぢ蜂の歴史を完成するには二十年、スカラベ・サクレの習性とその幼蟲を育てる育兒室の神秘を探るには、實に四十年に近い年月を費してゐる。

斯様にして彼は絶えず未知の神秘を探り、獨創的研究に没頭して着々業績を擧げたけれど世間及び同僚達のフアーブルを見る眼は實に冷やかなものだつたので、その生活の如きも寔に

痛ましいものであつた。第一にアヴィニオン中學から受ける俸給なるものが、寔に僅かで千六百フラン（コルシカに居た時よりも二百フラン下つてゐる）而も當時のフアーブルの家庭で食卓につく人數は、七人の多勢であつたといふことであるから、如何に物價の安い田舎でも、生活は極めて苦しかつた事はいふ迄もない。それに此の安月給は、彼が二十年の職務を果して、いよいよアヴィニオンを去るまで、一錢の昇給もせず、依然として千六百フランに据え置かれたといふのだから驚く、そんな譯で、如何に辛抱強く且つ慎しいフアーブルも、生活の必要から迫る不足費を得るために、激しい餘計な努力を拂はねばならなかつた。即ち規定の講義以外に、生徒に復習をしてやつたり、個人教授をしたりして、やつと家族を養つてゐた。

然し斯うした仕事は、彼自身の研究の時間の大部分を奪つた事はいふまでもないので、それはフアーブルにとつて實に辛い悲しい事であつたけれど、家族の生活のためには忍ばねばならなかつたのである。それから又彼の同僚達は、フアーブルが高等教育を受けてゐないで、大學の教授となる資格がないといふので、事毎に彼を輕蔑し、又時々優れた研究を發表して評判が

出たりすると、いたくそれを妬むの餘り、彼に厄介者といふ意味で「蠅」といふ^{あんな}緯名を附けたりして秘かに喜んで居たといふことである。

斯んな冷遇を受けた事は、無論當時の人間に、此の大詩人的研究家の眞價を解し得る頭腦がなかつたのに由るけれど、又一つにはフアーブル自身の性格も可なり頑固であつたらしいのである。殊にその野生的な性格と孤獨主義的な傾向が與つて力あつた事は云ふ迄もない。兎に角斯んなにも周圍から冷たい眼で視られ、酷い生活をし乍らも、吾がフアーブルはアヴィニヨンの町を去らうとは思はなかつた。それといふのは、彼は最初の成功の舞臺でもあり、且此の地方が蟲の研究にとつて、豊かな豊庫であつた爲でもあるが、又一つには舊友ルキヤンが此の町に遣して往つた、澤山の圖や植物標本に強い愛着心を持つてゐたからでもあつた。そんな譯で、當時幸ひにも話のあつたポアチエとマルセイユ兩大學の助教授の席を、惜し氣もなく斷つて了つた。

さう斯うしてゐる時、一八六八年、時の文部大臣ヴィクトル、デュルイは、突然にも此の蟲の觀察者の實驗室を訪問した、デュルイが一體どう考へて、彼を訪れる氣になつたかは判らない

が、此の訪問によつて、デュルイはすつかりフアーブルの心意氣と研究とに感じたと見えて、その後間もなく切に請ふて、フアーブルをバリへ招いて心から饗應した上、その場でレジョン・トンヌウル勳章を授け、その翌日にはテユイルリイ宮殿で、時の皇帝に拜謁の榮を得させたのであつた。

それから又其後デュルイは、夜學校を起して、科學に立脚した自由講座を開き、當時未だ迷信に捉はれてゐた民衆の啓蒙を企て、その講座の擔任講師の一人として、フアーブルを採用したのであつた。さういふ點に於いて、デュルイは、實に當時稀に見る進歩的文相であつた。そしてフアーブルは毎夜サン・マルシャルの僧院で、彼の得意とする生物の講義をやつた。そして是が縁となつて、經濟學者であり、政論家であり、且又哲學者でもあつた當時の英國の大立物ジョン・スチュアート・ミルとも相識るに至つた。ミルは當時愛妻を亡くしてアヴィニヨンの郊外の別荘に、淋しい日を送つてゐたのだが、フアーブルの人格と教養とにいたく心を惹かれると共に、又彼が年來の宿望たるヴォクリウズ縣の植物蒐集の計畫を果すために、フアーブルと

結んで實行に着手した。そしてフアーブルは主として隱花植物の部を引き受ける事を約し、二人はよく伴れ立つて採集に出かけた。

斯うしてゐる間にも、周囲の俗人共の吾がフアーブルに對する嫉妬や反感は日に日に募り、迫害は刻々と迫りつゝあつた。殊にサン・マルシャル僧院で開かれた自由講座でのフアーブルの講義は、老人や似而非學者の嫉妬と憎惡とを買ひ、彼等はフアーブルを獨修の成り上り者と輕蔑し、又若い娘達の前で植物の生殖作用を説くなんて事は、アヴィニヨンの神聖を瀆す行ひであるとして極力非難攻撃の矢を放ち、當時勢力を占めてゐたカソリック黨の連中は、先づ第一に、自由講座の創設者たるデュルイの排斥を企て、彼の不都合を上院に訴へて之を彈劾した。そして追がのデュルイも遂に彼等の前に倒れ、茲にフアーブルはその唯一の保護者を失つて了つた、のみならず彼等反對者の手はフアーブルの私的生活にまで伸び、その御先棒となつた家主は、フアーブルに向つて立ち退きさへ迫るに至つたのであつた。これを以てしても當時の間が、この比ひなき蟲の觀察者に對して、如何に冷酷無理解であつたかが判るであらう。

ところが豫ねてから逼迫した生活を送つてゐたフアーブルは、冷酷な家主から立ち退きを迫られても、引つ越し費用の貯へさへ持つてゐなかつたのである。それに平常から俗人達との交際を避けてゐたフアーブルには、こんな時に救ひを求め得るやうな一人の友も、アヴィニヨンの町には居なかつた。そして此の窮境に當つて、彼が胸に描いた唯一人の救ひの手は、實にジョン・スチュアード・ミルだつた。そこでフアーブルは今の苦境をミルに訴へて救ひを乞ふたところ當時英國に歸つて下院議員をしてゐたミルは、直ちに三千法郎フランの金を送つて、此の不世出の研究家を救つたのであつた。

フアーブルはミルの厚意を享けると、早速アヴィニオンを退いて、オランジュへ移り、その町外れに靜かな一軒家を探して身を落ちつけた。

一八七一年、それはミルの救ひに依つてオランジュに退いたフアーブルが、同時にうるさい教育界に、永久におさらばをして、自由な身、誰からも指一本さゝれない、氣樂な研究者としての生活に入つた、記念すべき年である。だが自由な研究者の境遇といふと聞えはいゞけれど、

その實定収入を失つた彼の生活は、今迄以上に逼迫して來た。そこで彼はその生活を支へるために研究の傍ら教科書を書き、又子供に讀ませるための通俗科學書の筆を執つて収入を得る事に力を盡した。これ等の著述は、今やフアーブルの科學全書として有名であるが、當時にあつても一時は相當人氣を博し、彼の生活を支へるのに大分役立つたと云はれてゐる。それにフアーブルの唯一の味方であつた彼のデュリイの如きは、彼の著書を読んで見て、時の皇太子の教育を、フアーブルに任せようとしたとさへ傳へられてゐる。然しそんな事は別としてオランジュ生活に於て特記すべき事は、一八七八年、彼の畢生の大著昆蟲記の第一巻が出た事である。

それは實に過去二十五年に亙る研究觀察、實驗、考察の成果で、諸君も既に御承知の通りその内容に於ても叙述の形式に於ても、從來嘗て見ない劃期的な著述であつた。だが此の不朽の名著の第一巻も、當時にあつては、殆ど顧みられなかつた事は云ふまでもない、そればかりか、その年はフアーブルにとつては受難の年ともいふべく、彼は愛兒のジュウルを奪はれた上に、彼自身も重い肺炎の爲にもう少して命を失はふとした。兎に角オランジュの生活も初め暫くを除

いては、決して恵れた生活ではなかつたのである。そして彼は少しばかりの金が出来た時(一八七九年)永久に都會を見棄て、セリニヤンの一角、アルマに少しばかりの土地と小さな家とを購ひ、そこに移り住む事となつた。そして以後三十年といふもの彼はこの片田舎にこもり、アルマの山野を背景としてひたすら蟲を友として、一生を過したのである。是からの生活は、貧困に悩まされたといふ事のほかは、至極平穩で、彼は其全精神を捧げて、昆蟲研究に文字通り浮身をやつしたのである。そしてセリニヤンの一角に移つてから、二年乃至三年毎に一冊づつ昆蟲記を出してゐる。而もその内容の豊富な事、獨創的な研究の結晶である事は私がこゝに管々しく説くまでもないが、彼の研究が、昆蟲生態學上や昆蟲心理學上に與へた貢獻は實に大きなものであつた。彼の「つちはんめう」と「はな蜂」との、迂餘曲折まるで謎のやうな關係や、糞玉を轉がすスラベ・サクレの奇妙奇天烈な習性などは、餘りにも有名であるが、その他左官蜂の不思議な方位感、孔雀蛾の不可解な救婚、葉摘蜂オスマアの魔法使のやうな産卵、その他子守蜘蛛、蟹蜘蛛の母性愛、蝎が示す結婚後の凄い光景、すべてが驚異と神秘と不可思議と

の寶庫である。實際如何に多くの蟲けらが、彼の鋭い觀察眼の力によつて、みすぼらしい體の一隅に潜んでゐる叡智を、明るみへ出して貰つた事か、然し又その巧な實驗の良に係つて、如何にボロを出させられた事か到底枚擧に暇がない。フアーブルはその長い一生を、蟲の觀察研究に専ら捧げたけれど、元來彼は廣い知識の持主だったので、植物學に於ても深い造詣をもつてゐたし、又若し醫學の方面に向はせたとしても、明識と洞察力とに秀でてゐた彼は、此の方面でも亦燦然たる光輝を放つた事であらう、とルグロ博士は言つてゐる。のみならず彼は藝術に對しても亦強い興味と深い理解とを持つてゐたので、音樂を喜び、詩を作り、演劇を愛し、戯曲を論じさへもしたといふ。特に彼は詩作が得意であつたらしく、それは彼にとつての、一つの大きいなる慰めでもあつたのである。私は未だ讀んではゐないけれど、フアーブルの作つた詩は彼の弟の手で集められて、ウーブレート詩集(Oubretot)として出てゐるさうである。だか假令詩としてもされたものでなくとも、フアーブルの著書の中に書かれてある、一節々々、その表現の一句々々の何れを取つて見ても、詩でないものがあるだらうか、あの十卷の昆蟲記、

それは全卷蟲の生活を歌つた美しい詩であると私は思ふ。ルグロ博士は「偉大なる觀察家は詩人の如く想像し、また創造する」といひ、又フアーブルを以てミストラル以上の詩人なりと激賞して居るが、實際吾がフアーブルこそ、科學者であると共に又立派な詩人でもあつた。何しろ彼の書いたものを讀んでゆくと、まるで優れた畫家の手になつた繪卷を繰るが如く、又秀でた樂手の音樂を聞いてゐる時の如く、恍惚として魂を奪はれるではないか、然しさうした人を魅する文章や解説も、假令先天的文才はあつたとしても、決して造作なく生れたものではない。彼は文を書かうとする時は、多くの詩人や文學者にあるやうに先づ動く必要があつた。そして實驗室に据ゑてある大きな卓子の周圍を、パイプを啣へ乍らぐるぐる廻りしてゐる間に、思ふ事が統一され、表現の文章が頭の中で何度も工夫され且つ整理される。そして、其時初めて彼は自分の思ひ附や、解説の妙味に陶然となり、表現の慾望が勃然として湧き上ると、粗末な胡桃のテーブルに倚つて、ペンを執る、然しそれが愈々發表されるまでには、更に考察が加へられ、訂正が行はれ、文體の工夫が施され、斯うして初めてあの美しい光輝ある著述が出来上つ

たのである。そんな譯で彼は原稿を一度活版屋へ手渡すと、二度とそれを讀み返へす事を好まなかつたといふ。そして校正に當つても、殆んど手を入れる事をしなかつたさうである。

彼が昆蟲を觀察し彼等と親しんでゐる時は、何者も彼等の會話を妨げる事が出来なかつた程熱心なものであつたが、又さうした場合彼は人の厭がる汚物や臭氣などに對しても實に平然たるものだつた。だから彼が實驗室で青蠅ぎんばへの發生を研究してゐた時などは、腐つた牛肉や青大將の屍體から發する、息の詰るやうな腐臭に圍まれ乍らも平然たるのみか、その顔は喜悅と愉快との表情で欣然輝いてゐたといふ。彼はセリニヤンに移つてからは全精神を捧げて蟲の研究に熱中した。そして初めの二三年こそ教科書や通俗科學書の収入が幾分彼の生活に恵みを齎したけれど、やがて又恐ろしい逼迫の時代が彼を苦しめにかゝつた。その第一の原因は彼の書いた教科書の賣行が悪くなつた事である。それは其後多くの類似の書が現はれて需要を奪はれもしたが、一方には反宗教運動熱の旺んだつた當時にあつて、唯神論的内容をもつたフアーブルの教科書は視學官の忌諱きゐに觸れて採用不許可の厄に遇つたためである。それに又昆蟲記にしても初め

の數卷には讀者の眼を惹くやうな一枚の挿畫もないのみか、表題それから何の魅力もないために、やはり賣行は香ばしくなかつた。實察現在日本で評判になつてゐる昆蟲記の譯本にしても若し一つの挿畫一枚の寫眞版も附いて居ないとしたら、昆蟲専門家や特殊の人は別として、一般専門外の人々は恐らく開いて見ようとしなからう。現在挿畫や寫眞が入つてゐるのは後になつて彼の息子のポウルの手依つて加へられたものである。そんな譯で、貧困は迫る上に反進化論者でもあつたフアーブルは、當時の學者は勿論、一般からも顧みられる事なく、時代遅れとして孤獨の中に老いつゝあつた。それにしても學界に於ける彼の名聲は、可なり前から國境を越えてゐたので、一八八七年以來佛國學士院の通信員に選ばれ、又歐洲の主な昆蟲學會や學士院の一員となつてゐたし、モンテヨン賞金（一八五六年）や、プティ・ドルモア賞金（一八八七年）などの受賞者でもあつた。だが、さうした名譽や學術上の發見業績も、生物學者若くは哲學者の一部といふ如き、ほんの狭いサークルの人の注意を惹いただけに止まり、詰りは小數の選ばれた人達の興を惹くだけだつたのである。そして遂に彼は又しても孤獨と貧困と

のドン底へと陥つて行つた。が時既に彼は八十七歳にも達してゐたのである。而も此の年齢と貧乏との中に在り乍ら、彼は少しも撓む事なく、若い時と同じ熱情を以て、キャベツの青蟲と螢の發光との研究に没頭してゐた。斯うした際に此の不世出の詩人科學者を、貧苦の底から救ひ上げるべく力を盡した人が現れた。然しそれは決して昆蟲者仲間でも動物學者でもなく、實に詩人ミストラルであつたのである。彼は久しい以前から、フアーブルの研究と著作とに對して、心からの興味を抱いてゐたが、その不遇から救ふべく、或る金持を説いて一萬フランの金をフアーブルに提供させると共に、又知事のベルデイを勧め、時の文部大臣を説いて、科學の奨励といふ意味から一千フランの救助金を出させ、又縣會を動かして、年五百フランの補助金を與へる事に成功した。此の時一方では、フアーブルの門人であり、又最も理解と同情とを持つたブルグ博士に依つて所謂「フアーブルの日」の催しが企てられ、一九一〇年四月三日、アルマに於て行はれ、老いてもう獨りでは自由に歩く事さへ出来なくなつてゐたフアーブルは、村の親しい人々や、彼を尊敬し讚美する人達の温かい情に包まれて、賑かな一日を過した。そして當

日彼に對しては、その肖像を彫つた金のメダルが贈られた他、學士院はエドモンド・ペリエをして鄭重な讚辭を呈せしめ、またストックホルムの科學院からは、科學者に對する最高の表彰たる、リンネのメダルが贈呈された。それからロマンローランやエドモンド・ロスタンの如き、優れた文學者や詩人から、心からなる敬意と讚嘆とに充ちた祝辭が贈られた。然し諸君よ、斯うした喜ぶべき晴れの日でさへも、昆蟲學者とか科學者としての大家らしい人は、殆ど祝典の席には出て來なかつたといふ事である。だが此の企ては不遇なフアーブルをして光輝と名譽との地位にまで引き揚げるに充分であつた。そして其日以後佛國の津々浦々から、この老いた慎しやかな研究家に對して、豊かな贈物や鄭重な讚辭が捧げられ、又科學者、文學者、政治家等、凡ゆる階級の人々も續々として訪れるやうになり、一九一三年八月五日には、時の大臣の一人ジョセフ・テイエリーも訪れて、彼を慰めたが、更らに十月十四日には、大統領ポアンカレも亦親しく彼を訪ねて、佛國民の名を以てその偉大な業績に深く感謝した。それに對してフアーブルは、無言のまま、老いの眼に感涙を浮べて、僅かに握手をして應へただけであつ

たといふ、それ程彼にはもう老衰が迫つてゐたのである。

フアイブルの住居とアトリエ

フアイブルが教育界を退いてから殆んど六十年に亙つて、勞苦と忍耐とを盡して蟲の研究と観察とに没頭した家はセリニヤンの村の入口の、杉や松や糸杉に囲まれた、ピンクの壁にグリーンの鎧戸のついた、質素な建物だつた。そして猶家の周囲には、彼の趣味と研究上との必要から夥しい種類の草木が蒐め植ゑられ、いろいろな蟲の來訪に任せ、啄むに任せられてあつた。そして中には、數個の椅子、大きな食卓、二棹三棹の古びた箆筒と一つの粗末な本箱とがあるばかり、これが彼の所有する主なる家具の全部だつた。只一つ、ストーヴの上の壁に懸かつてゐる黒大理石の懸時計——それは彼が曾てアヴィニオンを退いた時、サン・マルシヤルの僧院でした自由講座の教子達から、記念として贈られたものである——のみが、僅かに色彩を放つてゐるだけであつた。此の母屋に續いて、彼のアトリエともいふべき實驗室が建てられてゐ

た。それは靜かな大部屋で、周圍には硝子戸の嵌つた標本戸棚が並べてあり、中には南フランス産の昆蟲やゴルシカ時代に集めた巻貝類の標本がずらりと並び、又戸棚の上には植物の腊葉標本がぎつしりと立てゝあつた。室の中央は胡桃の大テーブルで占められ、その上には、フラスコ、硝子管、蟲の飼育器代用の井、ジヤムやサーデインの空罐などが所狭いまでに置いてあつた。そして夫等の器ではし、むしが青大將の腐つた肉の中にピチピチと躍り、スカラベが羊の糞の御馳走に陶然として生の歡喜を味つてゐた。

フアイブルの一日

フアイブルは朝早く床を出て朝飯のパンを嚙ると、未だ朝露の滴たる家の周圍の木蔭を冥想に耽り乍ら一と歩きしてから、前記の實驗室へと入る。そして正午までは、全くの靜寂と沈黙の裡に、傍目もふらずに蟲の觀察をやり、實驗の手管にかけたり、又はそれらの結果の記録に没頭する。この場合彼にとつて何より大事なのは靜寂であり、彼の心を亂すものは、時計の振

子の音さへ止められたばかりか、實驗室の周圍の糸杉に来て歌を唄つてゐる可愛い小鳥さへも、彼は憤慨の餘り、泥棒よけに備へてある鐵砲で、打ち殺して了つたさうである。

斯うして半日の間一心不亂に研究に熱中したフアーブルは、正午になるとヘトヘトになつて、實驗室から出て來て簡単な晝食を濟すと、食堂の隅に置いてある小さな長椅子に倚り、少時の午睡又は休息を採るのであつた。そして午前中の激しい疲勞からすつかり回復すると、夕方までは軽い研究に従つたり、又新しい研究の題目を考へたり、或ひは子供達に自然科學の講義をしたりして暮すのだつた。

傳へられる所によると、フアーブルは家に居る時でも、あの黒のフェルト帽を被り通し、いつも黙々として冥想と思索とに耽り、決して無駄口をきく事をしなかつたといふ。だからその家庭の空氣は可なり重苦しいものだつたと想はれる。然しそれでゐて友人などに對しては、よく語り且笑ひ、又心からの歡待を盡す事を怠らなかつたさうである。夜になると彼は庭に面した小部屋に入り、低い寢臺に横はつて、好きな讀書に夜を更かす事も少なくなかつた。

嗜好

フアーブルは食事としては主として野菜や果物を採り、肉類は一切用ひなかつたさうである。又セリニヤンで出来る地葡萄酒を、生のまゝで飲むのが好きだつたが、その最大の好物は煙草で、二六時中殆どパイプを口から離した事はなかつたといふ。

研究の價值

フアーブルは其長い生涯を、文字通り蟲の研究に捧げ、多くの蟲に就いて其興味ある生活の神秘を探り、秘密を發あはき、又學界未知の新知識を提供し、學界に盡した功は實に大きなものであつた。だが單に蟲の生活の秘密を發き、學界に新しい發見を提供したといふ事以外、彼の研究の尊さは、その研究から幾多の生物學的哲學——觀察と實驗とによつて得た昆蟲心理學——を拾ひ出して、之をダーウインの大哲學に供給したのに在る。然しフアーブルがダーウインに

對して供給した哲學は、どれも是も反進化論的のものゝみであつた。その爲進化論全盛の當時にあつては、彼は反逆者であると共に又時代遅れとして世間から憎まれ且輕蔑され、ひどい迫害を受けた事は既に説いた通りである。然し果して彼は學説を輕んじ實際にうとい反逆兒、時代遅れであつたらうか、彼の語つてゐる動物心理若くは本能の反進化論的論説の當否はさて置き、彼の説く所は、少くとも一面の眞理を穿つてゐると共に、又確に獨創的な一面をも持つてゐると云つてよい。

フアーブルとダーウイン

だが、此の無遠慮な進化論の反對者に對してダーウインは少しも惡感情を持たなかつたのみかフアーブルが自然科學雜誌に載せた、つちすがりやはんめうの研究、昆蟲記第一卷に發表した左管蜂カリコドマの驚くべき方位感に關する研究にすつかり感心して了ひ「全歐洲中で、あなたの研究を私程心から讚嘆する者は他にありませんまい」といひ、又「類ない觀察家」とまで激

賞してゐる。だが實際ダーウインが讀んだのは、昆蟲記の第一卷だけで、それ以下は讀まずに彼は死んで了つたのである。それ故若しダーウインにして、フアーブルの昆蟲記を悉く讀んだとしたら、彼の進化論、少く共今日見る本能も亦時の流れに従つて、徐々に蓄積獲得されたものである、といふ考へ方の幾分は、訂正されたかも知れない、とさへ云はれてゐる。

フアーブルと讀書

それにしても元來事實の探究を重んじて讀書をしなかつたフアーブルは、ダーウインの大著種の起原さへもちよいと覗いただけだつたといふ。實際フアーブルは殆ど専門の讀書をしなかつた。それは自然を師とするといふ事を尊んだためでもあるが、又一面には彼の餘りにも貧弱な財布には到底高價な參考書を買ふ餘裕がなかつたからでもある。そして彼は人間の書いた本から得る知識などは、自然の示す事實に比べると寔に詰らぬものに過ぎぬと考へてゐた。そんな譯で時々彼は思はぬ誤りを犯したり誤謬をやつて、一部の學者から非難を受ける事もあつ

た、然し如何な場合でも彼は絶対に紙上の議論を避け、自己の説の反駁に應じた事はなく、黙々として事實の探究に没頭して他を顧みる事をしなかつた。又極めて立派な研究として賞められても、「自分が少しばかりの砂粒を掻き廻はして見たからつて、あの廣い大海の深さが判るもんかね」と云つて、少しも誇る色なく、眞の科學者としての謙遜さを失はなかつた。それは又何と味ふべき一言ではないか。

一九一二年、北歐の天地の一角に起つた爆彈騒ぎから、續いて火を發したあの大戰の頃からフアーブルは次第に體力を失ひ、老衰が日に日に加はつて來た。一九一三年の秋、大統領のポアンカレーが親しく訪れた時には、もう彼は獨りで自由に歩く事すら出来なかつた事は、既に述べた通りである。超えて一九一四年の十月の十一日、老衰に加へて尿毒症を發し、遂に滿九十二歳を以て、眠るが如くにあの世へと旅立つて行つた。

想へば九十餘年に亙る彼の生涯こそ、實に尊くも勞苦と忍耐との高貴な生活であつた。而も困苦と缺乏とに耐え、雄々しくも闘ひつゝ幾多の尊い研究を残して逝つた彼は、科學者として

の第一人者であるばかりでなく、哲學者としても亦第一に推さなくてはなるまい、殊に彼の觀察の綿密さとその表現の詩的な事は、正に彼の研究をして、啻に科學的業績としてのみでなく藝術的作品としても亦永遠に光輝ある創作として尊ぶべきものである。

蟲界カメラ行脚

想ひ起せば、蟲の世界の生きた芝居を撮らうといふので、レフレックスカメラを買ひ込んだまでは宜いが、まづ稽古臺の彼女に失望、考へ抜いた揚句の果て、是なるかなと手を拍つて動物園へ走り、鐵柵の裡に不遇をかこつ籠の動物共をパチリパチリとレンズに納めたものを「動物園カメラ行脚」と銘打つて大朝紙上で大方諸君に紹介してから、もう一年有餘の月日が流れ去つた。實に日月の流れこそ速き哉である。それにしても内地から遙々朝鮮へかけての動物園巡りの目的こそは、昆蟲の生態撮影に先立つての準備行爲であり、腕を練る爲の旅であつた事は、當時既に宣言した通りである。

蟲界カメラ行脚 (一)



へ旅の脚行てい抱をフレ

さて一ヶ月餘りに亙る動物園行脚を終へて、久々に東京へ歸れば春將に酣、幾百千の蟲界の立役者は、冬眠の枕を蹴つて續々として春のステージに立ち、自然劇の幕は今や切つて落されようとしてゐる。

私は行脚の疲れを醫する暇もなく、再びカメラを抱いて、いよいよ蟲の世界へと再度の行脚に旅立つたのである。

まづその旅立の装束はと言へば、ポケットだらけの麻の上衣に縞の古すぼん、肩には蟲箱、胴には狩獵家の彈丸入れとも紛ふ皮の胴締め、手には一本の洋傘と一本の杖、腰には双金のスコップ一挺、ポケットにはピカピカと輝くピンセット、さてその上に六百匁に近い愛機レフを提げ、曰く付の大朝靴を踏み占める足どりも軽やか(?)に、正に昭和の雀ならぬ、蟲の御宿を探すリップ・ヴァン・ウインクル宜しくといった風態である。ところが斯うした嚴めしい装束と辨慶の七ツ道具にも比べる事の出来る謎の品とは、一體何の役に立つのであらうか、それは今此處で一々説明するまでもなく、行脚の進むに連れて次第に讀者諸君の前に説き啓かれるであ

らう。

蝶の浮氣

私は今春の野中のなかに立つてゐる。紺青こんじやうの空からは麗かな陽光が射し、たつた一羽の雲雀うんせうの朗かな聲の漣は、廣い野面のづら一面に洪水のやうに擴がり漂つてゐる。足許に擴がる紫雲英むらさきぐもの花壇やたんぽぽの小路には、レモン・エローの地にオレンヂの圓紋を附け、黒の縁取りをした紋黄蝶が花から花へキツスを投げかけて、さながら浮れ男、浮れ女のやうに飛び廻つてゐる。と思ふと其隣では、花蜂蜜蜂など働きの者の面々が、胡蝶の浮氣をよそに、體中花粉まみれとなり乍らセツセと子孫のために稼いでゐる。虻の鈍い羽音が睡氣を誘ふやうに耳を打つ。正に春色駘蕩私はただ恍惚として佇む。その時私の眼をかすめて突如として飛び上つた三つの白い影があつた。ツト眼をあげてその影を追へば、是なん白蝶の戀のもつれ、二匹の男蝶の求婚、「もつれもつれて蝶々が三つ、どれが邪魔する蝶々やら」といふ俚謡の實演ではないか、斯うして三匹の

胡蝶は互にもつれ合ひ乍ら、或ひは寄り或ひは離れて次第に春の空高く舞ひ上り、

大空にたはるゝ蝶の一つがひ

眼にも止らずなりにけるかな

茂樹

といふやうに、遂には一つの黒點となつて霞の裡にとけ込んで了ふ事もある。

斯うした胡蝶の戀の鬼ごっこ、今時流行の言葉を借りて言へば戀の三角關係の結果は果してどう結末がつくであらうか、私は先づ此の謎から解いてかゝるであらう。

白蝶の戀

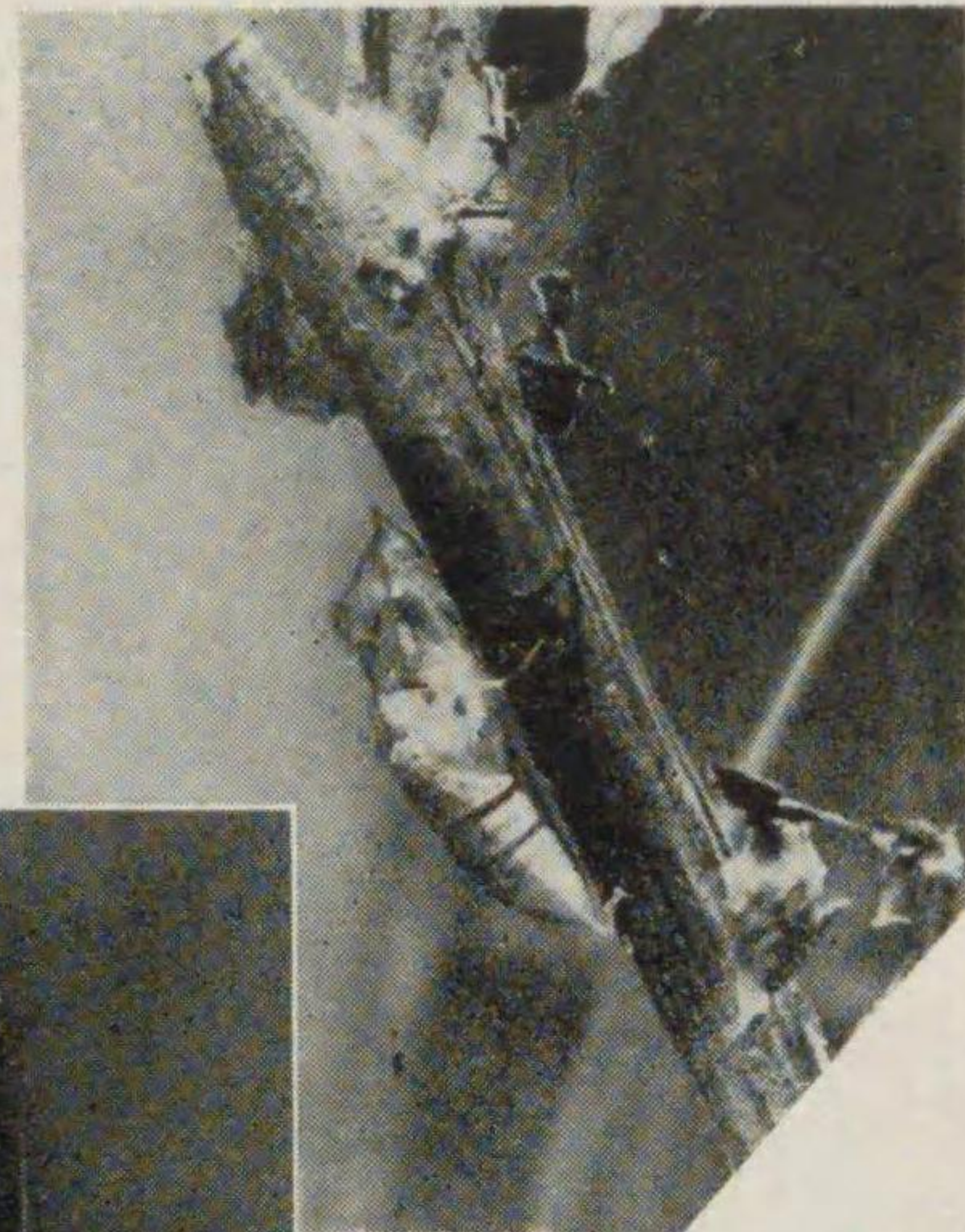
さて戀に狂ひ乍ら大空高く舞ひ上つた白蝶は、果してどうなるであらうか、斯うしたシーンにぶつかる度に、おせつかいにも私は彼等の後をつけて見る。

菜種畑を涉り、大根畑を駈け抜け、空ばかり氣にしながら追つてゆく姿は、傍から見たらどんな態だらう、それでも間に合ひ兼ねると、ポケットから隻眼モノクラールフェルンロール望遠鏡を取り出して、執念

深く彼等の行動を追撃する。全く誰に聞かせたつて御苦勞様な次第さ、しかもその結果はいつも定つて御生憎様の失敬といふ譯で、ものになつた例がない、といふのは斯様な大空の鬼ごつこの場合は、雄の方は別として、雌は餘り氣がつてゐない時なので、ほんの一時の遊戯に過ぎないのである。だからやがて彼女は追ひすがる雄を見棄て、サツサと逃げて了ふ。さりとは無情な女蝶よ、と諸君は言はれるであらう、だが諸君よ早合點す可からず。彼等女蝶にも亦文字通り人知れぬ戀の濡場が別にあるのである。

白蝶の雄は殆ど絶えず雌を求めてゐる。彼は花とキツスしてゐる時でも、傍に女蝶が來ると、直ぐ一寸手を出して見る程浮氣である。だが女蝶になると蟲乍らやはりそこは女性の淑やかさとも言はふか、彼女の方から積極的に男蝶に手を出すやうな事は先づ殆どないと言つてもいい、だが女蝶と雖もやはり生物である。時が來れば春を知り異性を慕ふやうになる。さういふ時、彼女は草の葉の上とか樹上とか、その他よそ眼に付き易い場所を選んで泊り、翅を揚げお腹の先を斜に跳ね擧げてじつとしてゐる。是れが彼女が愛する若者を待つ時の態度であり

蟲界カメラ行脚 (二)
白蝶の生活



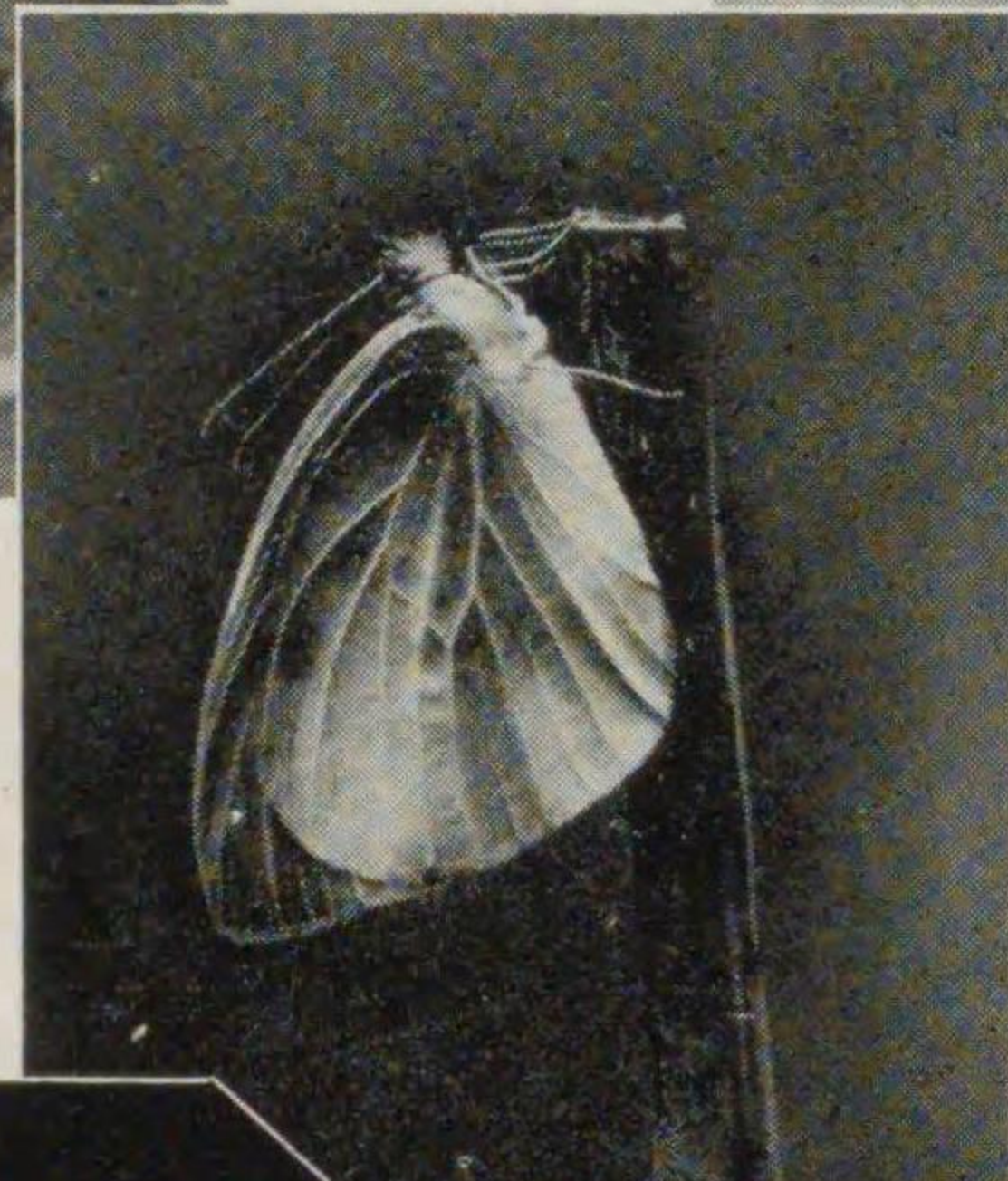
↑羽化昇天
を待つ蛹



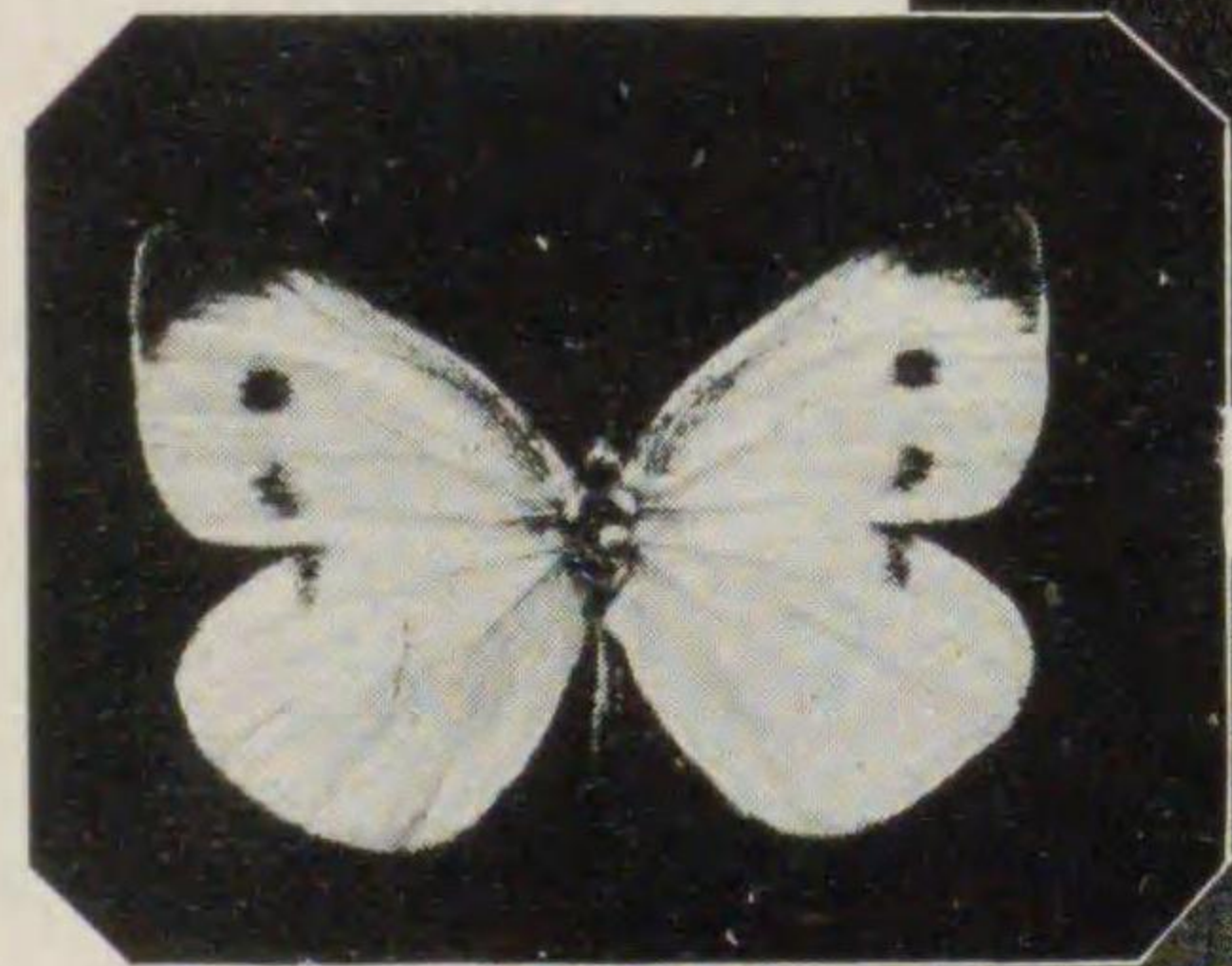
↑蛹から出
たばかり
のまごころ



蛹から脱け出して
ホット一息
ついたまごころ↓



シーシヅラ



↑春の使者紋白蝶



戀の陶酔

雄に向つてモーションをかける一種の嬌態なのである。一方雌は空高くからでも此の嬌態を見附けると、得たり賢しと舞ひ降りて来て、彼女の體の上を戀々として彷徨へば、雌は益々翅を伏せ尻を擧げて若者の要求に應ずる心を示す。瞬一瞬彼等の翅と翅とは相拍ち、刻一刻體と體とは相近づき遂に一體となる。

斯うして一旦二匹の體が結ばれると、二時間から三時間位も彼等はじつと戀の快樂に陶醉してゐる。然し時が来て相離れたが最後、彼等は全く元通り路傍の他人ならぬ他蟲となり、更に各々第二、第三の戀を求めて旅立つてゆく。然し雌にはやがて蟲乍ら女性としての大役お産の日が来る。すると彼女等は菜種、大根、かぶら、白菜といったやうな十字科植物を探して、その葉に卵を産んで廻るのである。彼女は注意深く葉の上を舞ひ乍ら、時々そつと翅を落とし白糸のやうに細い六本の脚を葉末にかけ、お腹を弓なりに曲げて葉の裏にピタリと附ける。一秒、彼女が静かにお尻の先を離れた後を調べると、其處には青白い、長さ一ミリばかりの徳利形の卵がポツツリと産み遺されてゐるのを見るであらう。此の卵からは一週間もすると、身

の丈僅か一ミリ程の塵芥のやうに細かな青蟲が生れて出る。そして彼は先づ第一に今迄着てゐた自分の卵の殻を、二時間ばかりもかゝつて、ポリポリと嚙つて食べて了ふ。之が白蝶の赤ん坊の最初の食物なのである。それにしても自分の卵の殻を食ふとは、如何にもさもしさの限りであるが、或る學者は、それは卵の存在の跡を消し、生存上の安全を計る手段であると意義をつけて得々としてゐる。然しそれこそ怪しい學說で私には賛成出来兼ねる。所で此の青蟲はその後青葉を食べてすんすん育つてゆき、二週間から二十日もすると、一寸ばかりの青蟲となり、ここに成長を了へて、第二段の姿をとる。その第二段の姿とは他でもない、蛹といふものになる事である。

青葉を腹一杯たべて、ぽつてりと肥つた青蟲は、今まで厄介になつてゐた青葉におさらばをして桓根や門の柱などに這ひ上り、口から糸を吐いて自分の體を釣り、古い皮の着物をすつぱり脱ぎ棄て、今迄とはまるで變つた姿、即ち蛹、俗にいふ「お菊蟲」となる。そして此のお菊蟲は夏なら一週間もすると、その背中が縦に割れて、中から初々しい白蝶が生れる。此の白蝶を

日本では「もんしろてふ」學者はピエリス・ラペ・エ・クルシボラなる嚴しい名で呼んでゐる。昔なら靈魂の化身と思はれたり、時に不吉を告げる靈界の使者として神秘がられた事もある白蝶も、斯う洗ひ浚ひお里が知れ、殊に庭先や田舎道の真中で、雌雄が臆面もなく悪戯け合つてゐるのを見せられては、神秘どころか一寸愛想が盡きる。

賤蟲どもの探索

白蝶の身元調べで大分時間を潰したから、今度は一番方面を替へて糞蟲を初め、汚物に寄つて來る賤蟲共の探索と出かけよう。

誰でも昆蟲採集といへば、網を振つて花の咲いてる野や畑を駆けずり廻つてさへみれば、それで事足れり矣と思つてゐるに違ひない。ところがどうしてどうして、庭先やお花畑の採集なんぞは小學校の生徒さんか、さう申しては失禮だが未だほんの初歩の採集家諸君のやる事で、少し専門に變つた蟲を集めようとするには、そんな生やさしい事をして居たのでは始まらない。

ほんたうに面白い蟲を探るには、あらゆる手段を講じ、あらゆる場所を探ぐり、晝と夜との區別なく、それこそ勞力を厭はず美醜の觀念を棄て、懸る必要がある。

先づ行く途に轉がつてゐる石や丸太は片つ端からひつくり返へして見る。人家の近くに塵芥棄場があればそれを掘ぢつて見る。朽ちた老樹が立つてゐれば其皮を剝いで檢べる。それから又少し要領の好い法としては、片手で洋傘を擴げて樹の下に受け、片手に杖を握つて樹の枝をピシヤピシヤと引ばたく法がある。すると葉や枝に泊つて平和な夢を食つてゐた蟲どもは、不意の襲撃に驚いて、パラパラと洋傘の中へ轉げ落ち、或る奴は脚をピツタリと體に附けて死んだ眞似をするかと思ふと、ある奴は風を喰つて逃げようとする。然しドツコイさうは烏賊の××何をしたつて駄目の皮。此方も素早く手を伸ばし、片つ端から毒を盛つた塚の中に拾ひ込んで了ふ。此の方法は勞が少ない割に頗る効が多い。さてこそ蟲行脚といへば、假令お天氣博士が太鼓判を押して呉れた快晴でも、私はきつと一本の洋傘と杖とを手から離さないのである。今言つた通り、私は野でも山でも歩いてゐる間、眼は何時でも周圍を見張つて、飛び立つ一

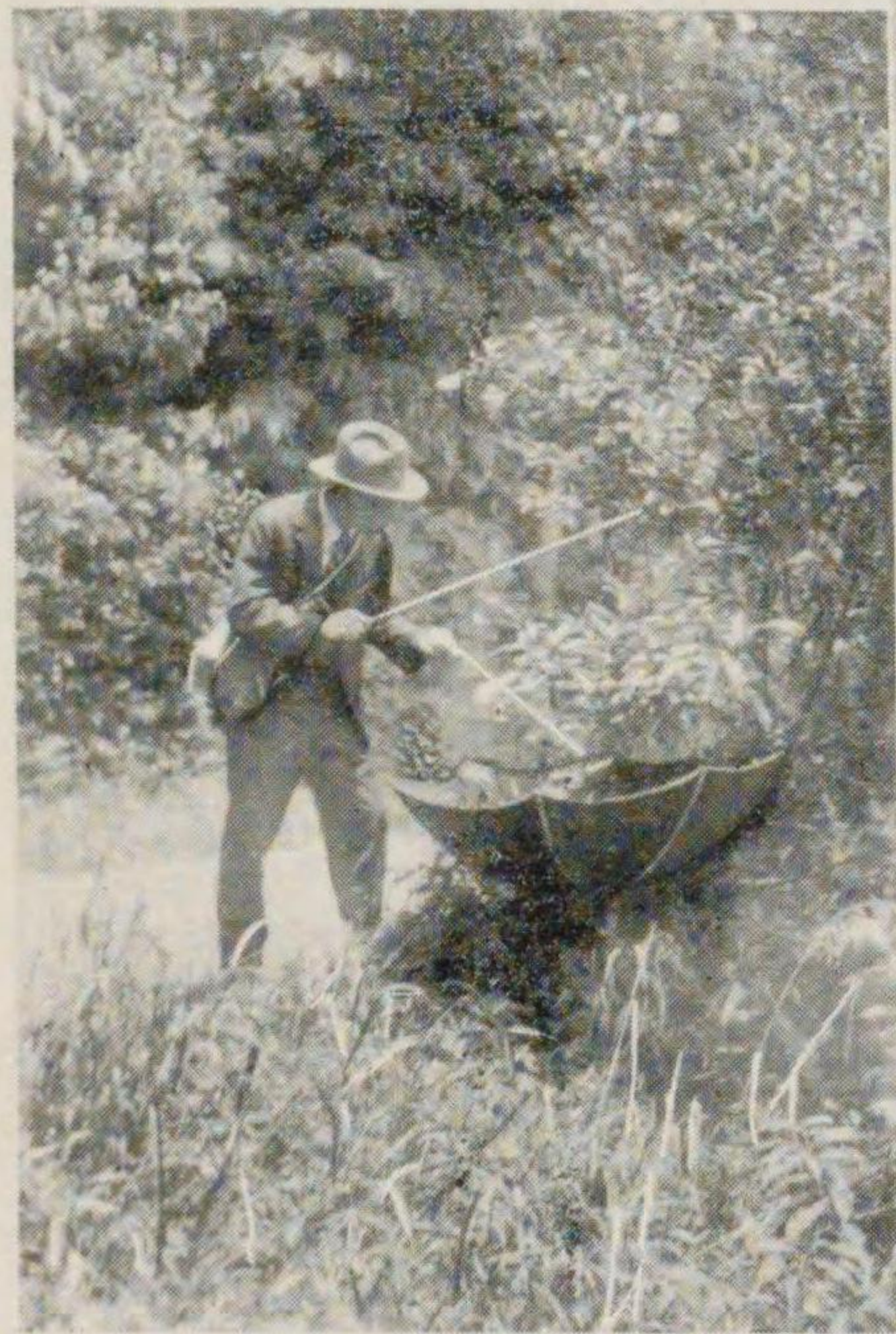
蟲界カメラ行脚 (三)
蟲採り



猫の屍体から
蟲を採る



馬糞を掻き廻して糞に蟲を拾ふ



洋傘を擴げ
樹を叩いて
蟲を集める↓

羽の蝶、駢けゆく一匹の甲蟲をも見遁さじと努める一方、馬や牛さては吾々人間仲間の落し物から、路傍の草の蔭に棄てられた猫や獸、蛇や小鳥等の死屍から出る腐臭を嗅ぎ遁さぬやう氣を配る、それこそ全く嘘のやうな事實と辯解は愚かな事、實際さうした汚物が私の胸にどんな喜びと希望とを與へるか。それはどんなに口を酸っぱくして説いた所で、當事者以外には到底も解りつこあるまい。兎に角私それから私と趣味を同じくする一派の人達は、さうした汚物を見附けると、それこそ人知れぬ喜びを覚え、心を躍らすのだ。そしてわれ先にと駢け寄り、うづ高く盛り上つてゐる汚物の山を覆へし、或ひは異臭紛々たる死屍を検べる。何故そんな眞似をするのか。それは他でもない、さうした汚ないものには又特別な蟲が寄つて來てゐるので、それが欲しいばかりに、人の厭がるものに心を躍らすのである。さりとは又念の入つた好事者よと嗤ふ勿れ、物事に凝るといふ事と馴れるといふ事とは寔に不思議なもので、私は近頃では死屍の臭ひなんぞ大して厭でなくなつたばかりか、そのむせるやうな臭ひに浸り乍ら蟲を拾つてゐると、何時となしに私の少年時代、殊に中學四、五年から高等學校時代の蟲採りの思ひ

出が、幻のやうに浮んでは消え消えては浮び、宛然古い日記を読み返してゐるかのやうな氣がして、云ひしれぬ懐しさを感じる。

私は斯うした過去の思ひ出を、採つた蟲を殺すのに使ふ青酸加里から發する毒ガスの一種息詰るやうな鈍い臭ひからも感じる、それは上野から道灌山田端、王子邊の昔の景色をクツキリと思ひ浮ばせる力を持つてゐる。斯うして人の嫌ふ臭ひでもそれを嗅ぐ人間次第では、卓越した藝術家に依つてもなされた、優れた物語や音楽と同じやうな魅力を持つ事が出來るのである。

話が半分横道へ外れたがドレ愈々賤蟲誘惑の一條を語るとしよう。私は平常鼠取にかゝつた鼠であらうと、飼つてゐた小鳥であらうと、その屍體を決して無駄に棄てはしない。

私はその屍體を庭の隅の草蔭に横たへ、それに古鍋か古金盃を覆せて置く、なぜそんな事をするかつて、鼠や小鳥の生々しい屍骸をむき出しに放つて置いて見給へ、それこそ半日と經たぬ間に、風來猫に持つて行かれちまふサ、それでは此方の仕事が出來ないといふものだ。さて斯うして置いて私は靜かに腐敗菌の繁殖を待つてゐる。だがそれまでに注意してゐると、先づい

ろいろな蟻がやつて來て屍體を齧る。曰く家蟻、大頭赤蟻、黒熊蟻等々、だが夏ならば一晝夜も經つと、もう死體から異様な臭ひが立ち始める。いよいよ腐敗菌が活躍し始めたのだ。斯うなるとさすがの蟻の先生達も尻に帆かけて退却を始める。そして入れ代りに黒蠅、肉蠅といふやうな腐肉好きの連中が駈け附けて、頻りと古鍋の周圍をブラブラして這入る隙もがなとキョロキョロしてゐる。然しどつこい誰かくそ、御前達に這ひ込まれて堪るもんかい、と私はグツト古鍋を地面へ押し附けて、彼奴等の侵入を拒絶する。何故つて若し一匹の雌蠅にでも入られて御覽じろ。大事な屍體を忽ち蛆だらけにされちまふ。だが日が暮れて彼奴等が眠りに入ると私はそつと夕暗の庭へ降り立ち、古鍋の周圍を少ばかりすかして、再び家へ入る。

斯うして置いて朝の至るを待つのだ。さて夏の夜は忽ち明ける。私は床を出るや手に硝子壺とピンセットを持つて、古鍋の許へ駈け附けてひつくり返へして見る。腐れ肉の臭ひがプーンと鼻を突く、然しそんなことよりも眼の前の芝居を見るべし。一つの腐つた屍骸を取り巻いては、ねかくし、いでむし、えんまむしと云つた所謂惡食蟲の猛者連が、不意を喰ひ右往左往周章

狼狽してゐる態が目映るであらう。ところで私は素早く其等の蟲をピンセットで硝子壘の中へ拾ひ込む。斯うして是等の蟲は晝の間は石の下、草の根元に隠れてゐるけれど、夜になるとのこのこ出て來て腐れ肉の珍味に舌鼓を打つのである。

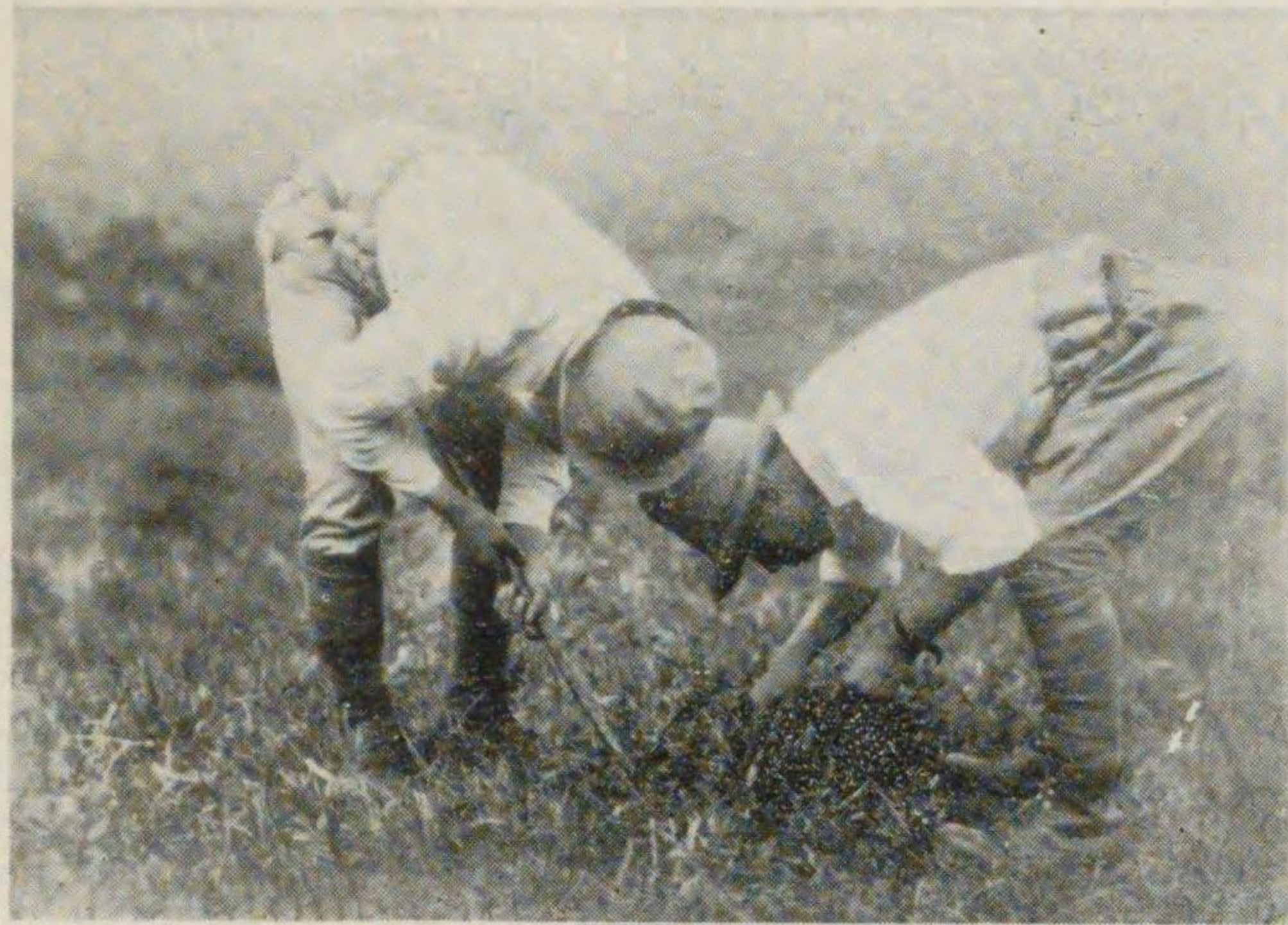
大黒こがね

次に賤蟲中でも人氣の焦點たる大黒こがね發掘を御紹介に及び、賤蟲の話を打ち切りたい。大黒こがね、それは一體どんな蟲かといふと、身の丈五分ばかり、全體黒光りの恰度大黒様かお多福豆みたいな姿の持主、而も一番興味を惹く點は、寫眞にもあるやうに、雄は頭の頂邊から象の牙を倒さに立てたやうな角が一本、ニュツと突き出してゐる事だ。此の一本の角は大黒様とその女性に對する誘惑と威嚴との兩役に使ふ道具なので、彼にとつては命から一番目の寶、そして吾々にとつても亦誘惑の主點となる。

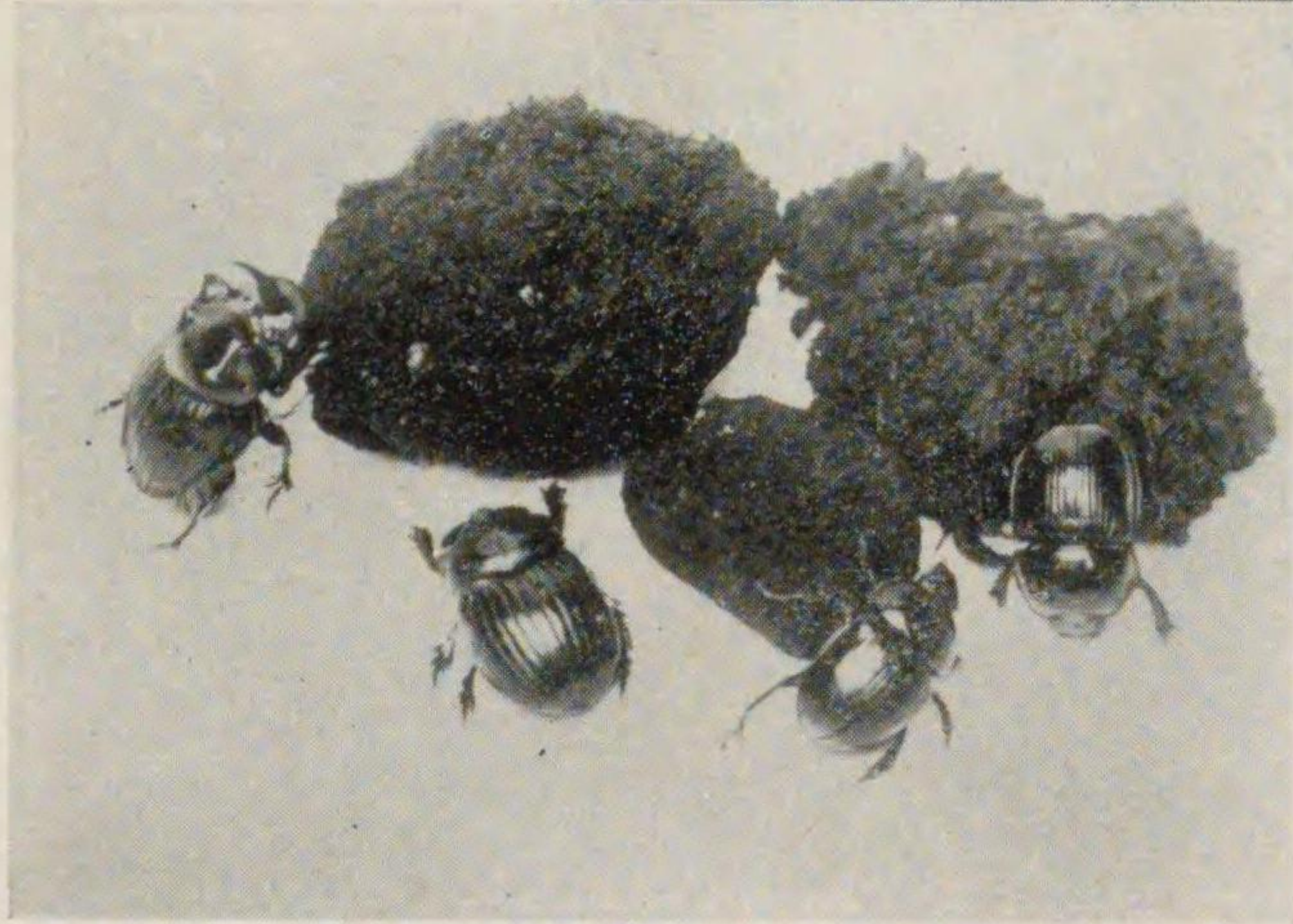
さて此の大黒様は何處に御在でになるかといへば、御當人にとつては聊か氣の毒ではあるが、

蟲界カメラ行脚(四)
賤蟲の生活

← 糞蟲の發掘



→ せきせいじんこの屍体に
集るしてむし



← 糞の中の寶玉せんち、こがね(右二匹)と、だいきこ、こがね(左二匹)

馬や牛の落し物の下に設けられた深い地下室と決つてゐる。そこで此の大黒様を手に入れるには先づ其地下室を發かなければならない。それも急いでは事を仕損じる。山の中で牛か馬かの糞の小山を崩して見る、するとその下に、直徑四、五分の丸い穴があいてゐるのが眼に付くであらう。是なん、私達が探す大黒様の御家の玄關なのだ。此の玄關が見附かつたらもう占めたものだ。腰のスコップを逆手にもつて、穴の周圍を掘つて掘りまくり一尺程も掘り下げると、墜道は少し開けて圓天井の室となる。そして其處にチヨコナンと坐つて御座る大黒様を見るであらう。斯う云へば話は頗る簡單だが、實際はどうしてどうして、掘つてゆく中に墜道が判らなくなつたり、折角室を掘り當てれば、大事な大黒様の頸筋へスコップの先を突つ立てちまつたりして可惜無駄骨を折る事も少なくない。

糞の中に棲む蟲にもいろいろあるが、寫眞に示したのは、今云つた大黒こがねとそれに體から五彩の輝きを發するので「生ける寶玉」の名ある大せんちこがねとである。彼等は皆生れてから死ぬまで、糞を食つて生活してゐる變り者であるが、その體の光澤に至つては正に泥中の蓮

を凌ぐ事遙かなるものがある。

水 蟲

陸には甲蟲走り、空には胡蝶狂ひ蜻蛉疾驅し、蟬の奏でる戀の獨唱の喧ましい時、一步眼を轉じて水の中を覗くならば其處に又特殊な蟲の活躍を見るであらう。ではその特殊な蟲とは何か、曰くそれは所謂水蟲連中である。

然し如何に私でも陸に突つ立つて只水面を眺めてゐては、無論何一つ見る事は出来ない。

そこで彼等の演る生きた芝居を見物するためには、先づその役者を家へつれて來る必要があるのだが、それには先づ巖丈な玉網と硝子壘とを携へて、池とか水溜りとか、沼のやうな場所へと出掛る。そして先の玉網を振つて岸へ引き揚げて檢べるのだ。するとそれこそ種々雑多な水蟲共が、不器用な足取りでヨタヨタと逃げ廻つてゐるのを見るだらう。然しいくら周章ても所詮は陸へ上つた河童の子さ、私は赤手を伸ばして、樂々と彼等を片つ端から用意の硝子壘

へ拾ひ込む。斯うして一池念入りに漁ると、時期と場所とさへよければ、實に澤山の水蟲が採れる。

曰く剽輕なげんごろう、がむし、グルグル廻りの名人みづすまし、子煩惱のこおひむしから辻強盜のやうな田龜、水蟻螂等々を始め、蜻蛉や蜉蝣の仔蟲まで手に入る。さて是等の水中の役者達を家へ持つて歸つたらば、手頃な硝子の金魚鉢の底に砂を敷き水草を入れて、一寸自然の水底になぞらへた自製水族館へと放してやる。すると彼等は此の小天地に満足して、藻の間を駈け抜けたり、休んだり、又時には喧嘩までして見せて呉れる。その中でも特に面白いのはげんごろう君である。彼がその龜の子形の體を、ボートの櫂形に變化した一對の後足を動かしつつ悠々と浮きつ沈みつする態は、丁度瑠璃の游泳を見るやうで、可愛い中に一種の雄大さを含んでゐる。それに彼はきまつて時々水面に浮び上り、尻の先をちよいと水から出して又すぐ潜つてゆく、その時三つ四つの水泡をブクブクと残して行く、げんごろうのお尻!! いやさう早合點は禁物、彼如何に蟲けらとは云へ、決してそんな失禮な眞似をするものではない。彼が泡

を出すのは、水の中に居る間の呼吸に使ふ爲、背中と翅との間に貯めてある空氣がもれるので斯くはお屁と見誤られる次第である。さういふ彼は背中の兩側に呼吸をする孔をもつてゐる。斯様に此の蟲は萬事が愛嬌たつぷりだが、その實却々の強か者で、少しお腹が數寄屋橋と來ると、他の弱い蟲は勿論の事、自分達仲間同志喧嘩をおつ始めて友食ひをやる。さうした點では一寸げんごろうに似て凄さうに見えるが、むしの方は其實至つて柔和しく、いつも藻にしがみ付きその莖を嚙つて生活してゐる。此の他水すましがグルグル水面を廻轉して面白さうに遊んでゐる一方では、水蟻螂、田龜と言つた連中が水草の間にじつと身を潜め、まるで辻強盜が旅人を待ち構へ宜しくと云つた態度で、不用意に通り返せる蟲を待つてゐる。而も其體の色合といひ形といひ、一つは水底に沈んだ棒切れに、一つは枯葉にそつくりと來てゐるので、他の蟲は恐る可き殺人鬼とは露知らずうつかりその前を通り過ぎようとする、その時だ。「アイヤ待つた」とばかり、彼等は利鎌のやうな前足を伸ばして、相手の體を抱きしめるが早いか、針のやうな吻を犠牲者の頭と胸との間に挿し込んで、チュウチュウと生血を吸ひ取る。殊に田龜と來ては水

蟲界カメラ行脚(五)
水蟲の生活



→ 水蟲採り



泳ぐげんごろう(左)と藻に倚るがむし(右)↓



↑ 鎌形の前脚を擴げて獲物を待つ田龜

中切つての暴漢で、水蟲界では可なり巾を利かせてゐるげん、ごう、君でさへ、彼のためには苦もなくやられて了ふばかりか、中形の蛙や鯉、鮒の類も頻々彼の食欲の犠牲となる。そんな譯で彼は大の悪太郎として養魚家からひどく憎まれてゐる。

涼風颯々、表に漣を浮べ、綠樹翠巒の影を宿し、あめんぼがスル／＼と滑べるほか、亂すものとはない平和そのものゝやうな池沼も、その水底を覗いてみれば、其處は實力のみが物を言ふ生存競争の實演場である。

蜻蛉の生活

水中に棲む蟲の生活振りを覗き序に、もう一つ蜻蛉の生活を御紹介致さう。蜻蛉は英語では Dragon-Fly 即ち龍蠅といふ。誠に素晴らしい名を頂戴してゐる。それといふのも彼のヤンマの類が青空を疾駆する様子、殊に餌物を追ふ時の鮮かな飛翔振りが因をなしてゐるのだらう、ところが一口に蜻蛉と云つても世界中では三千、日本だけでも二百程も種類があるといふ始

末、とても一々書く譯には行かないが、此處に一つ總ての蜻蛉を通じての事で、而も是非知つて置く必要のある事がある。それは蜻蛉といふ蟲は親蟲の時代にこそ空中を翔破しやうぱして、蟲界の空の覇者とまで稱へられてゐるけれど、その前身たる仔蟲時代は水蟲として水中生活をやつてゐた事である。「蜻蛉が水の中から生れる？　へーそれは確かに事實かネ？」と疑ふ諸君は疑ふべし、それよりも私は先づ蜻蛉のお母さんがその卵を水中へ産む事から説いてかゝらねばならない。それには先づ俳聖一茶の詠んだ次の一句を御披露に及ぶ。「とんぼうが尻でなぶるよ大井川」無論實際は何も大井川と限つた譯ではない。夏になると池や沼、時には夕立の水溜りなどで、蜻蛉が水面と擦れ擦れに飛び乍ら、時々尻の先でチヨクチヨク水を舐めるやうな事をやつてゐるのを見るであらう。「蜻蛉が尻で水を飲んでゐる」多くのいゝ年をした人が斯う思ひ込んでゐる。いやさういふ私自身でも、少年時代にはつきり尻で水を飲むものと信じてゐたものである。だから捕まへた蜻蛉が弱つたりすると、「これはいかん、水でもやつたら元氣になるべエ」といふ譯で、尻を水に浸けて、蜻蛉が不快から體を震はすのを見ると、「奴喜んでゐる

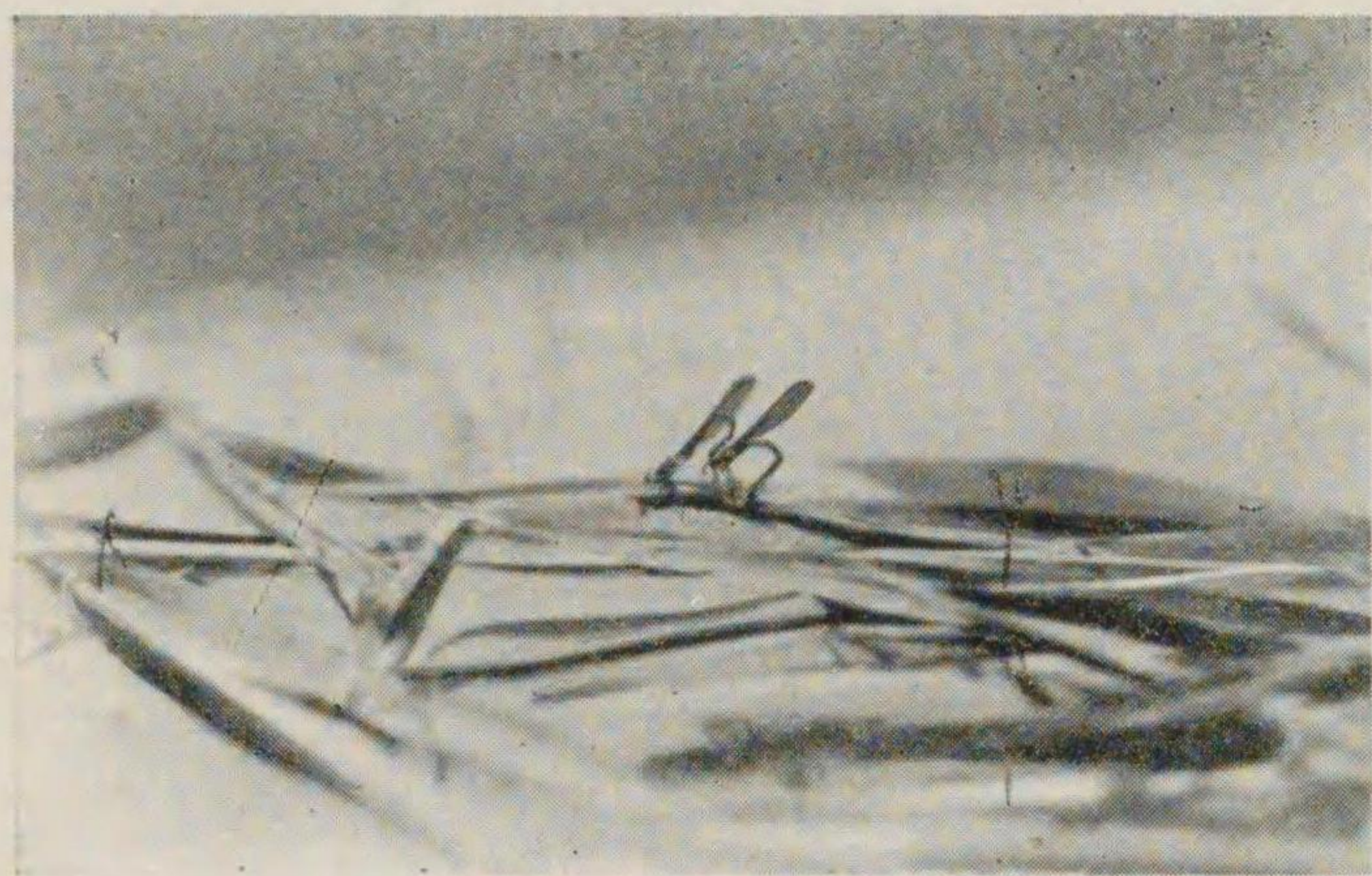
ゾ」と飛んだ疍違ひをして、益々水浴をやらしたものだ。だが賢明なる現代の讀者諸君諸姉よ！如何に下等な蟲けらの蜻蛉でも、尻の先で水を飲むテナ藝當は出來つこないで、尻で水を飲むのであるといふのが實は雄の愛を受けて既に母となつた雌蜻蛉が、お産をしてゐるところなのである。それを知つてか知らないでか其處までは判らないが、「とんぼうが尻で水飲む……」とやらなかつたのは、一茶にとつての大きな幸福だつたと云つてよからう。

餘談はさて置き、斯様にして蜻蛉の母親は獨りで水中に卵を産むが、又時に依ると御亭主に手傳つて貰つてお産をする事がある。元來蜻蛉の男といふ奴は、異性に對しては頗る親切者で一旦性交を終つても直ぐ失敬を極め込む事なく、自分の尻の先の鈎かぎで相手の首つ玉を挟み、數時間も一處に新婚飛行をやつてゐる。そして愈々細君のお産となると、御亭主は空中から細君の體を釣り支へてゐる。また寫眞に出してある或るトウスマイトンボの類などだと、雌は水草の莖に卵を産むのであるが、御亭主は御覽の通り尻の先で細君の首つ玉を挟んで、水の中へおつこちないやうに支へてゐる。子を産むのは女の役とばかり、細君の苦しみをよそに外を遊び歩

く人間の男共よ！ 蜻蛉の爪の垢でも煎じて飲むがいよ。さて卵からはやがて仔蟲が生れる。此の仔蟲も蜻蛉によつて姿も色々だが、概して灰色の平つたい、眼ばかりギョロギョロした誠に醜い姿の持主で、ヤゴとかタイコムシとか呼ばれてゐる。而もその面構へ通り性質も至つて貪慾殊に面白いのは奴の持つてゐる下唇で、これが頻る長く而も先端まっさきに釘拔もどきの鈎がついてゐる。彼奴は平常はこれを口の下に折り疊んでゐるが、何か獲物——小蟲、小魚、おたまじやく蝌蚪等々——が近寄ると、下唇をニューツと突き出して捕へて食ふ。そんな譯で水の中にある時は、養魚家などには害蟲と見做されてゐるけれど、さて一旦水におさらばして親蜻蛉となると——仔蟲は大抵二年から三年位水の中にある——今度は蚊や蠅のやうな害蟲を取つて食べて呉れるので、忽ち益蟲の名を奉られて尊重される。然しそれは人間といふ我儘動物が勝手に決めた事。蜻蛉自身は何も御存知ない譯で、若し彼にして人語が判つたら、「へ、餘計なことさ」と鼻先で笑ふ事だらう。

蟲界カメラ行脚(六)
蜻蛉の生活

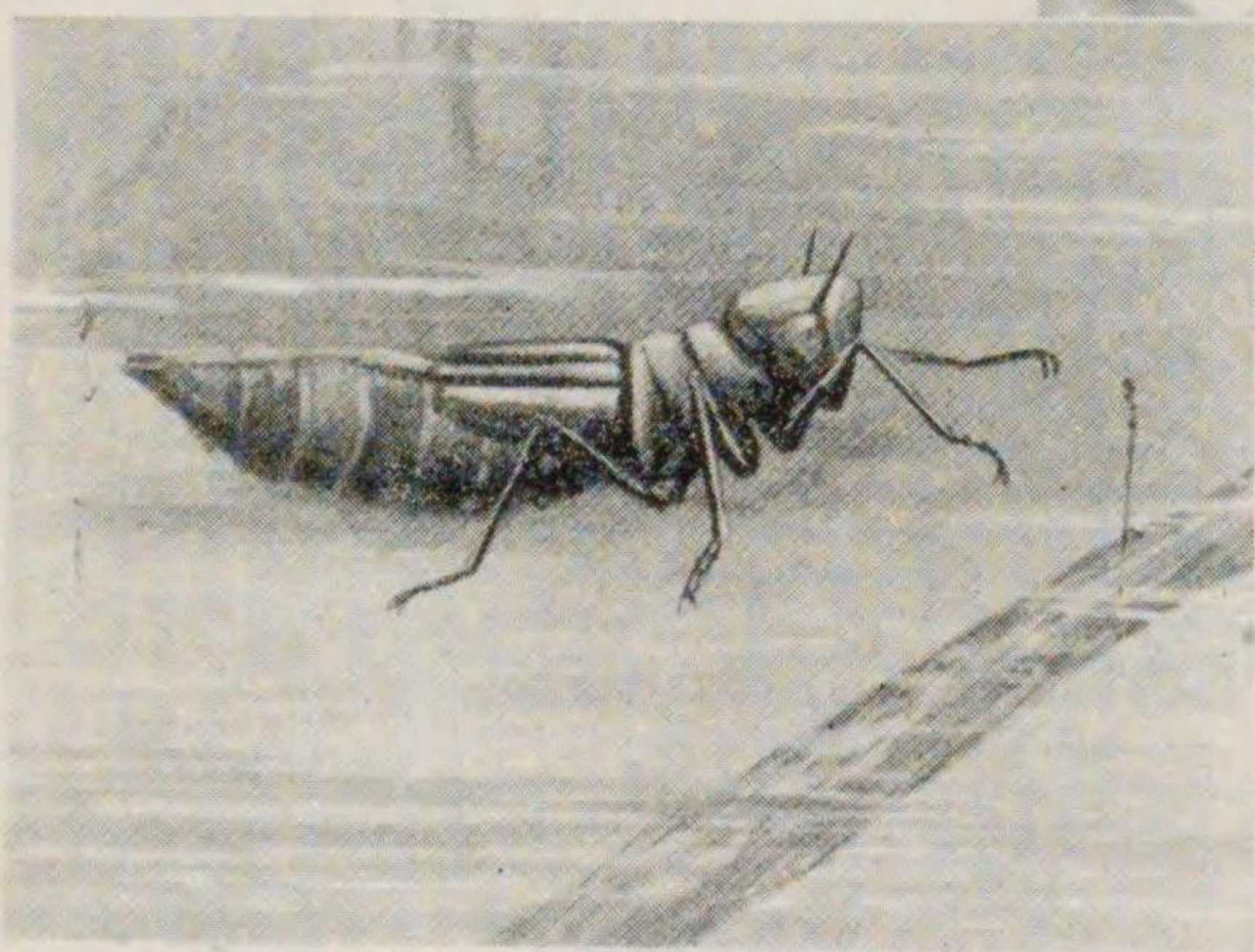
水草の莖に卵を産み附けて
あるおつれんさんぽ



→ 草に這ひ登り羽化昇天を
待つてゐる蜻蛉の若蟲



獲物を待ち伏せてゐる
蜻蛉の若蟲たいこむし



蟬はソロイスト

蜻蛉の生活がすんだから今度は蟬の生活へとレンズを向けよう。尤も蟬にも随分澤山の種類があつて、日本でも百七十種ばかりもある。だが是等數多い蟬の特徴ともいふべきは、その雄に限りお腹に立派な發音器をもつてゐて、あの時に喧ましい、又時には寂しい聲を出す事である。斯様にして彼等は松蟲、鈴蟲、蟋蟀など、所謂秋の鳴く蟲と共に、蟲界樂壇一方の重鎮をなしてゐる。而も秋の蟲が二枚の翅を擦り合せて妙音を奏で出すのと違つて、蟬は腹で唱ふので、立派な獨唱家といふ事が出来る。

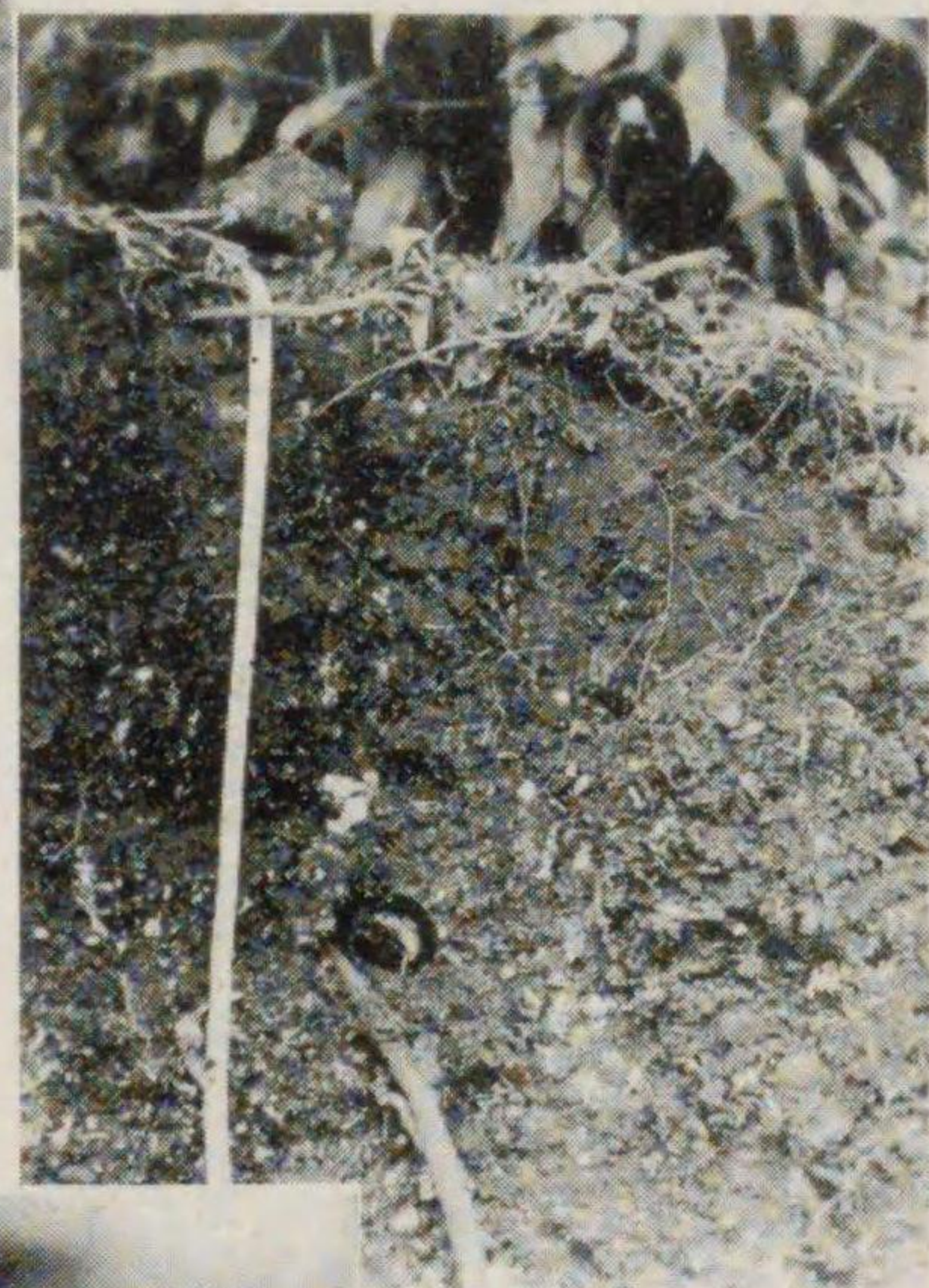
處で此の吾等のテナーならぬ自然のソロイストも其前半生を見ると寔に榮えぬ生活者の一員であるばかりか、又意外な長命の持主である事が知れる。普通蟬の雌はお尻の先に細い鋸のやうな二本の針を持つてゐて、これで樹の若枝に割れ目を付け、其の中に十粒内外の平たい卵を産み込む。此の卵からやがて白い細長い小蛆のやうな仔蟲が生れる。此の仔蟲は枝を傳つて地

面へ降り土の中へと潜つて行き、樹の根から養分を吸ひ取りつゝ大抵二三年から五六年といふ、可なり長い年月を土の中で送る。それは蜻蛉が水の中で長い年月を暮すのと同じである。斯くして充分成長し切つた年の夏の夕べ、彼は地上に這ひ出して来る。愈々久しい土籠にも等しい生活から榮えある昇天の好機が来たのである。だが諸君、昇天と云つてもあのすがすがしい装ひの蟬がいきなり土の中から飛び出すものと早合點してはならぬ。土から出て来たものは御存知でもあらうが、背中の圓い眼ばかりギョロギョロした、まるで仙人か懷疑派哲學者のやうな面構への見るから爺むさい風采の持主である。

此の哲學者はその風采通り晝間を避け、夕方から宵の八九時を選んでその棲家を出る。そして一度出口の處でそつと四邊を見廻して様子を窺ふ。何か變つた事はないか、自分をやつつけようとする者は居ないか、そんな事を考へてゐるのだ。やがて大丈夫と見極めが附くと、彼はやをら穴から這ひ出し、今度は後を見ずにすたすたと歩き出す。そして手近にある樹の幹、垣根、塀、何でも垂直なものを見付けて、サツサと登り始め、いゝ加減上ると、じつと體を休め

蟲界カメラ行脚(七)
蟬の生活

土中の顔らした油蟬の若蟲

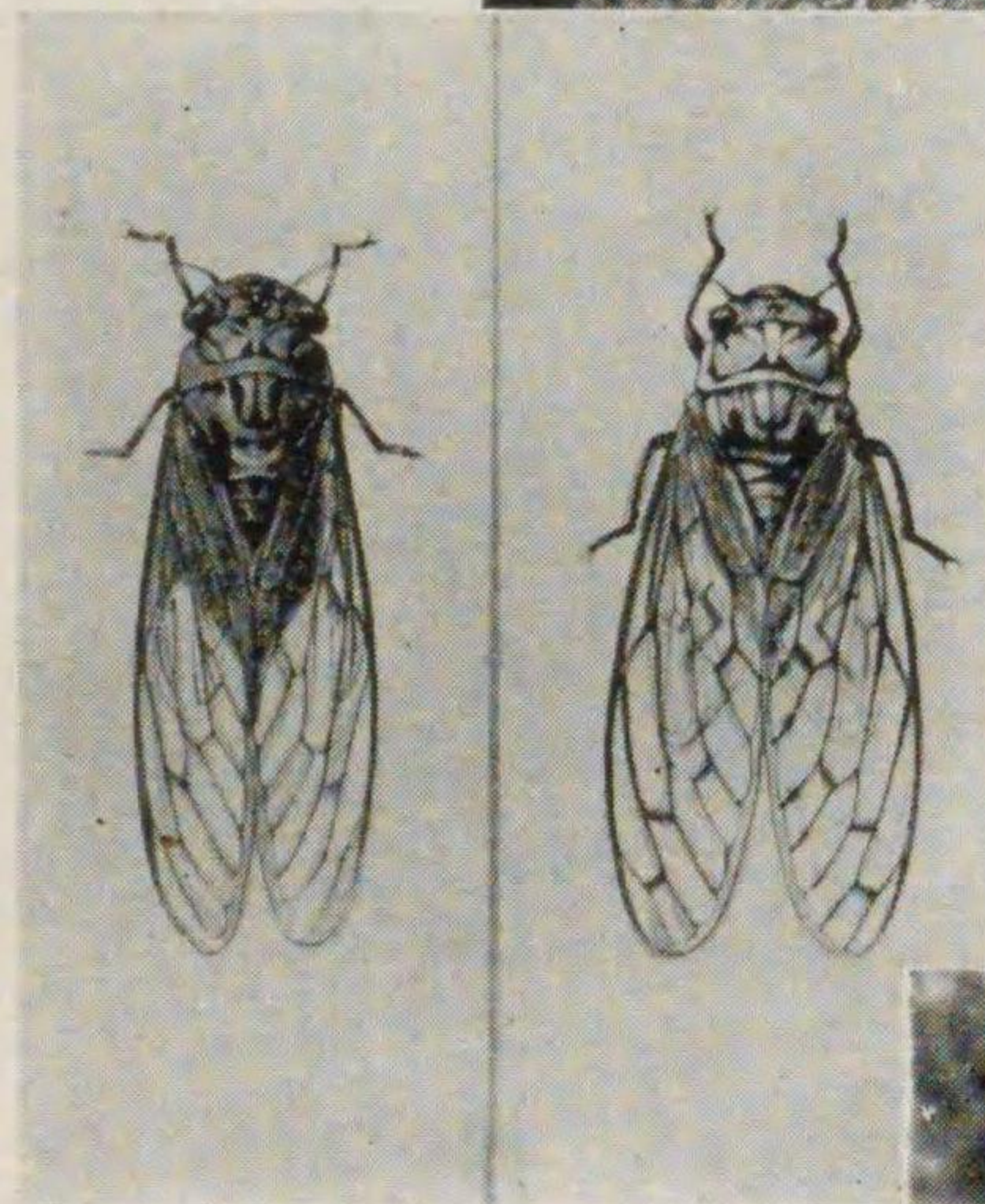


↑ 地中の若蟲

↑ 樹の幹に這ひ登つて昇天を待つ若蟲

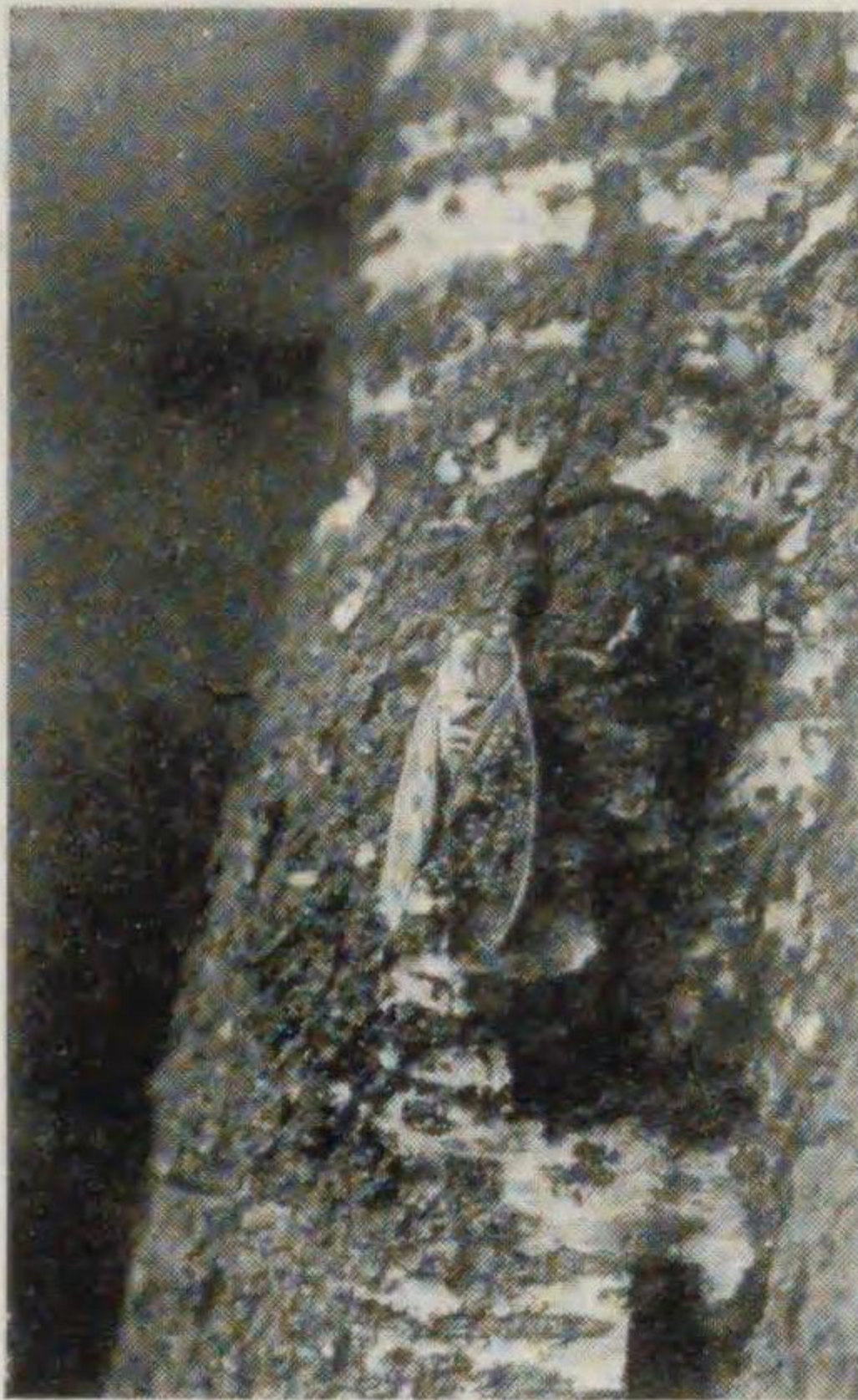


↑ 哀愁聲樂家ひぐらし



↑ 逝く夏を惜しむと謂はれるつくつくぼうじぜみ

→ 樹上に休む油蟬



て動かなくなつて了ふ。

斯うして彼は愈々羽化昇天の時を待つのである。やがて其時が来る。先づ背中の中が縦に割れて、中から親蟬の頭と胸とが盛り上るやうに出て来る。次に前足、胸全體、次は後足と、一瞬の休みもなくぐんぐんと出て来る。そして或るところまで来ると、彼は急に殻から足を外して仰向け態にひつくり返り、最後に後足を抜き出すと、うんと腹に力を入れて起き直り、前足を伸ばして再び殻にすがり附く。

斯うして彼は仔蟲時代の古着物を脱ぎ棄てたばかりの時は、體は淡緑を帯びた白色で、寔に水々しい鮮かさを持つてゐるが、それも暫くの事で、十分二十分と経つにつれて次第に蟬固有の色や斑が現はれ、縮んだ翅も見ると見る見る伸びて、約一時間の後には立派な一匹前の蟬となり、翌朝はもう堂々たる歌手として、戀の獨唱に餘念がない。

以上が自然の歌手蟬君の生ひ立ちの略史であるが、斯様にして土の中から生れて来る歌手は皆雄性で、雌性の歌手は一匹も居ないのが彼等の世界に限らず、秋蟲の仲間でも同じ規則であ

る。何故に彼等自然の樂師や歌手は雄性に限られてゐて、雌性の樂師や歌手が居ないのか、此の問題は頗る興味ある事で、男の立場から云へば、人間に限らず女性は總て能力が劣るから……と云ひたい處だが、實は左に非らず、一般に蟲の世界、否人間以外の下等動物仲間では、雌の勢力が雄のそれより遙か優つてゐる事、殊に雌の数が少ない事、言ひかへれば雌の拂底は、雄の間に於ける戀の競争を激烈にし、いつとなく、遂に雄をして立派な樂師や歌手に仕立て、雌性の前に頭を下げさせたのである。此の事實は蟲に限らず、近來流行の小鳥を見ても判るであらう。

ジャズ、戀のソロ

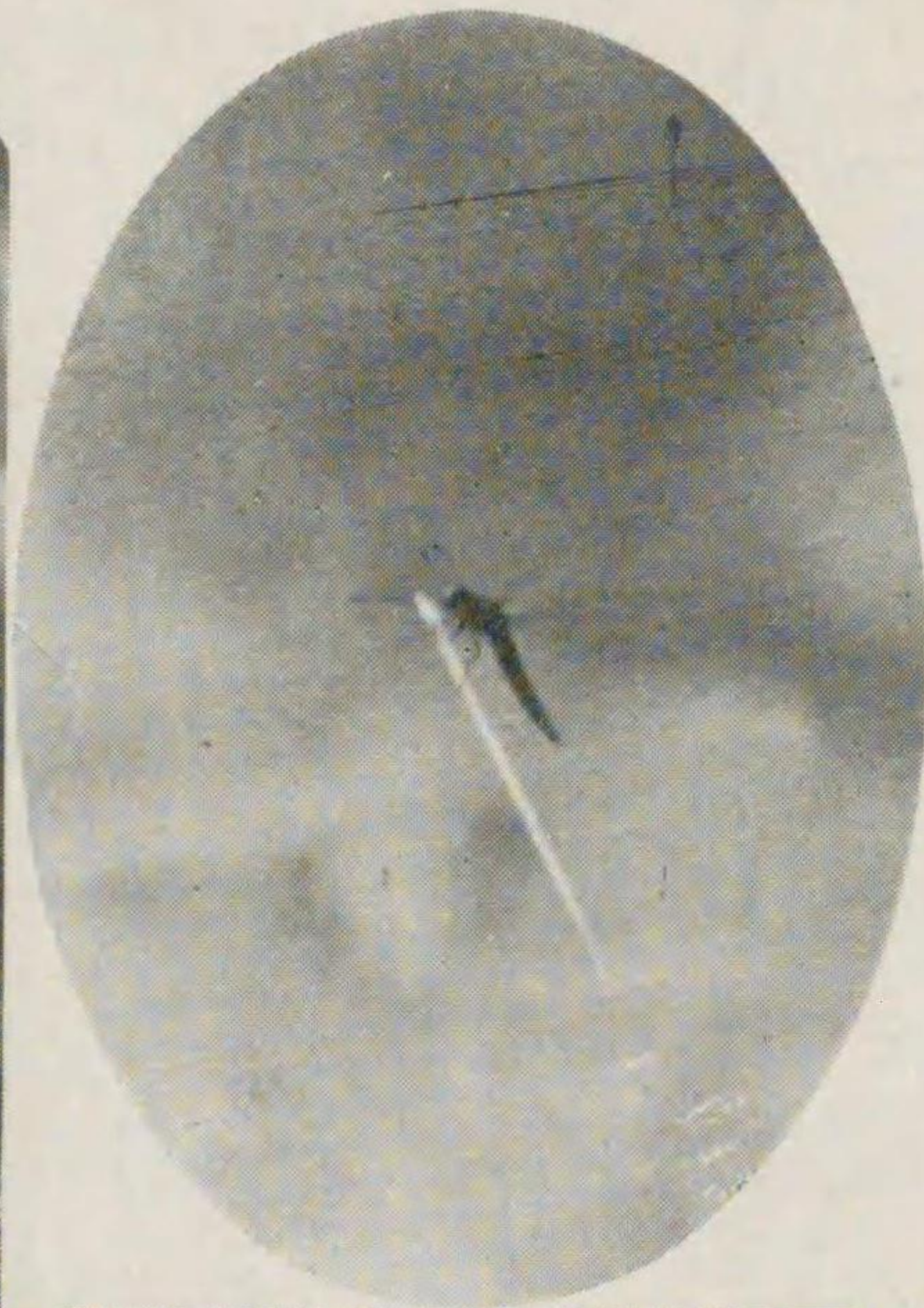
蟲界カメラ行脚の稿も回を重ねる事茲に八回、世は既に秋に入り、窓を排して耳をすませば蟲聲降るが如く頻りである。私の足は自らに秋の野へと向つてゆく。

カメラを抱いて野に立てば、陽は赤々と輝いて未だ却々に衰へさうに見えないが、如何に威

蟲界カメラ行脚 (八)

秋の野のスケッチ

す探を手相の戀てつ泊に先の竿 蛉蜻赤



雄のりきゝさぶ呼を雌に末葉



↑ふてきろぐまつふ醉に戀

←産おのふてきろぐまつ



張つたところで、所詮は残暑である。

土の香、樹々を渡る風にゆらぐ葉ずれの音、否虚勢を張つてゐる太陽そのものゝ色の中に、私ははつきりと秋を認める。だがそれよりも秋の感を一しほ強く與へるものは、何と云つても所謂秋の鳴く蟲であらう。彼等蟲界の樂人達の雄性が奏でる妻戀の曲、それはあの鋭い百舌鳥の友呼びの叫びと並んで、秋そのものゝシムボルである。私の足許から生えてゐる草の葉末にはささきりの雄が倒さに泊つて、頻りとジヤズを奏で、石の下ではえんまこほろぎの雄が戀の獨奏に餘念がない、と又隣の葉蔭ではこれも秋の野を飾る棲黒黃蝶といふ胡蝶の雌雄が戀の快樂に陶醉してゐるかと思ふと、既に母となつたものは、弱々しいくさねむの葉に縋り付いてお産をしてゐる。又秋の陽を一杯に受けた竿の先を見ると、其處には赤蜻蛉の雄が超然として天下を睥睨してゐる。といふと大變いゝけれども、その實通り合せの雌を捉まへるべく眼をキヨロキヨロさせてゐる。その前をもう相手の決つた蜻蛉の奴が、悠々と例の新婚飛行をやつて通る。すると竿の先の奴の眼玉がグルグルと二三度回轉する「どうだい、羨ましいかネ」私は一寸

斯んな事を呟やいてみる。だが先生すましたもんだ。前足で顔をつるりと一と撫でしてキョト
ンとしてゐるではないか。

凋落、哀愁、寂寥そのものゝやうに思はれてゐる秋の野も、斯うして細かく観ると、それは
春と同じくやはり戀と性欲とを中心とした歡樂と鬭争との境である。

さて釣瓶落しの秋の日は忽ち暮れる。すると其處には晝間などの到底も及ばぬ戀の競争と享
樂の舞臺とが展かれる。陽の高い間は草蔭に隠れて鳴りを鎮めてゐた秋蟲の數々、鈴蟲、松蟲
響蟲、こほろぎ等、蟲界の樂師達は、一齊に其腕ならぬ翅を振つて、各々得意々々の演奏を始
める。鈴蟲の銀鈴、松蟲のマンドリン、馬追蟲のセロ、鐘叩のチューブホーン、かんだんのオ
カリナ、響蟲のタンポリン、等々、秋夜の野は正に蟲界樂師連の大演奏會の觀がある。

だがこの妙なる自然樂師の演奏も、その底を割つて見れば、結局は蟲界の雄性が雌性の心を
惹き歡心を買ふための腕試しの競演、も少し露骨に云へば誘惑の手段に他ならないのである。
斯うした淺間しい事は、獨り秋の蟲ばかりでなく、夏のジャズバンド蟬仲間にもあるし、又少

し高等なものでは、近來流行の小鳥の世界にもある。彼等の世界のリリカルな歌手は皆雄ばかり
で雌には一匹もない。斯様な譯で秋の蟲でも鳴くのは雄の方で雌は決して鳴かない。鳴かな
いといふよりも、假令鳴かうとしても鳴けないのだ、といふのは雄は鳴く、いやもつと嚴格に
云へば音を奏づる装置を持つてゐるが、——秋の蟲が鳴くのは、あれは獸や鳥のやうに咽喉で
鳴くのではなくて、背中に生えてゐる二枚の翅を擦り合せて鳴くので、雄の翅には音を出す特
別な仕掛がついてゐる——この仕掛が氣の毒な事に雌にはないから、鳴く事は出来ないのだ。
然し彼女等は鳴けなくても、藝なしの野暮天でも結構なものさ、戀に飢えた雄共は、日毎
夜毎に名曲を奏でて彼女等の御機嫌奉仕をやつて呉れる。それは男性から見ると寔に情なくも
淺間しさの限りだが、女性の立場になつて見れば、雄共をして立派な音樂家に仕立てたのは彼
女等の力だとも云へるし、又男性をして女性の前に跪かしたとも云へる譯で、天下の女性
たるもの大いに意を強ふして可なりである。

秋を唄ふ可愛い人氣者

前稿で秋の野を賑はす蟲界の戀の種々相を御紹介したから、今度は彼等蟲界の樂師中での重鎮連に就いて、聊か解説をして見よう。

一と口に秋の鳴く蟲と云つても却々數があつて、一寸やそつとでは説明し切れないが、普通蟲屋さんが賣つてゐるのは、鈴蟲、松蟲、闇魔こほろぎ、鐘叩、草雲雀、金雲雀、大和鈴、邯鄲、螽斯、轉蟲などである。此の他に未だ一寸人の知つてゐるものでは、馬追蟲一名すいつちよ、青松蟲などといふのがあるけれど、餘り問題ではない。

處で斯うした鳴く蟲の中でも一番人氣のあるのは、何といつても鈴蟲が筆頭で次が松蟲である。一つは銀鈴を振るやうな涼しい音を立て、一つは恰度マンドリンのやうな軽い音を出す。そして此の二つの中でも、鈴蟲は特に婦人から寵愛されてゐるといふ面白い統計が、蟲の會兩三年の蟲賣りの成績から明らかとなつた。然し何にしても此の二つは態々解説すべく餘りに知

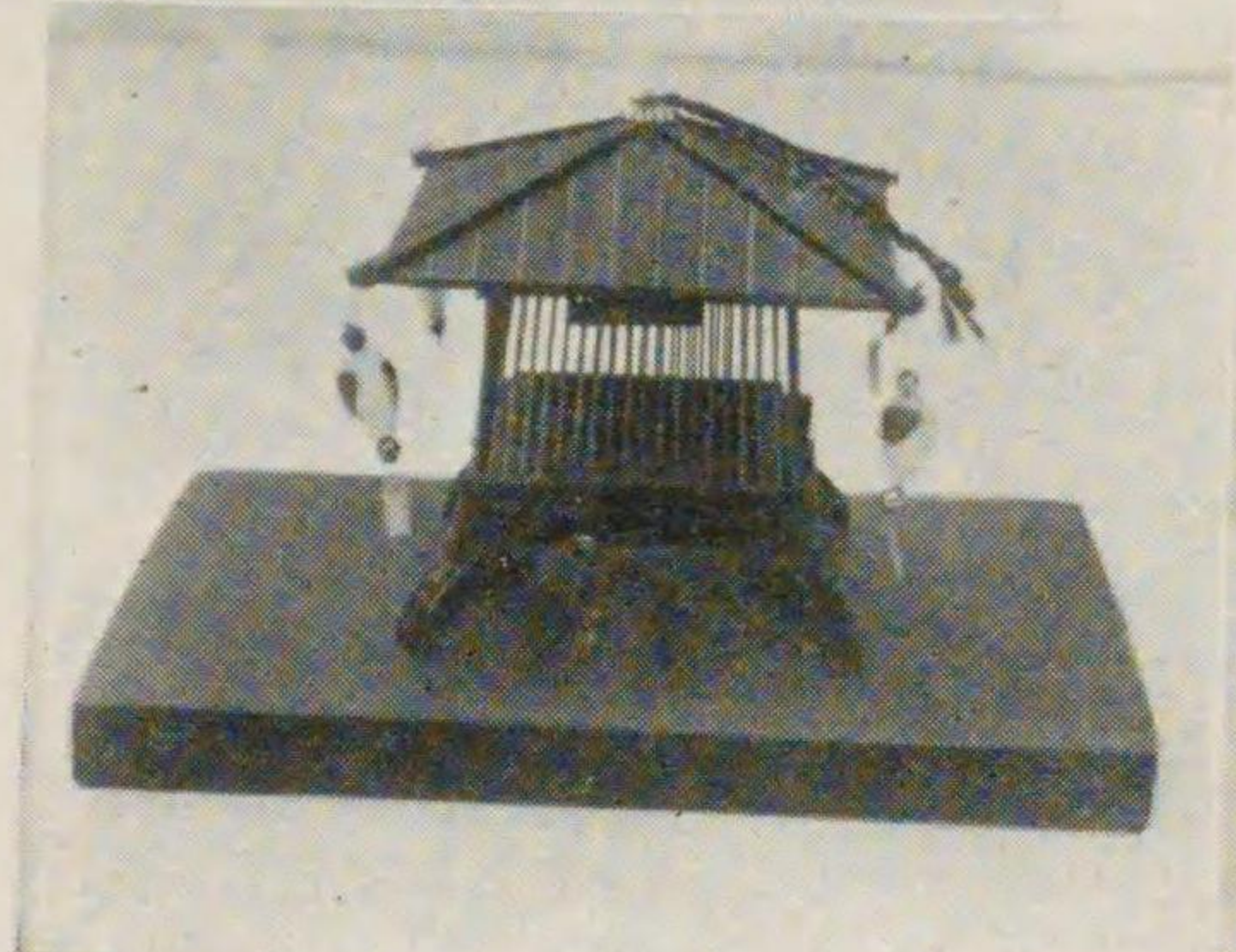
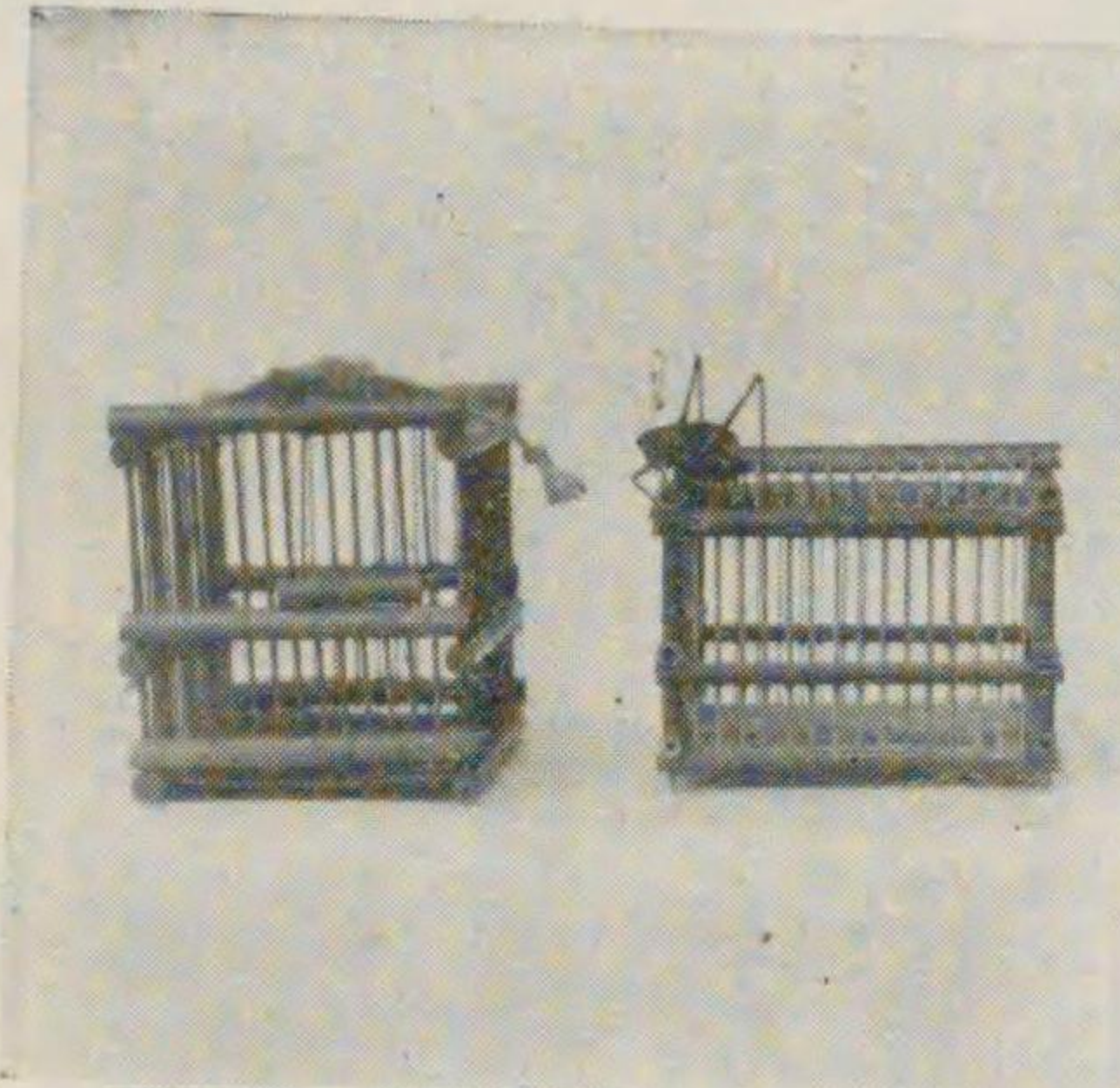
蟲界カメラ行脚 (九)

秋の鳴く蟲籠

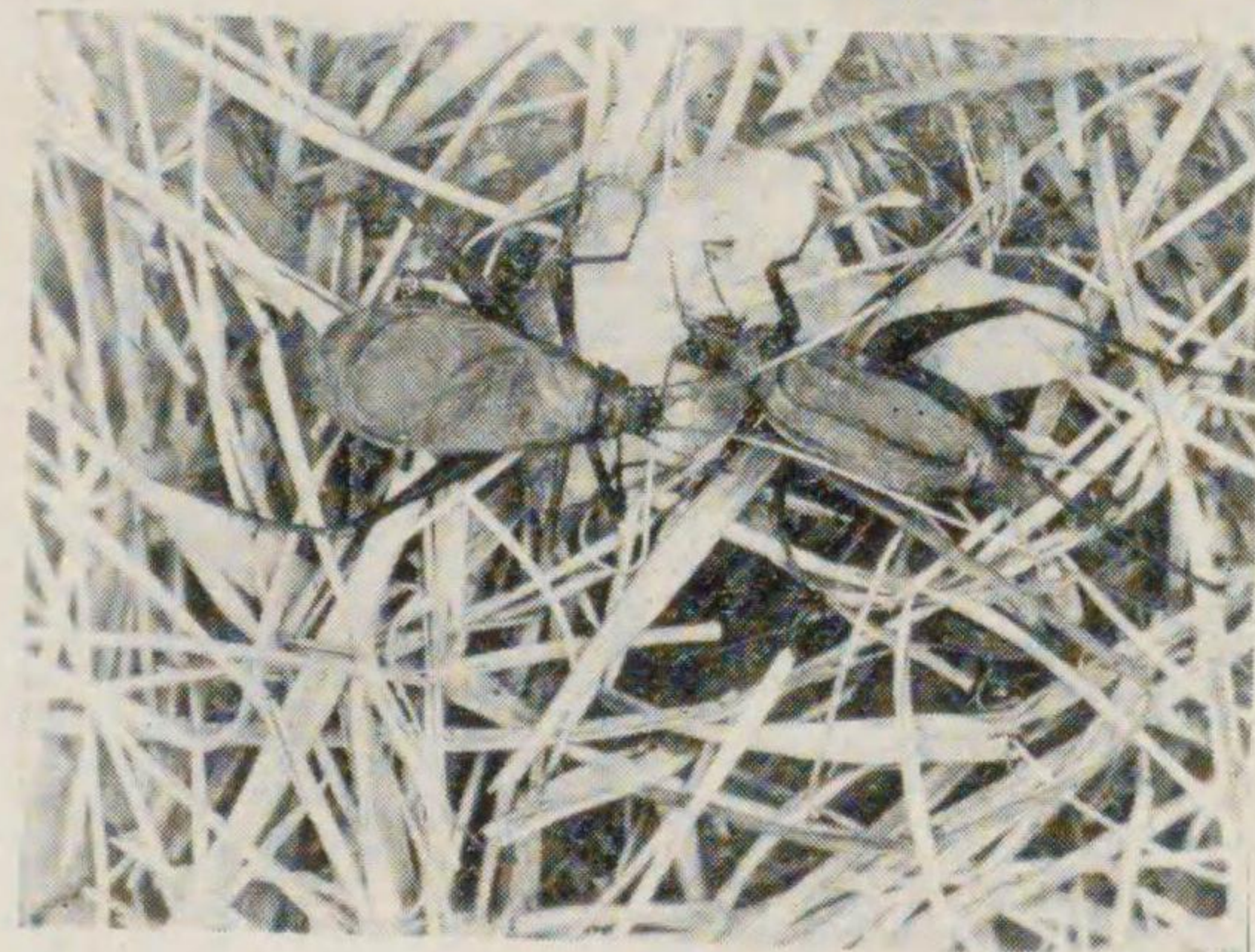
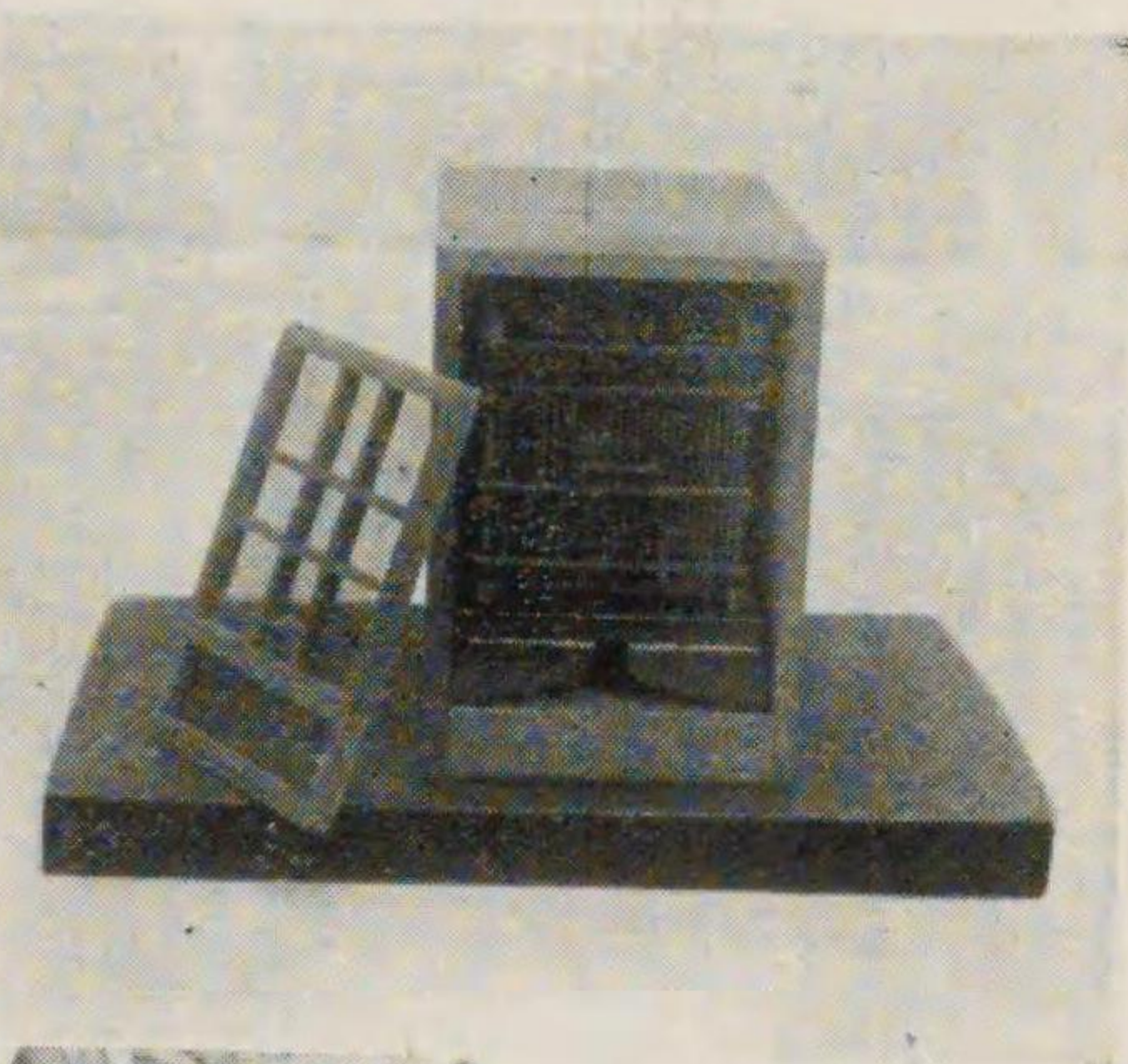


↑ 蟲松るゐに中の叢

り造クツラバな末粗お
↓ 籠のスリギリキの



↑ 籠の蟲松、蟲鈴たし盡を贅



(雄が左雌が右) 婦夫蟲鈴

↑ 鶯の籠になぞらへて
造られた草雲雀の籠

れすぎてゐる。

又ずつと下つては螽斯と轡蟲とがある。前者はがつしりした體格と男性的な音を出し、後者はその姿の上品さと偉大さに加へて、勇壯な奏樂者として一部の愛蟲家連から愛せられてゐるが、螽斯の方は性質が荒い上に、奏樂が美しくくない爲、又轡蟲の方は柔和しいが少し喧まし過ぎるので、餘り一般には尊重されない。そして其いれ物なども、ブツ付け細工のバラック式の安物で、大小便の掃除もしてやれないといふ始末、何といつても聊か氣の毒である。尙一般には知らない人も可なりあるらしいが、私は草雲雀、邯鄲、鐘叩、大和鈴の四樂師を推獎したい。草雲雀は鳴蟲界でも私の殊に愛してゐるもので、身の丈僅かに三分内外、淡黄色い小豆粒程な小蟲だが、その雄の奏でる妻戀の曲の音は、玲瓏透徹、正に黄金の豆ベルを鳴らすかと思はれる。毎年東京附近では八月二十日前後からひよつこり出て來て、植込みの中で晝となく夜となく、殊に曇つた日の晝間によく鳴く、蟲籠なども此の蟲のためには、實に贅澤なものが造られてゐる。

次に邯鄲も亦草雲雀に負けない美曲の演奏者である。大きさは草雲雀よりもいさし大きくて五六分、全體が淡緑で少し白味がかり、細つそりとした見るから弱々しい姿の持主である。而もその鳴く音は、ルールーといふ實に輕妙な音の連續から成り、正に「夢のやうな聲」とでも例へたらば宜いであらう。これも晝夜の別なく鳴く蟲で、前者同様立派な籠に入れて日本座敷の床の間に置いて聽くに適はしい樂師である。だが此の樂師惜しむらくは自然界では大豆や煙草の葉を喰べ、又その莖を傷けて卵を産むので、害蟲の名を冠せられ、應用昆蟲學者といふ恐いをぢさんから睨まれてゐる。

秋の一日郊外の屋敷町を歩いて見ると、庭の周圍にめぐらした生け垣の繁みの間から、チンチンと、恰度銀の延板を金の小錠で叩くやうな音が洩れて來るのを聞く事がある。此の妙音を奏でる樂師の正體は、身の丈四分ばかりの淡褐色の小蟲で、その名を鐘叩といふ。その音が低い上にちと寂しいので餘り知られないけれど、秋の野を飾る小樂師として見のがす事の出來ない一員である。

次に大和鈴、この樂師は體の長さ僅か二分ばかりの黒ずんだ細形の蟲だが、その鳴く音は深山に清水の流れを聞くやうな奥幽しさを持つてゐる。籠に入れて枕元に置いて聽いても、少しも喧ましい事がないといふので、此の樂師の奏樂の優しさが想像されるだらう。

さて斯様に秋の蟲にも數々あるが、彼等は何れも昆蟲學上直翅類といふ部類に屬する一團の蟲である。尙鳴く蟲として「みみず、鳴き」の名で知られてゐるものに「おけら」がある。彼は初夏五月と、晩秋十月頃とに臺所の落水の邊や、溝板の下でみみずと同居し乍ら、ガーガー……と如何にも壓へ付けられたやうな寂しい音を出して妻を呼ぶ。そして古來歌や俳句に詠まれ、文人雅客の注意を惹いてゐるが、惜しい哉居所が悪い爲、みみずの鳴き聲と誤られ、あたら功を奪はれてゐるのは氣の毒である。

眞青な惡魔

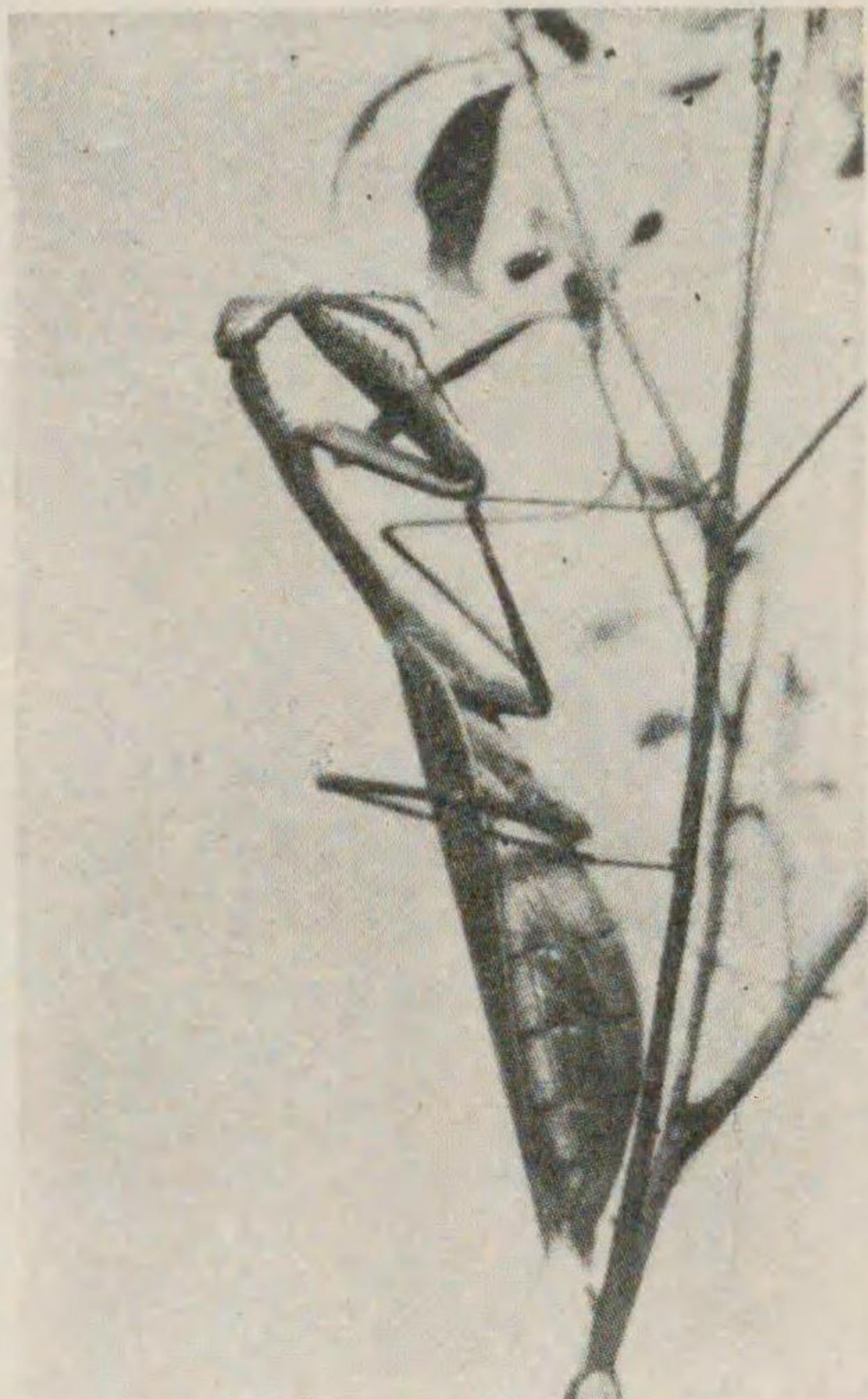
呂宋島の沖に生れた颱風といふ奴が、極東の日本を頻々と見舞ふ九月の十日前後になると、

鳴く蟲と混つてひよつこり現はれる眞青な悪魔がある。

彼はその名を蠘螂かまろりと云つて、蟲界の名樂師連と同じ直翅類に籍を置いてゐるが、實はツンともシャンとも音一つ出す事の出来ない藝なしである。だがその異様な姿と徹底した負けじ魂と尙もう一つは、先年千葉縣下で蠻勇を奮つて天下を騒がせた殺人鬼「鬼熊」が振り上げた大草刈鎌に似た武器——實は前足——を持つてゐるので有名である、實際彼は此の武器を使つて、小さなところでは蠅、虻から、大きなところではいなご、ばつたのやうなものを、苦もなく壓へ附けて食ふ。そればかりではない。時には自分より遙か大きくて強い小鳥は愚か、どう藻掻いたつて勝つ見込のない萬物の總大將人間様に對してさへも、反抗的態度を採る。その鼻つ柱の強さと來たら先づ近來の支那政府と比べたつて決して退けは取らない。

さて前にも云つた通り、九月になると彼は何處からともなくひよつこりと出て來て庭の植込の、間垣根などに泊まり、胸を半ば立て鎌形の前足を折り疊んで、まるで御祈りでもしてゐるやうな神妙な様子で、四邊をじつと見張つてゐる。そんな譯で何にも知らない歐洲の御百姓さ

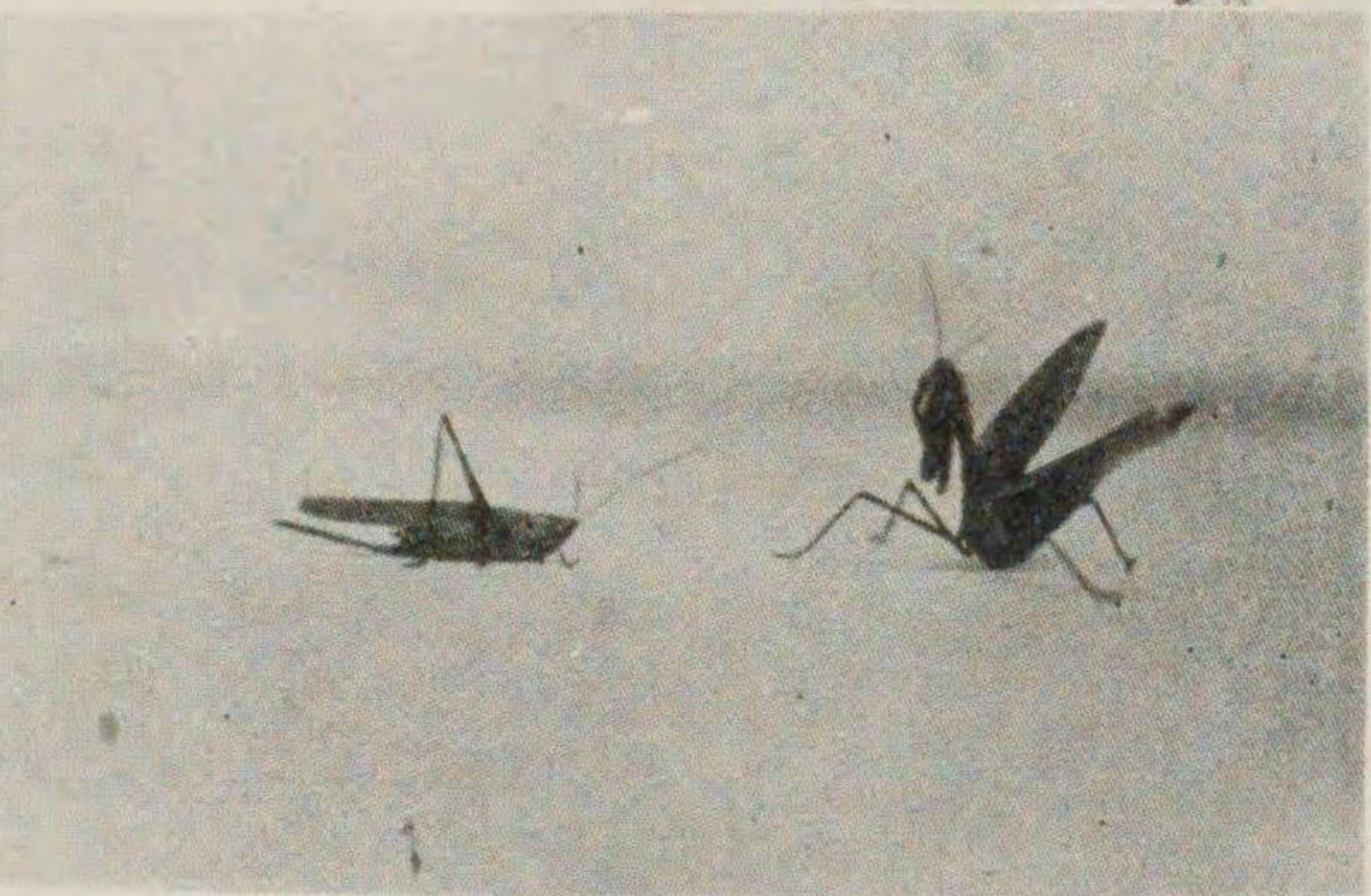
蟲界カメラ行脚(十)
蠘螂の生活



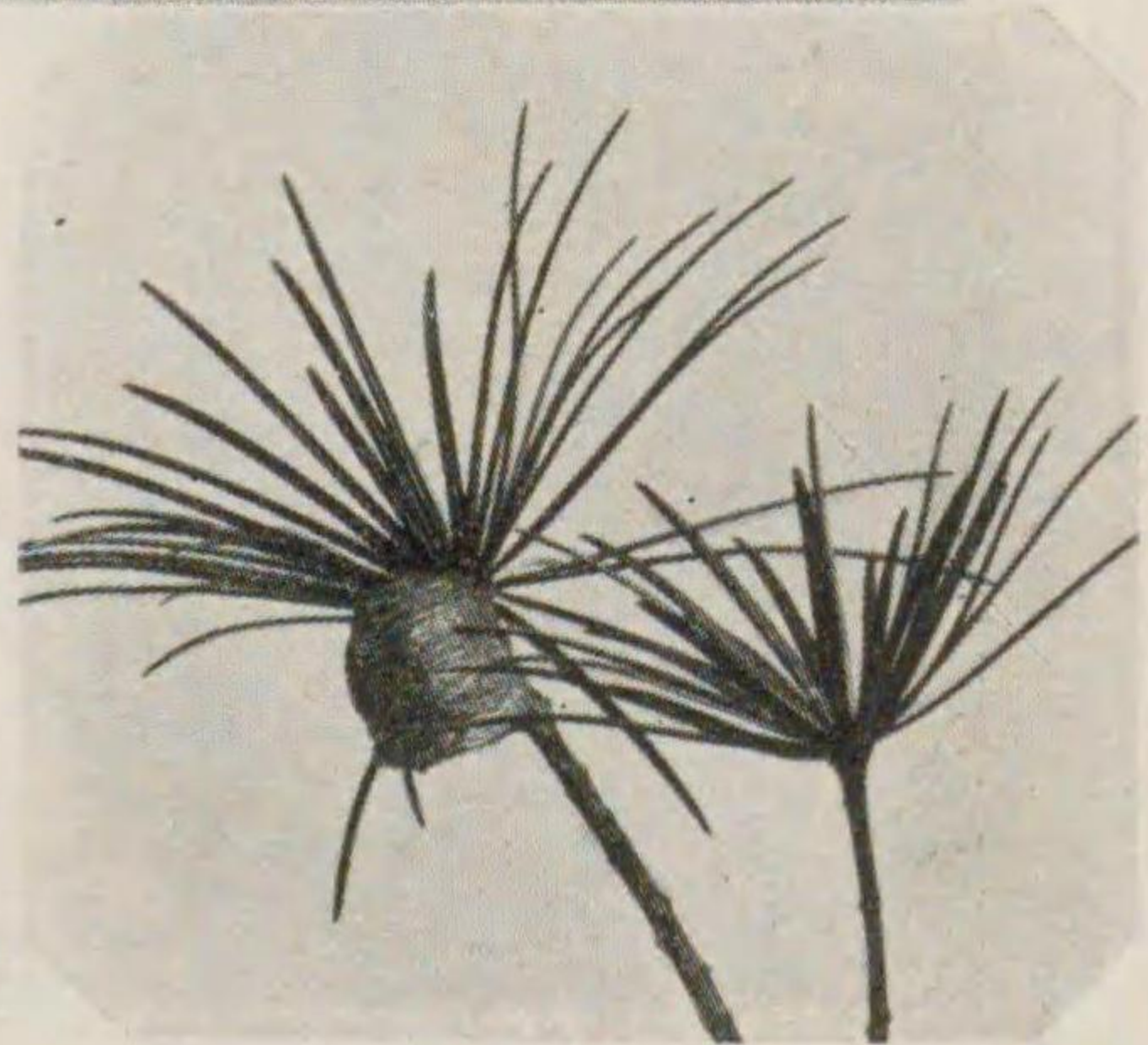
→ お祈り姿で獲物を待つてゐる蠘螂
← 雄を頭からガリく噛つてゐる蠘螂の雌



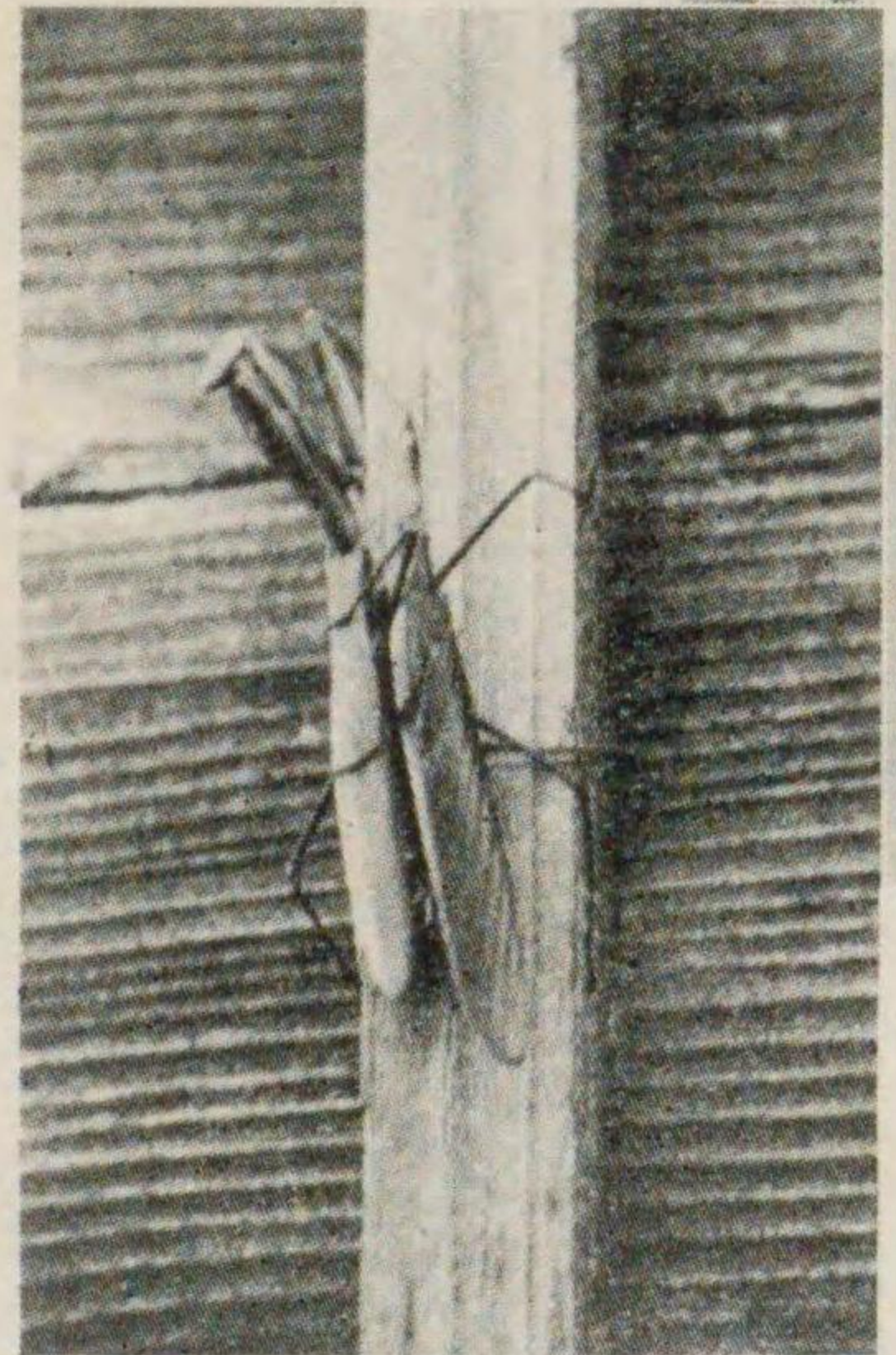
← 蝗蟲を脅かす妖姿



→ 横の枝に産附けられた卵鞘



↑ 首無しで雌(左)と交尾してゐる蠘螂の雄(右)



ん達は、此の蟲に對して「祈禱者」の名を奉つて尊敬してゐる。然しどつこい彼奴が祈禱者だなんて何處を押したら出る言葉か伺ひたいもんだ。彼奴は斯うして如何にも神妙さうな風を裝つてゐるが、若し何か腹の足しになりさうな獲物が寄つて來やうものなら忽ち本性を露はし、例の鬼熊もどきの鎌足で引つ捉へ、先づその首筋の邊からモリモリと嚙り出す。少し大きな蝗蟲いなごなどになると苦しませに、刺だらけの後足をバタつかせて必死に蹴つたりするけれど、當の蟪蛄先生は平氣なもんだ。何處を風が吹くかといつた涼しい顔附で、ポリポリ音をさせながら堅い蝗蟲の鎧よろひを嚙み碎くだいてゆく様子は、全く慘忍そのものである。

だが蝗蟲の生嚙りなんかは未だ屁の河童さ、此の似非祈禱者と來たら、お仲間同志頻々と嚙み合ひをやるばかりか、此の蟲の雌と來ると、戀愛の對稱の雄でさへばつたやこほろぎと何の差別もなくひつ捉まへて食つて了ふ。それどころか尙驚くべきは、彼女の大切な愛人、言ひかへれば自分の大事な御亭主を性交後、時にはその眞最中、背中から引きつり下ろしてムシヤムシヤとやつ付ける事さへもある。こんな事をいつても何も御存じない讀者諸君は、恐らく信じ

ないであらう。だが私はそれこそ大鼓判を押して保證してもいゝ程多くの實驗と觀察とを繰り返へしてゐる。兎に角一寸考へると雄が雌に喰はれる事は愚か、負けるだけでも不可思議千万のやうに思へるが、大體螻蛄では、雌は雄の二倍もある體格と腕力との所有者で、てんで相撲にならないのだから致し方がない。それに尙一層驚く可き事がある、それは性交前に又は性交中に鬼婆の爲に、頭を喰ひ切られてしまつても、猶彼は性交の遂行に努力し、遂にそれを見事にやつて除ける事だ。馬鹿を言へ、横山よ、いくら吾々とは違ふ螻蛄の雄だとして、首無し男が女に迫るなんてべら棒な事があつて堪るもんか」と誰か仰つしやるかも知れない。一應理屈は御尤だが、事實がウンとは言ふまいよ。私は此の驚く可き事實に就いても、うんざりする程實驗し觀察してゐる。

「戀は死よりも強し」と西洋の詩人が云つた一語は、何と云つても螻蛄の雄が一番よい實例を示して呉れてゐる。

螻蛄の生活、殊に彼等の戀愛生活は正に驚異と神秘そのものである。私は今や、私の關係し

てゐる東京蟲の會々員と共に、いろいろな螻蛄を飼つて日夜その生活の研究をやつてゐる。ここではその僅かに一端を洩らしたに過ぎないが、何れその中稿を改めて「螻蛄一代記」を諸君に御目にかけて得る日が来るであらう事を記して此の稿を結ぶ。

優
曇
華
||

昭和七年五月十日印
昭和七年五月十五日發
行 刷

版
元

著 者 橫 山 桐 郎

發 行 者 大 阪 市 西 區 韮 上 通 一 丁 目 矢 部 良 策

印 刷 者 大 阪 市 西 區 阿 波 座 中 通 二 丁 目 四 番 地 井 下 精 一 郎

東 京 市 芝 區 二 木 樓 西 町 二
大 阪 市 西 區 韮 上 通 一 丁 目

振 替 東 京 一 五 六 五
振 替 大 阪 五 七 〇 九 九
電 話 一 土 佐 堀 一 六 六 九 番
一 土 佐 堀 三 一 八 六 番

創 元 社

抄目書版出社元創

十一谷 義三郎	小出 楯重	宮 ^{資夫改め} 鳥 蓬州	萩原井泉水	萩原井泉水	萩原井泉水
あの道この道	めでたき風景	佛門に入りて	旅の茶話	山川行住	京洛小品
送料 定價	送料 定價	送料 定價	送料 定價	送料 定價	送料 定價
十四錢	十四錢	十四錢	十錢	十四錢	十四錢
貳圓貳拾錢	壹圓五拾錢	壹圓五拾錢	壹圓參拾錢	壹圓八拾錢	壹圓八拾錢

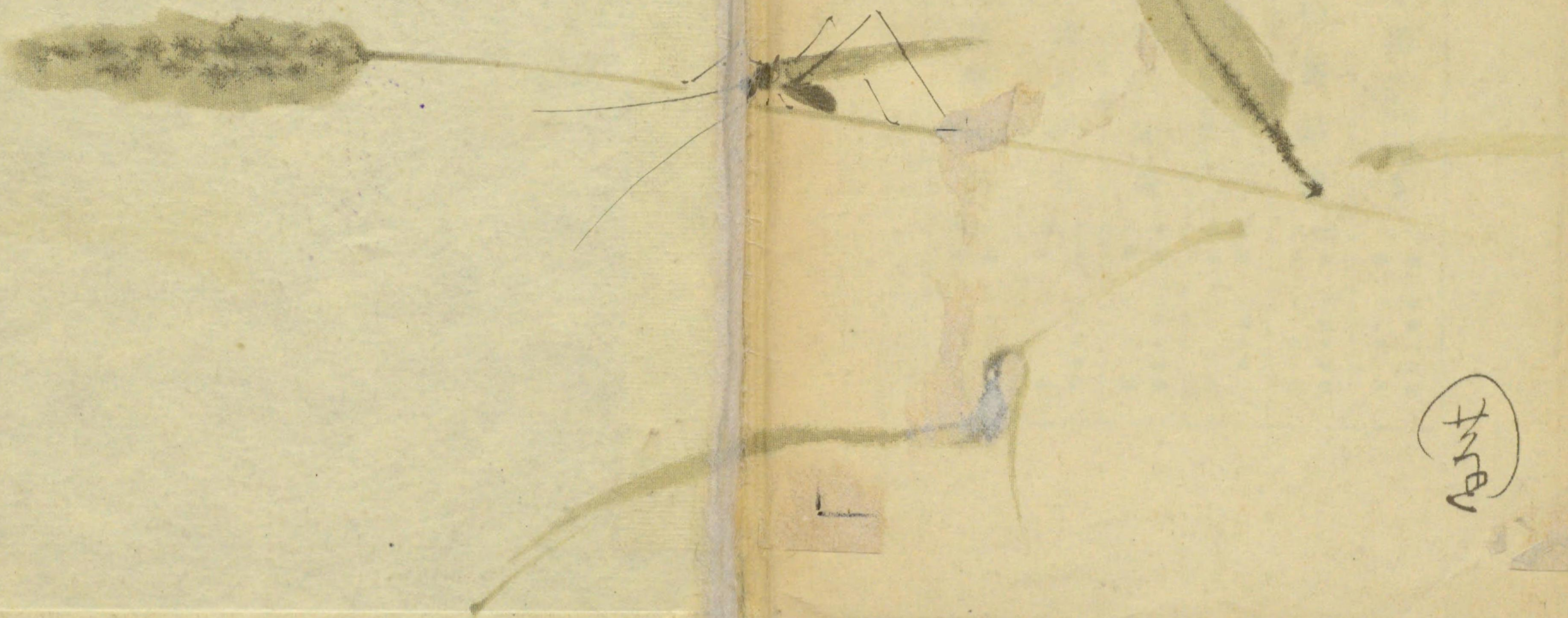
抄目書版出社元創

薄田 泣菫	薄田 泣菫	薄田 泣菫	薄田 泣菫	谷崎潤一郎	薄田 泣菫
茶話抄	猫の微笑	大地讃頌	艸木虫魚	倚松庵隨筆	樹下石上
送料 定價	送料 定價	送料 定價	送料 定價	送料 定價	送料 定價
十四錢	十四錢	十四錢	十四錢	十四錢	十四錢
壹圓	壹圓	貳圓	壹圓八拾錢	壹圓八拾錢	壹圓八拾錢

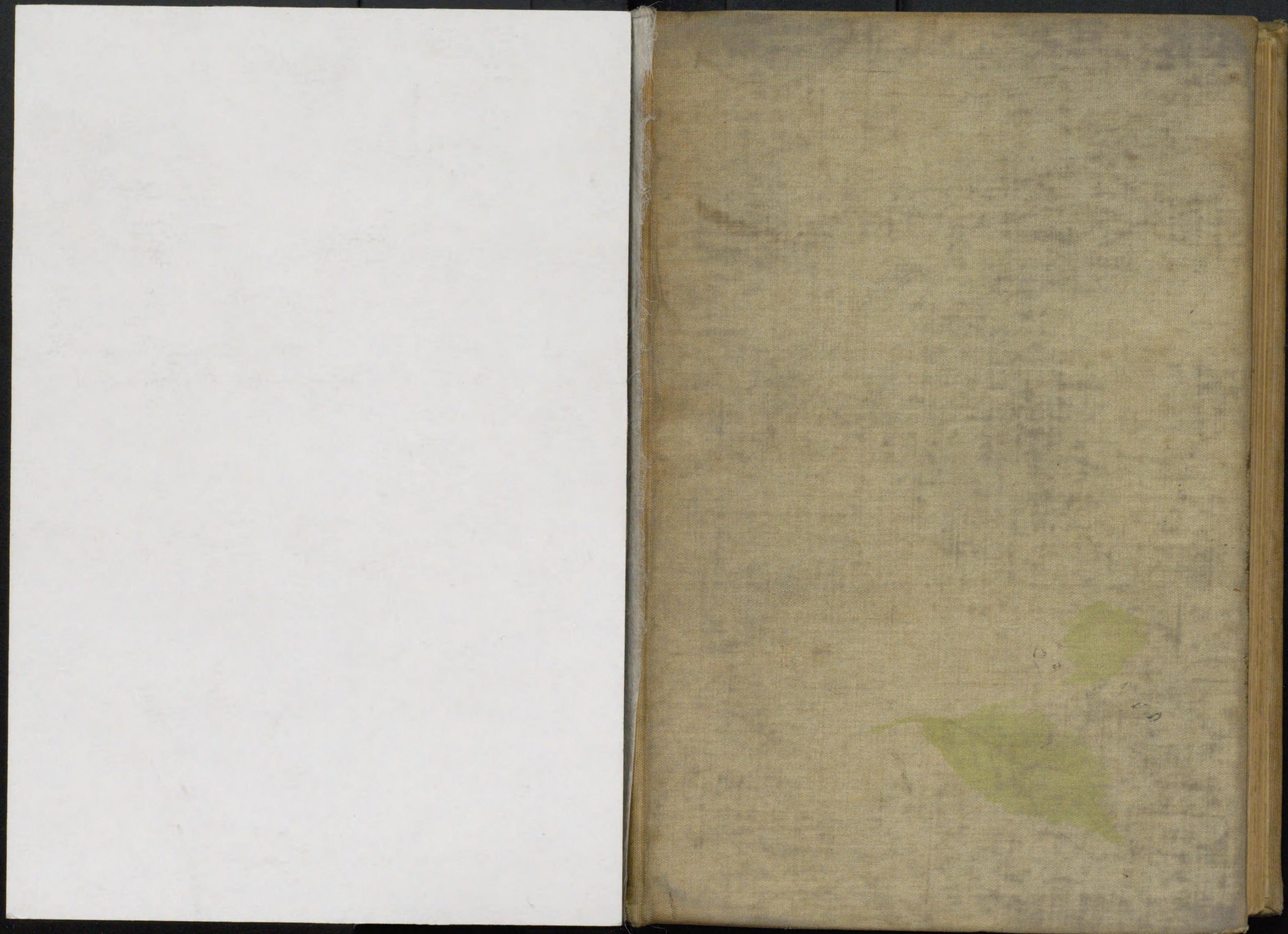
創元出版社版書目抄

荒木伊兵衛	北尾錄之助 木陽	北尾錄之助 木陽	藤井夏人	北尾錄之助	北尾錄之助
日本英語學書志	小型映畫の研究	小型映畫の知識	樂器名曲解説	日本山岳巡禮	近畿景觀
			<small>ビクター・コロムビア パルロフォン・ポリド ール 電氣吹込盤索引附</small>		<small>阪神 大和河内篇 各册</small>
定價 七圓五拾錢 送料 二十八錢	定價 三圓五拾錢 送料 二十四錢	定價 二圓五拾錢 送料 十四錢	定價 三圓五拾錢 送料 二十四錢	定價 二圓五拾錢 送料 十四錢	定價 壹圓八拾錢 送料 十四錢

622
41



Handwritten text in a circle, possibly a signature or initials, located in the bottom right corner of the right page.

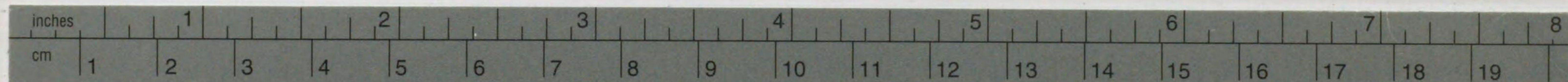


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

